

春は花夏は橘秋は菊何れの露に置くものぞ憂き

と、斯様に遊ばしける。御筆のすさび、道風が震ひ筆(32)も斯くやらむと、目を驚かすばかりなり。人々これを見て、「如何さまこの人は、古(31)の玉藻の前(33)か恐しや」などと申す。さる程に又御杯出でければ、舅御前(34)聞食し、姫君に御獻しありて、「御肴申さむ」とて、「我が所領七百町とは申せども、二千三百町の所なり。一千町をば姫君に參らす。又一千町をば宰相の君に取らすべし。残る三百町をば三人の子どもに取らすなり。百町づつ分けて取れ。これを不足に思ふ者あらば、親とも子とも思ふべからず」と仰せければ、兄御達聞召し、合はぬ事とは思へども、貴命なれば力無し。今よりしては宰相の君を總領と思ふべしと、三人同心し給ひけり。さる程に姫君には冷泉を初めとして、女房達二十四人附け奉り、宰相殿の住ませ給ふたけの御所へ移らせ給ふ。

斯くて過ぎ行きける程に、或時宰相殿仰せけるやうは、「如何様御身は只人とは思はぬなり。御名告り候へ」とありければ、有りの儘に語らむとは思召しけれども、繼母の名を立つるにや當らむと思ひ、彼此取紛らかし名告り給はず。その後姫君は母上の御菩提懇に弔ひ給ふ。斯くて過ぎ行く程に、公達數多設け給ひて、御喜び限り無し。これにつけても捨てられし故郷の父

御前を戀しく、御公達をも見せ參らせたく思召しける。

さる程に故郷の繼母御前は、慳貪者なる故に、召使はるゝ者も、彼方此方へ逃げ走り、後には貧しくなり、一人持ちたる姫をも訪ふ人も無し。御二人の中も悪しくなりければ、「貧しき住居何かせむ、心に残る事も無し」とて、父御前は何處とも知らず修行に立ち出で給ふ。つくづく物を案ずるに、去りにし北の方、子無き事を悲しみ、長谷に詣で、さまざま祈り、観音の御利生により、姫を一人設けしに、母空しくなり給ひて後、あらぬ不具付きけるを、不思議に思ひしに、親ならぬ親とて、恐しや、色々に讒訴を言ひけるを、眞と思ひ追ひ出しつる事の不憫さよ。その身が人のやうにもあらばこそ、何處の浦に住み、如何なる憂き目をも見るらむ。不憫の者かなと思召し給ふ。さる程に父御前長谷の観音へ御參りありて、「鉢かづきの姫未だ浮世に在るならば、今一度廻り逢はせてたび給へ」と、肝膽を碎き祈り給ひける。その後宰相殿、帝の御意に入らせ給ひ、帝より大和・河内・伊賀三箇國を下されければ、御よろこびの爲に長谷の観音へ御詣りある。御一門御公達花を飾り、金銀を鏤めざりめき給ふ。さる程に姫君の父御前は観音の御前に念誦して居給ひけるを、殿原共がこれを見て、御堂の内が狭きとて、「そこなる修行者彼方へしされ」とて、縁より外へ追ひ出す。側に立ち寄り給ひ、公達を見奉り、さめざ

めと泣き給ふ。人々これを見て、「こゝなる修行者は如何なる事を思ひ泣くぞ」と問ひければ、我が先祖有りの儘に語り、「恐れながらこの御公達、我が尋ぬる姫に似させ給ふ」と宣へば、姫君聞召して、「その修行者此處へ呼べ」とありければ、縁の上まで呼び上げける。姫君御覽じて、御年より面瘦せ給へども、流石親子の御事なれば、人目も憚らず、「これこそ古の鉢かづきの姫にて候へ」とて御出でありければ、父御前聞召し、「これは夢か現か。偏に観音の御利生なり」と宣ひければ、宰相殿聞召し、「扱は姫君は河内の交野の人にて坐すか。さればこそ只人とは思はぬものを」と宣ひて、御公達一人と、姫君の父御前とをば、河内の國の主になし參らせ、末繁昌に住ませ給ふ。扱又宰相殿は、伊賀の國に御所を造らせ、子孫繁昌に住ませ給ひけり。これ唯長谷の観音の御利生とぞ聞えける。今に至る迄観音を信じ申せば、あらたに御利生有りと申し傳へ侍りける。この物語を聞く人は、常に観音の名號を十返づつ御唱へあるべきものなり。

南無大慈大悲觀世音菩薩

頼みても猶甲斐ありや觀世音二世安樂の誓聞くにも

(御伽草子、鉢かづき)

註 (1) 猶頼めしめちが原のさしも草我世の中に在らむ限りは(新古今集卷二十、釋教) 清水觀音の御

歌と傳へる。(2) 死後の供養。(3) 色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける(古今集卷十五、戀五、小町)(4) 逢ふことはいつと渚の濱千鳥波のたちみに音をのみぞ啼く(金葉集卷七、戀上、中納言雅定)(5) 年舊りた鉢。(6) 誦經しながら廊下などを漫ろ歩きすること。(7) 遙かの果て。(8) 午後十二時・午前二時。(9) 午前四時。(10) 思ひ出づる折り焚く柴の夕煙むせぶも嬉し忘れ形見に(新古今集卷八、哀傷、後鳥羽上皇)(11) むねは富士袖は清見が關なれや烟も波も立たぬ日ぞなき(詞花集卷七、戀上、平祐舉)(12) 住みつ。妻を得て、家を成す。(13) 殿と北方。(14) 山城國葛野郡仁和寺。(15) 註(4) 參照。(16) 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間の生死の五道を流轉する事。(17) 五道に天上道を加へて云ふ。(18) 佛語。この世に生を受くる道、即ち胎生・卵生・濕生・化生。(19) 世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(古今集卷十八、雜、讀人不知)(20) 孟嘗君函谷關の故事。(21) 註(10) 參照。(22) 宿二樹下、汲二河流、一夜回宿、一日夫妻(中略) 皆是、先世宿緣也(說法妙眼論應身品)(23) 無間地獄。(24) 乳母の名。(25) 二重箱。(26) 巾著。(27) 玄圃梨、鼠李、枳椇の異名。(28) 幾度も濃い色に染めた袴。(29) 嬋娟兩鬢秋蟬翼、宛轉雙蛾遠山色(白氏文集卷四、樂府、妓女。朗詠集卷下にも載す)(30) 熱心に。(31) 御客の意。「もじ」は接尾語で當時婦人の流行語。(32) 道風晩年手の震ひが字に現れ却つて風韻を増したと傳へる。但し實は揮ひ筆、即ち運筆の意なのを、語呂の上から俗傳を附會するに至つたもの。(33) 印度・支那・日本三國を誑し廻つたといふ金毛九尾の狐の化けた官女。後輯、怪異譚、妖怪説話、

【解説】

お伽草子中で文正草子と並稱せられる有名な童話であるが、説話の内容は落窪物語・住吉物語の系統に属する繼子物語である。一種の戀愛小説でもあり、長谷観音の利益談の形を成してゐる點から云へば靈驗譚でもある。特に主題になつてゐる幸運を藏した神祕の鉢を頭に戴いて居ると云ふ空想が奇抜である。それをかづいて人里を歩く状は、徒然草に名高い仁和寺の鼎法師を聯想させる。

此の童話は其の性質からも形式からも、實は世界大播布説話の一種型たる繼子出世型(Holle type) 私は落窪型と命名してゐる)である。唯その常型からは稍變形して——即ち落窪ほど純粹な Holle type でなく、代りに一種の如意寶モチーフの要素が加はつて、寧ろその方が焦點をなして來てゐるのである。

民間説話としては、河内國寢屋村の長者が娘の話として傳へられてゐる由が、河州紀に出てゐると鹽尻(卷三十九)に見える。

又、本童話から直接出たその變形とも云ふべきものに、花世の姫の草子がある。母の形見の鉢が、是では山姥から與へられた小袋になつてゐて、興味が半減する。嫁比べも、岩屋草子・花世の姫等にも襲用せられてゐる趣向である。

先づ御伽草子の出来初め、鉢かづき姫・鹽賣文正、これを合はせて言ひ争ふ。右の方より出ししが、鉢かづきなりければ、司は少し進み出で、寶を籠めて母御前の、戴かせ給ひたる、鉢の浅くは見給ふな。繼子繼母の教へには、これに上越す話はなし。(下略)ト言ひ掛くるを、左の方の女共が押し止め、「被ぎし鉢の深ければ、口元ばかり出てゐるは、この繪を見ても知れてある。肝心の目元鼻つき、知れもせぬに、何處を取柄に見初められた事ぢややら、ても物好きなお方ぢや」ト笑へば司頭を振り、「心で見ろが心見る、目ばかりで見ろものではなし。(中略)これこのやうに鉢が落ち、中より數の寶物、みつなり橋・けんぼの梨、十二重の御小袖。この繪の様を發句に言はば、

緋の袴黄金亂れて散り椿

このまア美事にかいた事は。(下略)

(修紫田舎源氏、二十五編下)

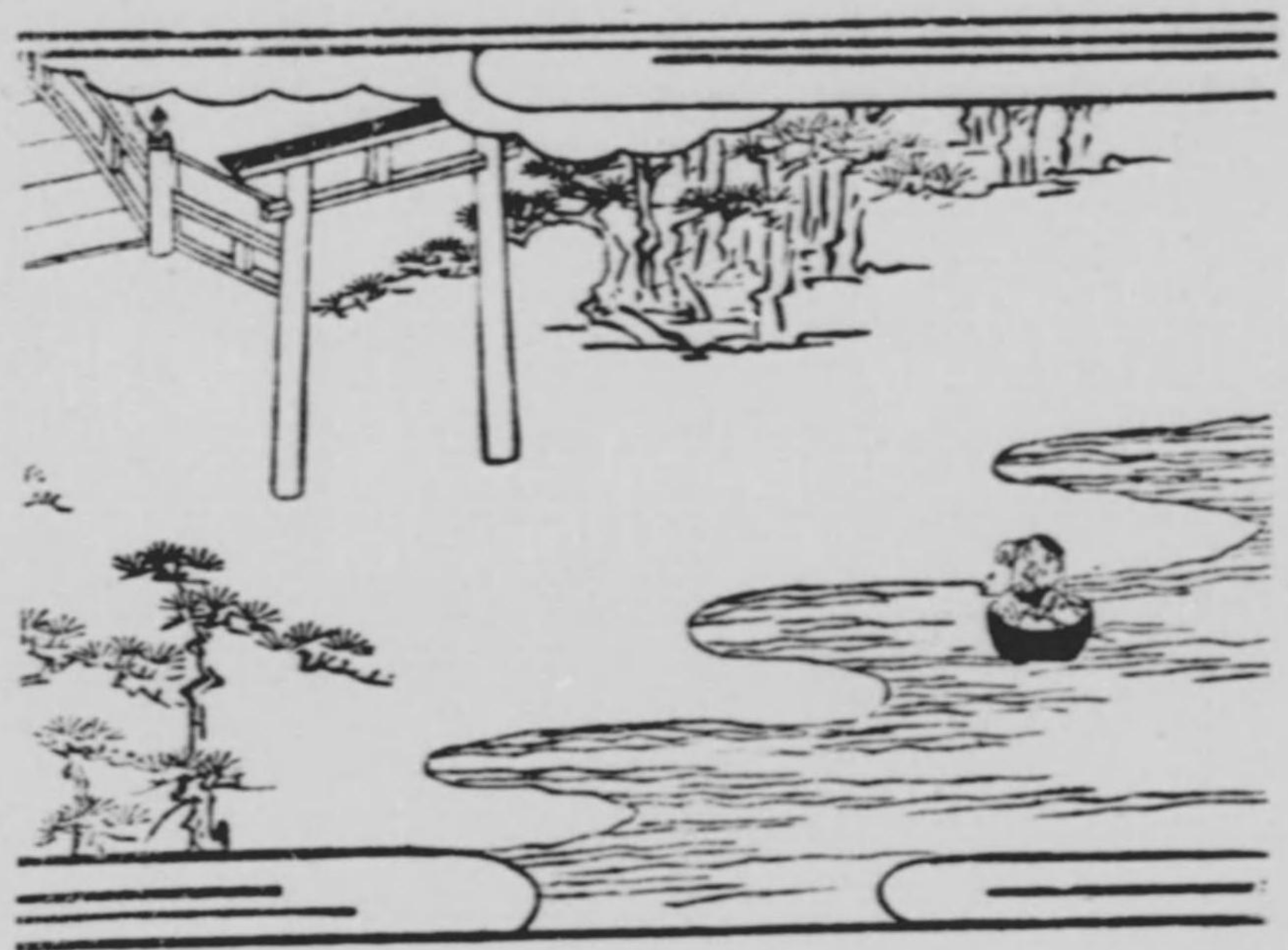
鉢かづき

一寸法師

中頃の事なるに、津の國難波の里に、おうちと嫗と侍り。嫗四十に及ぶ迄、子の無き事を悲しみ、住吉に詣り、無き子を祈り申すに、大明神哀れと思召して、四十一と申すに、只ならずなりぬれば、おうち喜び限り無し。聽て十月と申すに、美しき男子を設けけり。

さりながら生れ落ちてより後、背一寸ありぬれば、聽てその名を一寸法師と名づけられたり。年月を経る程に、早十二三に成る迄育てぬれども、背も人ならず。つくぐと思ひけるは、只者にてはあらざれ。只化物風情にてこそ候へ。我等如何なる罪の報にて、斯様の者をば住吉より賜はりたるぞや。淺ましさと」と、見る目も不憫なり。夫婦思ひけるやうは、「あの一寸法師奴を何方へもやらばやと思ひける」と申せば、やがて一寸法師この由承り、親にも斯様に思はるるも口惜しき次第かな。何方へも行かばやと思ひ、刀無くては如何と思ひ、針を一つ嫗に乞ひ給へば、取り出し賜ひにける。乃ち麥程にて柄・鞘を拵へ、都へ上らばやと思ひしが、自然、舟

無くては如何あるべきとて、又嫗に「御器いと箸と賜べ」と申し受け、名残惜しく止むれども、立出でにけり。住吉の浦より御器を舟としてうち乗りて、都へぞ上りける。



御伽草子板本挿繪

住馴れし難波の浦を立出でて都へ急ぐ我が心かな斯くて鳥羽の津にも着きしかば、そこもとに乗り捨てて都に上り、此處や彼處と見る程に、四條五條の有様心も詞にも及ばれず。扱三條の宰相殿と申す人の許に立寄りて、「物申さむ」と言ひければ、宰相殿は聞召し、面白き聲と聞き、縁の端へ立出でて御覽すれども人も無し。一寸法師斯くて人にも踏み殺されむとて、有りつる足駄の下にて、「物申さむ」と申せば、宰相殿「不思議の事かな。人は見えすして、面白き聲にて呼ばはる。出でて見ばや」と思召し、其處なる足駄履かんと召されければ、足駄の下より、「人な踏ませ給ひそ」と申す。不思議に思ひて見れば、一驚なるもにてありけり。宰相殿御覽じて、實にも面白き者なり」とて、御笑ひなされけり。

斯くて年月を送る程に、一寸法師十六に成り、背は元の儘なり。さる程に宰相殿に十三に成らせ給ふ姫君在します。御容貌勝れ候へば、一寸法師姫君を見奉りしより思ひとなり、如何にもして案を廻らし、我が女房にせばやと思ひ、或時みつもの(3)の撒米取り茶袋に入れ、姫君の臥して在しけるに、謀を廻らし、姫君の御口に塗り、扱茶袋ばかり持ちて泣き居たり。宰相殿御覽じて、御尋ねありければ、「姫君の童がこの程取集めて置き候ふ撒米を、取らせ給ひ御参り候」と申せば、宰相殿大きに怒らせ給ひければ、案の如く姫君の御口に附きてあり、「眞に偽ならず。斯かる者を都に置きて何かせむ。如何にも失ふべし」とて、一寸法師に仰せ付けらる。一寸法師申しけるは、「童が物を取らせ給ひて候ふ程に、兎に角にも計らひ候へとありける」とて、心の内に嬉しく思ふ事限り無し。姫君は唯夢の心地して、呆れ果ててぞおはしける。一寸法師疾くくと勧め申せば、闇へ遠く行く風情にて、都を出でて足に任せて歩み給ふ、御心の内推量られてこそ候へ。

あら痛はしや、一寸法師は姫君を先に立ててぞ出でにけり。宰相殿はあはれこの事を止め給ひかしと思しけれども、繼母の事なれば、さして止め給はず、女房達も附添ひ給はず。姫君あさましき事に思召して、「斯くて何方へも行くべきならねど、難波の浦へ行かばや」とて、鳥羽の

津より舟に乗り給ふ。折節風荒くして、興がる(4)島へぞ着けにける。舟より上り見れば人住むとも見えざりけり。斯様に風悪く吹きて、彼の島へぞ吹き上げける。兎やせむ斯くやせむと思ひ煩ひけれども、甲斐も無く、舟より上り、一寸法師は此處彼處と見めぐれば、何處とも無く鬼二人來りて、一人は打出の小槌を持ち、今一人が申すやうは、「呑みてあの女房奪り候はむ」と申す。口より呑み候へば、目の内より出でにけり。鬼申すやうは、「是は曲者かな。口を塞げば目より出づる」一寸法師は鬼に呑まれては、目より出でて飛び歩きければ、鬼も怖ぢ戰きて、是は只者ならず、唯地獄に亂こそ出で來たれ。唯逃げよ」と言ふ儘に、打出の小槌・杖・しもつ、何に至る迄打捨てて、極樂淨土の戌亥の、如何にも暗き所へ、漸々に逃げにけり。

扱一寸法師は是を見て、先づ打出の小槌を亂暴し、「我々が背を大きになれ」とぞ、どうと打ち候へば、程無く背大きになり、扱この程疲れに臨みたる事なれば、先づ／＼飯を打出し、如何にも美味さうなる飯、何處とも無く出でにけり。不思議なる仕合となりけり。その後金銀打出し、姫君ともに都へ上り、五條邊に宿を取り、十日許り在りけるが、この事隠れ無ければ、内裏に聞召されて、急ぎ一寸法師をぞ召されけり。乃ち参内仕り、大王御覽じて、眞に美しき童にて侍る。如何さまこれは賤しからず。先祖を尋ね給ふ。おうちには堀河中納言と申

す人の子なり。人の讒言ざんげんに依り、流され人となり給ふ。田舎にて儲けし子なり。姫は伏見の少將と申す人の子なり。幼き時より父母に後れ給ひ、斯様に心も賤いやしからざれば、殿上てんじやうへ召され、堀河の少將になし給ふこそめでたけれ。父母をも呼び参らせ、待遇もてなし傳給ふ事、世の常にては無かりけり。

さる程に少將殿中納言になり給ふ。心容かたちは初めより萬づ人に勝れ給へば、御一門の覺えいみじく思しける。宰相殿聞召し喜び給ひける。その後若君三人出で來けり。めでたく榮え給ひけり。

住吉の御誓に末繁昌すえはんじやうに榮え給ふ。世のめでたき例たとひ、これに過ぎたる事はあらずとぞ申し侍りける。

(御伽草子、一寸法師)

註 (1) 腕。(2) 驚くべき。(3) 密物か。(4) 面白い。(5) 横領し。

【解説】

如意寶モチヱフの出世談であるが、説話の形式から云へば世界大播布説話の一種たる親指太郎型 (Tom Thumb type) と、その種類親指小僧型 (Hop o' my Thumb type) とを併せたや

うなもの (私はこれを一寸法師型と呼んでゐる) 即ち英・獨等に行はれる童話——特に獨逸の——と類似してゐる。

室町期に移入せられた外來の遊離説話かも知れぬが、内國的にも本源を少彦名神話——特に書紀神代卷 (一書曰) (神話篇、少彦名附久延昆古参照) の——に迄溯り得べく、又畸形兒の遺棄の習俗に關して蛭兒神話の轉化の痕跡も認められ (神話篇、蛭兒参照) 更に鬼ヶ島渡りは、爲朝・朝夷・義經等の巡島説話 (英雄譚、巡島説話参照)、及び桃太郎童話との交渉の想測を可能ならしめる。打出の小槌は如意寶珠の變形で、これを鬼の寶物とするのは平家物語 (卷六、祇園女御の條) や狂言寶の笠・寶の槌等と同様である。尤の雙紙 (慶長以後寛永以前の作) の「ひくきもの品々」の中に、「一寸法師」と數へてゐるから、この童話はそれ迄には弘く行はれてゐた事が知られる。

單に一寸法師といふ觀念には、小人國・侏儒・豆男等の空想や異聞や迷信やが集加せられてゐるであらうが、説話の形態としては、それ等からの直接の影響は少いであらう。

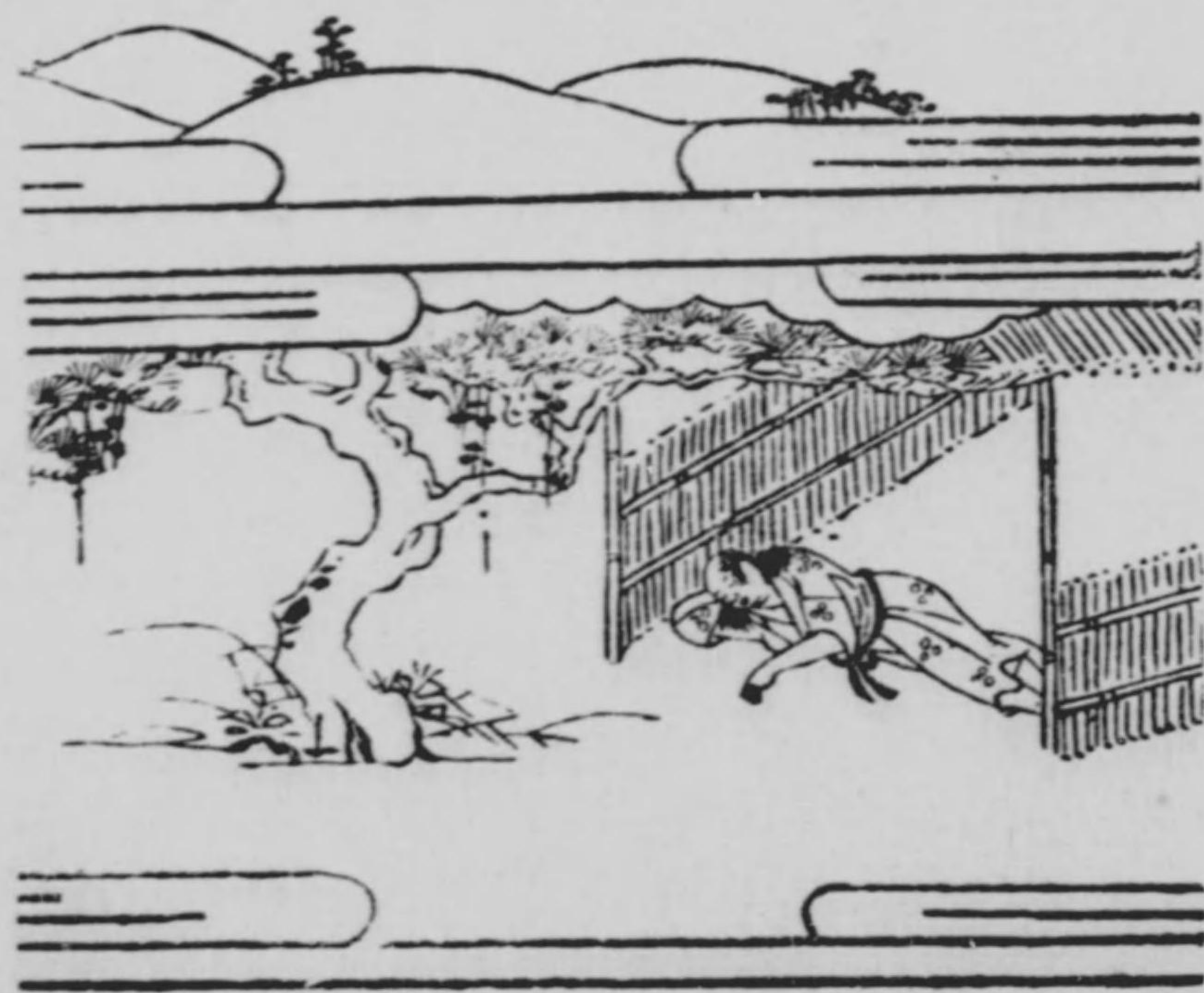
同じく御伽草子に小男の草子があるが、これは丈も一尺で、且、本童話と物臭太郎との混血兒ともいふべきものである。

物ぐさ太郎

東山道陸奥の末、信濃の國十郡のその内に、つるまの郡あたらしの郷といふ所に、不思議の男一人侍りけり。その名を物ぐさ太郎ひぢかすと申し候。名を物ぐさ太郎と申す事は、國に並びなき程の物ぐさしなり。但し名こそ物ぐさ太郎と申せども、家造りの有様人に勝れてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地を築き、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉を植ゑ、島より陸地へ反橋をかけ、高欄に擬寶珠を磨き、眞に結構世に超えたり。十二間の遠侍、九間の渡廊下、釣殿・細殿・梅壺・桐壺・籬が壺に至る迄、百種の花を植ゑ、主殿十二間に造り、檜皮葺に葺かせ、錦を以て天井を張り、桁・梁・垂木の組入れには、白銀黄金を金物に打ち、瓔珞の簾をかけ、厩侍所に至る迄、由々しく作り立てて居ばやと、心には思へども、色事足らねば、唯竹を四本立て、薦をかけてぞ居たりける。雨の降るにも、日の照るにも、習はぬ住ひして居たり。斯様に作り悪しとは申せども、足手の戰、蚤・虱、肘の苔に至る迄、

足らはずといふ事無し。資本無ければ商ひせず。物を作らねば食物無し。四五日の内にも起き上らず、臥せり居たりけり。

或時情ある人の、もとあいきやうの餅(い)を五つ如何に餓かるらむとて得させければ、適かに待ち得たる事なれば、四つをば一度に喰ひ侍り。今一つを心に思ひけるやうは、有りと思ひて喰はねば、後の頼みあり、無しと思へば餓くなけれども頼み無し。まぼらえてあるも頼みなり、何時迄も人の物を得させむまでは、持たばやと思ひて、寝ながら胸の上にて遊ばかして、鼻油を引きて、口に濡らし、頭に戴き取り遊ぶ程に、取り迄らかし、大道迄ぞ轉びける。その時物ぐさ太郎見渡して思ふやう、取りに行き歸らむも物ぐさし。何時の頃にも、人の通らぬ事はあらじと、竹の棹を捧げて犬鳥の寄るを追ひ退けて、三日迄待つに人見えす。三日と申すに、只の人にはあらず、その所



繪挿本板子草伽御

の地頭あたらしの左衛門の尉のぶよりといふ人、小鷹狩まじろの鷹を据ゑさせて、その勢五六十騎にて通り給ふ。物ぐさ太郎これを見て、鎌首持上げて、「のう、申し候はむ、それに餅の候。取りてたび候へ」と申しけれども、耳にも聞き入れず打通りけり。物ぐさ太郎これを見て、世間にあれ程物ぐさき人の、如何にして所知所領を領るらむ。あの餅を馬より下りて、取りて傳へむ程の事はいと易き事。世の中に物ぐさき者、我一人と思へば多くありけるよと、「あらうたての殿や」とて、斜ならず呟き、腹をぞ立てにける。兵衛尉荒き人ならば腹をも立て、如何様にも當り給ふべきに、馬を控へてこれを開き、「彼奴めが事か、聞ゆる物ぐさ太郎といふ者か」「さん候。二人とも候はばこそ、これが事にて候」扱おのれは如何様にして過ぐるぞ」「さん候。人の物を呉れ候時は、何をも食ぶる。呉れ候はぬ時は、四五日も十日許りも只空しく過ぎ候」と申しければ、「扱は不憫の次第かな。命助かる仕度をせよ。一樹の陰に宿るとも、一河の流れを汲む事も、他生の縁となり。所こそ多きに我が所領の内に生まれ合ふ事、前世の宿縁なり。地を作りて過ぎよ」とありければ、「持ち候はぬ」と申す。「さらば取らせむ」とあり。「物ぐさく候程に地も欲しからず候」と申せば、「商ひをして過ぎよ」とあれば、「資本候はず」と申す。「取らせむ」とありければ、「今更習はぬ事、知らぬ事、成り難く候」と申せば、「扱は斯かる曲者かな。

いでさらば助かる様にせむ」とて、硯を取寄せて札を書きて、我が領内を廻す。「この物ぐさ太郎に毎日三合飯を二度食はせ、酒を一度飲ますべし。さなからむ者は我が領には叶ふべからず」と觸れられけり。眞に／＼これぞ合はぬは君の仰せかなと思へども、斯くの如くある程に、三年ぞ養ひける。

三年と申す春の末に、信濃の國の國司二條の大納言ありすと申す人、このあたらしの郷へながふ(3)を當てらる。百姓共寄り合ひて、「誰が許より誰を上せむぞ。遙かに絶えて習はぬ事、如何せむ」と歎く。或人申すやう、「いざこの物ぐさ太郎を仕立てて上せむ」と言ひければ、「思ひも寄らず、餅を大道へ轉ばかし、己は立出で取りもせで、地頭殿の通り給ふに、取りて給へと言ふ程の者なり」と申しければ、或人これを聞き、「それ體の者を賺せば、善き事もあり。いざ寄り合ひて賺して見む」とて、おとなしき人四五人寄り合ひて、彼が許に行きて、「如何に物ぐさ太郎殿、我等が大事の御圍に當りて候を助けて給へ」「何事にて候ぞ」と申しければ、「ながふといふものを當りて候」それは幾廣許り長き物にて候ぞ。夥しの事や」と言ひければ、「いやさ様に長き物にてはなし。我が様なる百姓の中より、都へ人を上せて遣はせ參らするをながふとは申すなり。御身をこの三年が間養ひたる情に、上り給へ」と言ひければ、「それはさら／＼殿

原の志にあらず。地頭殿より仰せにてこそあれ」とて、上るべきやうなし。又或人申しける様は、「且うは和殿の爲なり。それを如何にと申すに、男は妻を具して心附く、女房は夫に添ひて心附くなり。斯くていぶせき賤が伏屋に、唯一人在せむより、心附く仕度をし給はぬか。それいはれあり。男は三度の晴業に心附く。元服して魂附く、妻を具して魂附く、官をして魂附く。又は海道などを通るに、殊更心附くなり。田舎の人こそ情を知らね、都の人は情有りて如何なる人をも嫌はず。色深き御人も、互に夫妻と頼み頼まるゝ習なり。されば都へ上り、心あらむ人にも相具して、心をも付き給はぬか」と、やう／＼に教訓すれば、物ぐさ太郎これを聞き、「それこそ候なれ。その儀にて候はば、急ぎ上げて給ひ給へ」とて、出で立たむとする。百姓ども皆々大きに悦び、料足を集めて京へ上せけり。

東山科を上りに宿々を通りけるに、更に物ぐさき事無し。七日と申すに京へ着き、「これは信濃の國より参りたるながふにて候」と申しければ、人々これを見て笑ひけり。「あれ程色黒く汚げなる者も世には在りけるぞ」とて笑ひける。大納言殿は聞召し、「如何様にもあれ、忠實にて使はれなば然るべし」とて召使はれける。都にての有様、信濃の國には勝りけり。東山・西山・御所内裏・堂・宮・社、面白く尊さ申すばかりなし。少しも物ぐさげなる氣色もなし。これ程

に忠實なる者あらじとて、三月のながふを七月まで召使はれ、やう／＼十一月の頃にもなりぬれば、暇を賜はりて國に下りなむと、この程の宿に歸り、我が身を觀じて思ふやう、都へ上りたらむ時は、よき女房に逢ひ、連れて下れなむと言ひしに、一人下らむ事餘りに淋しからむ。女房一人尋ねばやと思ひ、宿の亭主を近づけて「信濃へ下り候。しかるべくば我等がやうなる者の妻になり候はむする女、一人尋ねて給ひ候へ」と申しければ、宿の男はこれ聞き、「如何なる者かおのれが女房になるべき」と言ひて笑ひける。さりながら彼が言ふ事につきて言ふやう、「尋ねむ事は易き事なれども、夫妻といふ事は、大事の物ぞ。色好み尋ねて呼べかし」「色好みとは何事ぞ。如何なる物を申すぞ」と問ひければ「主無き女を呼びて、料足を取らせて逢ふ事を、色好みと云ふなり」「その儀ならば尋ねて給ひ候へ。下り用意に遣錢十二三文有り。これを取らせて給ひ候へ」と申しければ、宿の亭主はこれ聞き、扱も／＼これ程のたくらだくは無しと思ひて、又言ふ様は、「その儀ならば、辻取りをせよ」といふ。「辻取りとは何事ぞや」「辻取りとは男も連れず輿車にも乗らぬ女房の眉目好き、我が目にかゝるを取る事、天下の御許しにてあるなり」と教へければ、「その儀にて候はば取りてみむ」と申す。十一月十八日の事なるに、「清水へ参りて狙へ」と教へければ、さらばとて出で立つ。

その日の有様は、信濃より年を経て着たりけるさゆみ(5)の帷子(かたびら)の、何色とも文(もん)も見えぬに、藁繩(わらなは)帯(おび)にして、物ぐさ草履(ぞうり)の破れたるを穿き、吳竹の杖をつき、十一月十八日の事なれば、風烈しく吹きて、如何にも寒きに、鼻をすゝりて清水の大門(おほもん)に、燒卒都婆(やけそとば)の如く立ち竦(すく)みにして、大手を廣げて待つ所に、参り下向の人々是を見て、「あな恐しや、何を待ちて斯様にはあるらむ」とて、皆々避(よ)け道をして通れども、近づく者は更に無し。或は十七八、二十(はたち)より内の女房五人十人、打連(うちつ)れく通れども、一目より外見(ほか)ざりける。斯様に立ちたる事、朝(あした)よりその日の暮るゝ迄、人數幾千萬と云ふ事なし。あれも悪(わる)し、これも悪(わる)しと躊躇(たぐら)ひ居たる所に、女房一人出で來り、年ならば十七八かと見え侍り、形は春の花、翡翠(ひすい)のかんざしたをやかに、青黛(せいさい)の眉墨(ぼく)は華やかにして、遠山(とほやま)の櫻(うめ)に異ならず(6)。嬋妍(せんげん)たる兩鬢(りやうびん)は秋の蟬(せみ)の羽(は)に異ならず(7)。三十二相八十種(さんじふにさうはちじふ)好(このう)の飽(あ)き満ちて、金色(こんじき)の如來(にょらい)の如し。蹈(た)みたる足の爪(つめ)先(さき)迄も、眉(まゆ)の愛敬(あいけい)整へて、色々の一重衣(ひとへ)に、紅(べに)の千入(ちしほ)の袴(はかま)踏(ふ)みしだけ、裏(うら)なし(8)うち穿きて、丈(たけ)に餘(あ)れる髪(かみ)ざしを梅(うめ)の匂(にお)ひによせて、我(われ)に劣(せう)らぬ下女(げに)一人供(とも)に具(た)してぞ参りたる。物ぐさ太郎これを見て、爰(こゝ)こそ我が北(きた)の方(かた)は出で來ぬれ。天晴(あつはれ)疾(はや)く近づ(か)りけし、抱(か)きつかむ、口(くち)をも吸(す)はばやと思ひて、手(て)ぐすねを引(ひ)き大手(おほて)を廣(ひろ)げて待ち居たり。女房(にようぼう)これを御覽(ごらん)じて、供(とも)の下女(げに)を近づ(か)けて、「あれは何ぞ」と問ひ

給へば、「人にて候」と申しければ、「あな恐しや、あの邊(かた)をば如何にして通るべきぞ」とて、避(よ)け道をして通りける。物ぐさ太郎これを見て、あら淺(あ)ましや、彼方(かた)へ行くぞや、手(て)のびにしては叶(かな)ふまじと思ひて、大手(おほて)を廣(ひろ)げて、つゝと寄り、美(うつく)しげなる笠(かさ)の内(うち)へ、汚(きた)げなる面(おもて)を差入れて、顔(かほ)に顔を差合(さあ)はせて、「如何にや女房」と言ひて、腰(こし)に抱(か)きつきて見上げければ、東西昏(く)れ果(は)てて、更に御返事(ごへんじ)も宣(のたま)はず。往來(ゆき)の人(ひと)これを見て、あな恐しや痛(いた)はしやとて、各々見(み)ては通れども、寄りつく者は更(さら)になし。男取詰(おととど)めて言ふ様は、「如何にや女房、遙(とほ)かにこそ覺(おぼ)えて候へ。をばらしづはら・芹生(せりう)の里(さと)・かうだう・かはさき・中山(ちやうざん)・長樂寺(ちやうらくじ)・清水(しみず)・六波羅(むつぱら)・六角堂(かくかくだう)・嵯峨(さあや)法輪寺(ふりんじ)・太秦(うづまさ)・醍醐(たご)・栗栖(くりす)・木幡山(こはたやま)・淀(よど)・八幡(やわた)・住吉(すまき)・鞍馬寺(あまのま)・五條(ごじょう)の天神(あまのつみ)・貴船(きふね)の明神(あきみ)・日吉(ひよし)・山王(やまおう)・祇園(ぎん)・北野(きたの)・賀茂(かもの)・春日(かすかひ)、所々(ところどころ)にて参り合(あ)ひて候(まを)ひしは、如何に(いかん)と申しける。女房(にようぼう)これを聞き、この者は如何様(いかんよう)にも田舎(いんが)の者(もの)にてありけるを、宿(しゆく)の男(おとこ)の教(おし)へて、辻取(つじと)りをせよと申してせさするよと思ひ、あれ體(てい)の者(もの)をば賺(あ)さばやと思ひ、「それはさる事も候はむ。今はこれにては人目(ひとめ)も繁(さか)し。妾(わらわ)が侍(まへ)ふ所(ところ)へ、訪(たず)うて入(い)らせ給へ」とありければ、「何處(いづく)にて候ぞ」と問ひければ、調子(てうし)の言葉(ことば)をかけ、それを服せむその内に、逃げばやと思召(おも)し、「妾(わらわ)が候(まを)ふ所(ところ)をば、松(まつ)の本(もと)と云ふ所(ところ)にて候(まを)」物ぐさ太郎(ものぐさたろう)これを聞き、「松(まつ)の本(もと)とは心得(こころ)たり、明石(あきし)の浦(うら)の事(こと)」斯(いか)かる希代(きだい)の事(こと)は無(な)し。是(こゝ)一つ

をこそ聞き知るとも、よの事は知らじと思ひて、「但し日暮るゝ里に候ぞ」「日暮るゝ里も心得たり。鞍馬の奥はどの程ぞ」「これも妾が故里よ。燈火の小路を尋ねよや」「油の小路はどの程ぞ」「これも妾が故里よ。恥しの里に候よ」「忍ぶの里とはどの程ぞ」「これも妾が故里よ。上着の里に候」「錦の小路はどの程ぞ」「これも妾が故里よ。慰む國に候は」「それは戀して、近江の國はどの程ぞ」「化粧する曇りなき里」と宣へば、「鏡の宿はどの程ぞ」「秋する國に候よ」「因幡の國にはどの程ぞ」「これも妾が故里よ。廿の國に候よ」「若狭の國にはどの程ぞ」「斯様に兎角言ふ程に、この上は吾が身通るべきやうなし。いや／＼この者に、歌を詠みかけ、それを案ぜむ折節に、逃げ去らばやと思ひて、男の持ちたる唐竹の杖によそへて、斯くなむ、

唐竹を杖に突きたる物なればふし添ひ難き人を見るかな

物ぐさ太郎これを聞き、あな口惜しや、さて我と寢じとござんなれと思ひ、御返りごと、

よろづ世の竹のよ毎に添ふ節のなど唐竹に節なかるべき

あな恐しや、この男は我と寢むと言ふ。又姿には似ず、斯かる道を知りたる事優しさよと、思召して、

放せかし網の絲目の繁ければこの手を離れ物語せむ

物ぐさ太郎これを聞き、さて手を許せとござんなれ、如何せむと思ひて、又斯くぞ、

何かこの網の絲目は繁くとも口を吸はせよ手をば許さむ

と詠み返し申しければ、女房時刻移りて叶はじと思召して、又斯くなむ、

思ふなら問ひても來ませ我が宿はから橋の紫の門

物ぐさ太郎この御詞を案じ、少し許す所に振り放し、笠をも御衣装など迄も打捨てて、裏なしをも踏み脱ぎ、徒跣にて下女をも連れず、散り／＼になりて逃げられけり。物ぐさ太郎、あな淺ましや、我が女房取り通しつる事よと思ひて、唐竹の杖葦短かにおつ取り、「女房何方へ行くぞ」と追ひ廻りけり。

女房はこれを最後と思召して、案内は知り給ひたり、彼方の小路、此方の辻、此處彼處を巡り違へ逃げ、春の風に花の散る如く逃げ隠れ給へり。物ぐさ太郎これを見て、「和御前は何處へ行くぞ」とて、彼方の小路へつゝと寄り、此方の辻へ行き合ひたり、隙をあらせず追ひ詰めけり。或所にて追ひ失ひ、後へ返りて先を見れども人も無し。往來の人に問ひければ、知らずと答へて通りける。清水にて立つたりし所へ歸り來て、此方向きにこそ女房は立つたりつれ、彼方へ向きてこそ、斯様の事をば言ひつれ、何方へ行きつらむと、悶え焦れけれども詮ぞ無き。

實に／＼思ひ出したる事あり。唐橋紫の門とありつるに、尋ねて見ばやと思ひて、紙一重を竹に挟み、或侍所へ立入りて、「これは田舎の者にて候が、門ふみ忘れて候が、さいじよ(10)唐橋紫の門にこそ仰せられしが、それしきの門は何處に候らむ」と尋ねれば、「七條の末に豊前守殿の御所こそ唐橋紫は有りしぞ。その小路向きて尋ねよ」と教へける。尋ね行きて見れば、實にもそれなりけり。早我が女房に逢ひたる心地して、嬉しき事申すばかりなし。

彼の館には、犬追物・笠懸・鞠遊び、或は管絃・碁將棋・雙六をうち、今様・早歌(11)思ひ／＼の遊びなり。彼方此方へ行きて見れども、我が女房は無かりけり。若しも出づる事もありなむと、縁の下に隠れける。この女房御所にては侍従の局と申しける。更け行く迄宮仕ひして、我が局へ入らせ給ふが、廣縁に立出でて、撫子といふ下女を召して、「未だ月は出でさせ給はぬか。さもあれ清水にての男は、如何にこれ程闇きに、それに行き逢ひたらば、命もあらじ」などと語り給へば、「忌々し、何の故にかこれ迄は來り候べき。なか／＼仰せ候へば、面影に立ちて候」と申しければ、物ぐさ太郎縁の下にてこれを聞き、これこそ我が北の方はあれ、扱も縁は盡きぬものと嬉しくて、縁の下より躍り出で、「如何にや女房、和御前故に心を盡し、骨をば折るぞ」とて、縁より上へ上りける。女郎花(12)これを聞き、肝心も失せ果てて、轉びまろびて、障子の

内へ逃げ入りて、暫しは呆れて肝魂も身に添はず、秋の夜に夢見る心地して、大空なる(13)氣色にておはしけるが、稍ありて、「あな恐しの者の心や、これ迄尋ねて來る不思議さよ。人こそ多きに、あれ程汚げにいぶせき者に思ひ懸けられ、戀ひられたるこそ悲しけれ」とて、撫子に語り歎き給ひける。

斯かる所に、番の者共立出で言ふやうは、「人の氣色のあるやらむ、犬が吠ゆる」と言ひて、人々騒ぎけり。女房思召しけるは、「あら淺ましや、あの者を打殺さむも恐しや。さなきだに、女は五障(14)三従(15)に罪深きに」とて、涙を流し給ひける。「今宵ばかりは何か苦しき、假宿して曙に賺してやれ」とて、古き疊を敷きて、居よとて賜びたり。下女來りて、「明けなば人に見えず、疾く／＼歸れ」とて、或妻戸の際に、いと馴らはぬ高麗縁の疊を敷き居たりけり。彼方此方身を悶え、歩き草臥れ、あはれ何にても疾く呉れよかし。何を呉るべきやらむ。栗を呉れられなば焼きて食ふべし。柿・梨・餅などを呉れたらば、隙も無く食ふべし。酒を呉れたらば十四五六七八杯も飲まう。何にても疾く呉れよかしと、心を色々になして待ち居たる所に、栗・柿・梨鬚籠に入れて、鹽と小刀取り添へて出しける。物ぐさ太郎これを見て、あな淺ましや、女房の眉目には似ず、數多の木實を、箱の蓋、檀紙にも入れて呉れよかし、馬牛などに物を呉るゝ如

くに、一つに取り具して呉れたることよ。まさなや、但し仔細あるべし。木の實數多一つにし呉れたるは、我に一つになり合はむと思ふ心かや。栗を賜びたるは、繰言すなどの心にや。梨を賜びたるは、我は男も無しと云ふ心。柿と鹽とはなどやらむ。何れも歌に詠まばやと思ひて、

津の國の難波の浦の柿なればうみ渡らねど鹽はつきけり

女房これ聞き、「あな優しの者の心や、泥の蓮、蘂苞黄金とは、斯様の事にもや侍らむ。これ取らせよ」とて、紙を十重許り出されたり。これは何事やらむと思ひけるが、水莖の跡なき返事をせよと言ふ心ござんなれと思ひて、斯くなむ

千早振るかみを使ひに賜びたるは我を社と思ふかや君

「この上は力無し、具して参り候へ」とて、小袖一襲・大口・直垂・烏帽子・刀調へて、「これを召して参られよ」とぞ申しける。ひちかす大きに喜び、「めでたや」とて、この程着たりける重代の着る物を、竹の杖に巻きつけて、「小袖をば今宵許りこそ貸し給はむすらむ。明日は着て歸らむするぞ。犬、ゑのこ喰ふな。盗人とするな」とて、縁の下へ投げ入れて、その後大口・直垂着るやうを知らずして、首に當て肩に懸け、これを煩はしくしけるを、下女取り繕ひて、烏帽子を着せむとす。髪を見るに塵埃・虱など、何時の世に手を入れて、解き上げたる氣色も

無し。されども漸うこしらへて、烏帽子をばおし被せ、撫子手を引きて、此方へくと連れて行きければ、物ぐさ太郎、我が國信濃にては、山岩石をこそ歩き習ひたれ、斯様に油差したる板の上をば歩みならず。此方彼方と迂り参りけり。されども障子の内へおし入れて、撫子は歸りけり。上蔦の御前に参るとて、踏み迂りて仰のきに轉びけり。さらば餘の所にもなくして上蔦の寶とも思召すてひきまるといふ琴の上に倒れかゝりて、琴をば微塵に損ひぬ。女房これを見て、あさまし、如何にせむと涙ぐみて、顔に紅葉をひき散らして斯くなむ、

今日よりは我が慰みに何かせむ

物ぐさ太郎、未だ起きも上らず、あさましと思ひて、女房の方を打見て、

ことわりなれば物も言はれず

と申しければ、あな優しの男の心やと思召して、よし／＼是も前世の宿縁なり。斯様に物思ひ懸けらるゝも、今生ならぬ縁にてこそ、斯くもあるらむと思召して、比翼の語らひをなし給ふ。今宵も既に明けければ、急ぎ歸らむとする時、女房仰せらるゝやうは、「力及ばず、斯様に見参に入りぬる上は、我人この世ならぬ縁なり。心ざし思召さばこれに留まり給へ。我等は宮仕ひの身なれども、何か苦しかるべき」とありければ、「承る」とて留まりぬ。

その後はこの女房下女二人添へ、夜晝これをこしらへて、七日湯風呂に入れければ、七日と申すには美しき玉の如くになりけり。その後は日々に従つて玉の光あるに似たり。男美男の名を取り歌連歌人に優れたり。女房賢き人にて、男の禮法を教へける。然るに直垂の衣紋がかり、袴の蹴廻し、烏帽子の着際、髪つき迄も、如何なる公卿殿上人にも勝れたり。斯かる程に豊前守殿この由開召し、見參の爲に召さる。引繕ひて參られたり。豊前守これを見て、「男美男に在しける。苗字は誰れ」と問ひ給へば、「物ぐさ太郎」と答へける。「殊の外なる御名かな」とて、初めて歌の左衛門になし奉る。斯様に兎角する程に、この事内裏へ聞召して、「急ぎ參れ」との宣旨なり。辭退申せど叶はず。帽額車に乗りて院參する。大極殿に召し、「汝は眞に連歌の上手にて侍るなる。歌二首仕れ」と宣旨なり。折節梅花に鶯の飛び散りて囀るを聞き、斯くなむ、鶯の濡れたる聲の聞ゆるは梅の花笠漏るや春雨

帝これを叔覽ありて、「汝が方にも梅と云ふか」と宣旨なりければ、承りもあへず、

信濃には梅花といふも梅の花都の事は如何あるらむ¹⁶

帝これを開召し、御感に入りて、「汝が先祖を申せ」と宣旨なり。「先祖も無き者にて候」と申しけり。「さらば信濃の國の目代¹⁷へ尋ねよ」とて、その所の地頭へ宣旨をなし、御尋ねありけれ

ば、薦に卷いたる文書を取寄せて、見參に入れ奉る。これを開き御覽すれば、人王五十三代の帝、仁明天皇の第二の皇子深草の天皇¹⁸の御子、二位の中將と申す人、信濃へ流されて、年月を送り給ひしが、一人の御子も無し。これを悲しみ給ひて、善光寺の如來に詣りて、一人の御子を申しうけ給ひて、御年三歳にて、二人の親に後れ給ひて、その後凡夫の塵に交はり給ひて、斯かる賤しき身となり給へり。帝叔覽まし／＼て、「皇子を離れて程近き人にて在しけるよ」とて、信濃の中將になして、甲斐・信濃兩國を賜はりて、この女房相具して信濃へ下り、あさひの郷に着き給ふ。あたらしの郷の地頭左衛門尉をば、忠深き人なればとて、甲斐・信濃の兩國の總政所に定め給ふ。又三年養ひたる百姓にも、皆々所領を取らせて、我が身はつるまの郷に御所を建てて、眷族を置き、貴賤上下にかしづかれ、國の政穩かにありしかば、佛神三寶の加護ありて、百二十年の春秋を送り、御子數多出で來て、七珍萬寶に飽き充ちて、長生の神となり給ふ。殿は御多賀の大明神、女房はあさひの權現と現はれ給ふ。これは文徳天皇の御時なりし。彼は宿善結ぶの神と現はれ、男女を嫌はず、戀せむ人は自が前に參らば叶へむと、誓深くおはしますなり。凡そ凡夫は本地¹⁹を申せば腹を立て、神は本地を現はせば、三熱²⁰の苦しみを冷して、直に喜び給ふなり。人の心も斯くの如く、物ぐさくとも身は直なるものなり。毎日

一度この草子を読みて人に聞かせん人は、財寶に飽き充ちて、幸心に委すべしとの御誓なり。
めでたき事、なか／＼申すもおろかなり。

(御伽草子、物ぐさ太郎)

註

- (1) 恵みの餅。(2) 宿ニ一樹下ニ、汲ニ一河流ニ、一夜同宿、一日夫妻(中略)皆是、先世宿縁也(説法妙眼論應身品)。(3) 長期の人夫。(4) 愚人。うつけ者。(5) 貫布(さよみ)の訛。經絲の粗い麻布。(6) 嬋娟(カナル) 鬢、秋蟬翼、宛轉雙蛾遠山色(白氏文集卷四、樂府、妓女、朗詠集卷下にも載す)。(7) 草履。(8) 我が宿は三輪の山本戀しくば訪らひ來ませ杉立てる門(古今集卷十八、雜下) (神話篇、三勾の麻解説參照) (9) 最初の訛。(10) 室町時代の一種の小唄。(11) 侍從の局の本名。(12) 茫然たる。(13) 女人の有する五つの障礙。梵天王・帝釋・魔王・轉輪聖王・佛身になり得ぬこと。(14) 未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從レ子(儀禮卷十一)。(15) 我が國の梅の花とは見たれども大宮人は如何いふらむ(平家物語劔卷。安倍宗任の詠、後輯、藝術譚、歌德説話、衣のたて 附大宮人は參照)。(16) 國守の代官。(17) 實は仁明天皇のこと。(18) 眞の素性。(19) 佛語。龍の一日三度受くるといふ熱の苦惱。

【解説】

神の權化の懶惰青年の出世談。その出世の動機に關しては歌德説話が形成せられてゐる。この御伽草子は一名お多賀の本地と呼ばれる様に、本地物の形で語られ、又、金太郎と共に稍の童話の定則を破つて、地方的に固着した傳説的成分が勝つてゐるが、本態は恐らく世界大播布説話の一で、獨逸等に行はれてゐると類種の遊離説話ではあるまいか。でなくとも懶惰者の民間口碑は何れの國にも、亦各原始民族にも、常に發生し流布するところである。又何時の頃からか、この童話に葛の葉型怪婚説話(後輯、怪異譚、妖怪説話、葛の葉參照)が附着したと見えて、遠山著聞集(後編卷三)には、妻を先立てた物臭太郎が、田植女の一人に化した狐を妻として一子を設けたといふ口碑を載せてゐる。

昔社ニ一人ノ怠惰者アリケリ。朝ヨリ何事モセズシテ、唯々寢轉ブノミヲ事トセシガ、人々ノ侮辱ハ常ニ甚ダシク、斯カル者ノ社ニアリテハ、子供達ノ爲ナラズ。コノ社ヲ立チ去レト、顔見ル度ニ罵ル言葉ノ荒々シケレバ、流石ノ怠惰者モ耐ヘカネテ、終ニ山ニ入りテ猪トナレリ。彼去ルニ臨ミ、今ヨリ汝等ノ蕃薯ヲ食ヒ荒シテ報復セン。又汝等狩ニ來リテ油斷スル事アラバ咬ミ殺サント云ヘリ。今猪ノ爲ニ咬マレ、又蕃薯ヲ荒サル、ハ、祖先等ノ彼ヲ罵リタル爲ナリ。(臺灣合歡蕃社口碑)

松山鏡

ワキ詞「これは越後國松の山家に住まひする者にて候。さても某、久しく添ひ馴れし妻に後れ、昨日今日とは存じ候へども、早三年になりて候。又忘れ形見に姫を一人持ちて候が、あまりに母が事を歎き候程に、對の屋(一)を作り、傍に置いて候。又今日は、彼が母の命日にて候程に、持佛堂に立ち出で、焼香せばやと思ひ候。

姫「云となり、雨となり、陽臺の時留め難く、花と散り雪と消え、金谷(三)の春行方も無し。月日の道に關守無ければ、母御に離れて今年は早、既に三年のその日なり。ワキ詞「あら無慙や、何事やらん、姫が獨言を申し候。如何に姫が有るか。父が來りたるぞ、持佛堂を開け候へ。あら不思議や、何やらん物を立ち隠すやうに候。如何に姫、さても汝が母に後れし時、元結切り、遁世せばやと存じ候ひつれども、一族共の諫めにより、今迄浮世の住まひたり。汝男子ならば、父と一所に有るべけれども、女子なれば對の屋を作り置くなり。それに父が來りて、姫よと呼

ばば、さも嬉しげにて立ち迎ふべきに、さは無くして、何やらん、物を立ち隠す氣色の見えて候。さては人の申すも眞にて候ひけるぞや。實に汝は、今の母を木像に作り、明暮呪咀すると云ふは眞か。何とてさやうに淺ましき心をば持ちて有るぞ。母を戀しく思はば、經念佛し弔ひてこそ、死したる母も成佛し、おこと(一)も同じ蓮の縁となるべきに、さは無くして、さやうに恐しき事を企まば、正しく浮むべき母も奈落(二)に沈み、おことも同じ罪に沈むべき事の淺ましきよ。何とて物をば申さぬぞ。姫「さやうに御叱り候はば、隠さず申し候べし。痛はしや、母御前、今を限りの御時、「この鏡を和御前に取らすなり。母が姿を残す形見なり。戀しき時は見るべし」と、仰せ候ひし程に、或時、この鏡を見れば、母の面立映りしより、猶若やぎて見え給へば、地誦「さては亡からん跡迄も、さては亡からん跡までも、添ひ添はれんと面影を、殘させ給ひける母御の慈悲ぞ有難き。不審に思召されば、見せ參らせん鏡山(六)、立ち寄り給へ父御前、立ち寄り給へ父御前。

ワキ詞「これは不思議なる事を申すものかな。空しくなりし母の、何しに鏡に映りて見え候べき。(中略)や如何に姫、この鏡に母が影の映る事は無きぞとよ。何とて筋無き事をば申すぞ。姫「恨めしや、あれ程母の在しますを、思ひ隔てて山鳥(七)の、おろかに(八)見させ給ふかと、鏡の前

に泣き居たり。實にや別れての、涙も未だ干ぬ袖に、異妻を重ね給ひぬれば、その恨みにや戀衣の、見えじと思召さるらめ。よし父にこそ疎くとも、地謠「我には見えよ垂乳根」の、親の飼ふ蠶の、いと細し誰をかも、戀ひ瘦せ顔ぞ見ても泣く、涙がすみの悲しやな。底より曇り増鏡、あれこそ母よ御覽ぜよと、我が影に指をさす。實に哀れなりさればこそ、幼き身の心なれ。幼き身の心なれ。

ワキ詞「言語道斷」の事。我が影の鏡に映るを見て、母が影にて有る由を申し候は如何に。總じてこの松の山家と申すは、無佛世界(10)の所にて、女なれども齒鐵漿を附けず、色を飾る事も無ければ、まして鏡などと申す物をも知らず候ひしを、某一年都に上りし時、鏡を一面買ひ取りて、彼が母に取らせて候へば、世に無き事に悦び候ひしが、臨終の時姫を近づけ、我を戀しく思はん時は、この鏡を見よと申しし程に、我が影の映るを見て、母と思ひ歎く事の不便さは候。いや／＼所詮鏡の謂れを語つて、歎きを止めばやと思ひ候。やあ如何に姫、總じて鏡と云ふ物には、何にてもあれ、向ふ物の影の映るぞとよ。これ／＼見給へ。父が立ち寄れば父が影、扇を映せば扇の影、こゝを以て思ひ知れ。姫謠「實に／＼父の仰せの如く、今こそかくとも三吉野(11)の、ワキ謠「岸の山吹風吹けば、姫謠「底なる影も散れば散り、ワキ謠「磨けば磨く款冬(12)の、

姫謠「影を誤つ、ワキ謠「はかなさよ。地謠「子ながらも、これほど母に似けるよと、我が影ながら懐かしや。ワキ謠「父は涙にかき暮れてや、地謠「我こそは曇らすれ、面目なの鏡や。(下略)

(謠曲、松山鏡)

註 (1) 寢殿造の東西北三方に各々造り連ねてある別棟。(2) 楚の襄王と巫山の神女との神婚傳説。神

女が王に別れるに際しての語として有名。妾在二巫山之陽、高丘之岨。且爲三朝雲、暮爲三行雨。

朝々暮々陽臺之下。(宋玉文の高唐賦)(3) 晉の石崇の別館。觀花の宴に詩の作れぬ人に罰盃を與へた

話で有名。(4) 汝。(5) 地獄。(6) 鏡山いざ立寄りて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると(古今集卷

十七、雜上。大伴黒主の詠といふ)(7) 山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せれば慰むらん、いと哀

れなり、谷隔てたる程など、いと心苦し(枕草子、鳥は)この山鳥と鏡の哀話は支那傳説にある。

(8) 尾と愚かに掛く。山鳥の尾ろの秀つ尾に鏡懸け唱ふべみこそ汝によそりけめ(萬葉集卷十四、東

歌)(9) 垂乳根の親の飼ふこの繭籠りいぶせくもあるか妹に逢はず(拾遺集卷十四、戀四、柿本人

麿)原歌(萬葉集卷十二)は「おや」が「は」となつてゐる。垂乳根のは母又は親の枕詞。(10) 釋

尊滅後、彌勒菩薩の未だ出現なき時代のこと。こゝは無智未開の田舎の意。(11) 吉野川岸の山吹吹く

風に底の影さへうつろひにけり(古今六帖第六、紀貫之)(12) 菊科の植物。黄色の花を開く草の名。

シテツレ 姫 ワキ 父

松 山 鏡

【解説】

孝女傳説の形を取つてゐる童話。その本據は、やはり印度の寓話的童話で、雜譬喻經（卷下）「法苑珠林・雜擬部所引」に見える長者夫妻が酒甕に映る己が影を別人と誤解し、互に妬み恚つた話。是が支那及び朝鮮に傳はり、我が國でも早く聖覺法印の神道集や、康賴法師の作と云はれる寶物集等にも載せ、御伽草子鏡破翁繪詞・狂言土産の鏡等に作られてゐる。是は即ち鏡破の説話で、原話は嫉妬を戒める滑稽譚であるが、同一説話から派生して原話とは別個の容をなした地方的な孝行譚となつたものがこの松山鏡である。而して土産の鏡の内容は謡曲松山鏡とも亦交渉がある。

シテ「……これを見よ。……これ程目の前に寫す物の影が見ゆる。それが何が腹の立つ事ぢや」女罵いや／＼左様ではない。あれ見さしませ。妾が腹を立つれば彼の女奴が怖しい面をして、妾に向ひ居る。おのれ何として呉れよう。……見ればなか／＼腹が立つ。打割つたがよい。

（土産の鏡）

かちく山

童話に云く、昔田夫の年老いたるが、山田耕すありけり。妻の姫餉を送り來るに、狸これを竊み食ひつ。翁腹立てて、聽てその狸を生捕り、家に牽もて歸りて、梁に吊り上げたり。さて妻の姫に云ふやう、「この狸を羹にして食ふべし。よく調べて我が歸るを待ち給へ」と云ひて、又草野に出づ。姫を春きて歌を歌へば、狸哀みて、「己が命だに助け給はば、代りて麥を春かん」と云ふ。いと不憫なれば、索を解きて下す程に、狸忽ちに姫を食ひ殺して、その穴を羹とし、やがて化けて姫になりて居り。翁草野より歸りて、かの羹を啜らんとするに、狸元の形を現し「姫食ひの翁よ、竈下なる骨を見ずや」と嘲み笑ひつゝ、外の方へ走り出でて失せにければ、翁は箸を擲ち、姫が骨を見て泣くこと限りなし。

又こゝらの山に年経る兎ありけり。翁がいたく號哭く聲を聞きて、訪ひ慰め、「吾儕姫の仇を報ひてん。先づ豆を熬り給へ」とて熬らしつ。これを筭に盛りて、山へとて持て行くに、狸そ

の香に寄り来て、「我にも豆一握り許り得させよ」と云ふ。兎は計りたる事なり。「向ひなる山迄、柴を負ひていかば」と云へば、「兎も角も宣ふ事は背かじ。先づその豆を得さし給ひね」と切に乞ひにけれども、「柴を負はして後にこそ」とて、數多なる柴を負はし、これを先へ立て、ひそやかに燈を取り出でて火を打ち附くる



赤小本表紙

に、狸その音を怪しみて、「あれは何ぞ」と問へば、「かちく山なり」と答ふ。その火はや柴へ燃え附きたりければ、狸又問ふ。兎、「此處なんぼうく山なり」と答へする程に、火は早燃え擴がりて、狸の背を焼きにければ、いたく叫びて伏し軋び、

辛うじて振り落しつゝ逃げ失せにき。

兎又味噌に蕃椒を摺り交ぜたるを膏藥に拵へ、笠を深くし、火傷の藥なりとて賣りけり。狸は背を焼き爛らかされて、せん術なき折なれば、良き藥ならんと思ひて、背の火傷へ付けさす。

いと爛れたる瘻へ、蕃椒を塗り附けられ、火照りて痛きこと云ふべくもあらず。そこから軋びて、狸の火傷癒えたり。

兎又船を造る。狸これを見て、「その船何にする」と問ふに、「漁せんと思ふなり」とて欺けば、狸美ましく思へども、この道の匠の業には疎かり。「我は土もて造らん」とて、土船を造りて、兎諸共に澳の方へ漕ぎ出すに、狸の船沈みて、忽ち水に溺るゝを、兎は櫂取り延べてこれを打ち殺し、翁が爲に姫の鬢を復いしといふ。

(燕石棟志、卷之四、兎大手柄)

註 (*五卷六册。曲亭馬琴の考證的隨筆。文化八年刊。なほ、同じ著者の同年秋に刊した同種の



同本文

隨筆・烹雜の記の卷末に、燕石棟志の過誤を自ら補正してゐる。

【解説】

五大國民童話の一。江戸時代初期には「兎の手柄」(赤小本)「うさぎ大手がら」(黒本)の題名で流布せられてゐる。かち／＼山の名を用ゐたのは、十返舎一九自作自畫の黄表紙閣 思 獸世界などが初めか。一九と同時代の馬琴の燕石襟志でも、前掲の如く、「兎大手柄」の題で考證してゐるのである。室町末頃には既に成形してゐたと思はれ(志田義秀氏の推定では、唐辛子傳來の天文十一年以後かと云ふ)、黒白の對照、狡猾遲鈍と善良可憐の對比と共に、勸懲の寓意と智力の勝利とが語られ、任俠義勇の國民性に併せて、復讐精神の旺盛な近古時代意



歌 太 平 記 挿 繪

識が著しく反映してゐる。この童話の本源を因幡の白兎 童話篇 同項参照)にまで溯らうとする江戸時代諸學者の推斷が一面許され得ると共に、玉兎の聯想もあるに違ない。又狸は誑化の民間信仰の他に、十二類繪詞で十二支軍に戦ひ負けて穴に逃げ籠る敵主の惡狸の面影もある。同書を改題した寛文頃の板本「獸太平記」の挿繪に十二支歌合せの席で兎が狸を打擲する圖のあるのは、先後は即斷し難いとしてもこの童話との交渉を語つてゐるやうに見える。
なほ、本文は赤小本から採るつもりであつたが、安田善次郎氏の藏本は大震火災に焼失し、他に傳存してゐるものと索めたけれども竟に獲ず、止むなく燕石襟志のを収録することとし、「兎の手柄」は、表紙と内容の一部とが和田維四郎氏の江戸物語に載つてゐるのを更に複寫して、纔にその面影を示すことにした。

伏柴を ふさに負せて 歸るさに いや先立てて 火きり白 火きり杵もて ほと／＼と 火きり出せば 其音を 何ぞと問ふに 玉嚙 言になかけそ 此山は ほと／＼山と たばかりて 負ひたる眞柴 めら／＼と 火をさし焼けば 其音を 何ぞと問ふに 玉蔓 かけてな言ひそ 此山は めら／＼山と 露霜の 置きて去にけり。

(童話長篇、勝々山)

かち／＼山

猿 蟹 合 戦

昔々あつたとさ。山の猿と澤邊の蟹と、山を廻り遊びける。猿は柿の核を拾ひ、蟹は焼飯を拾ひ、蟹と取換へける。

猿「うまさうな焼飯の。この柿の核と取換へて下さい。然も是は五所柿の種。是を植ゑて、柿が出来たら、己に呉れさつしやい」蟹「如何にも〜易い事。換へて進じよう」

それより蟹は、件の柿の核を山の上へ持ち、「生れ〜、生らすば剪切らん」と云ふ。草木心無しと雖も、一夜の中に大木となり、柿悉く生りにける。柿を取らんと思へども、枝へ上る事は叶はず、眺め居たる。猿この所へ駆け来り、「枝へ上り取りて得ません」と、うまき柿をば取り、澁柿をば投げつけける。

澤蟹缺之助難儀。蟹「やたらに投げまいぞ〜、あ痛〜。皆澁柿だ。下りて下さい。さる

とはいき方の悪いぞ」猿一「旨い〜、旨い立ちくらみだぞ」猿二「旨いはこれ〜」猿「是は山わりだぞ。蟹のし太い奴、え〜澁いの〜」

蟹「何れも様よからう様に頼みます」豆蟹「ても上つては、お茶はへ」盲蛇市「四面伸して指し手引く手に見知らせませう」熊蜂刺右衛門「蜂と拂つて退治致さう」荒布入道「あら免倒な」猿奴だ。拙者は

庭に控へませう」手杵搗右衛門「きねん」祈禱でも堪るまいぞ。杵とかちん「は名所を知る」立白入道。庖丁太郎。卵ふはで「頭振り煽る。」



赤本さるかに合戦

猿は斯くとも知らず、蟹が方へ來たり、圍爐裏の火に當らんとしけるに、豫て企みし卵時分の良しと撈付けける。

猿「あゝ熱や、キヤッ／＼」庖丁手桶に待ちかけた。庖丁「火傷は水でも付けなさい。切つて」蜂「八幡きかぬぞ。さあ／＼刺すぞ、痛からうぞ」蛇「これからは俺等が番だ、刺いて呉れよう」澤蟹「何れもの御蔭で、さるとはよいきびの。何と狂言の仕組を見たか」澤蟹意趣返す。

猿を生捕らんと、我も／＼と働く。

澤蟹「おれくしきてわしたな。笹蟹の手柄を見ろ」猿「荒布で腹が之つた。許し給へ、キヤッキヤッ」蜂「後向かねば刺されぬ。何と痛からうが」杵「丁と杵が參つて候。何と痛からうがや」猿「あ痛／＼／＼」白「白が待つてゐるぞ」庖丁が繩を切つて落さんと待ちかけたり。卵喜び、「何れも御大儀」

澤蟹「さるにてもその分には置き難し。尻焼け猿に牛蒡でも食はしませう」白「白が働を見て

置け」庖丁「先づ縛らう。首が危いぞ」荒布「目向き出した」猿「どうでもしろ。敵はぬぞ」

卵「もう許してやらしやう」

(赤本、さるかに合戦(7))

註 (1)未詳。「お茶でも上つてはへ」のつもりか。(2)荒布に掛く。(3)祈念。杵に掛く。(4)餅。(5)卵のふは／＼に掛けた洒落か。(6)切つてしまふぞの意か。(7)一冊、西村重長畫。

【解説】

五大國民童話の一。復讐を主題とするのは近古意識であり、徳川初世の赤本に「さるかに合戦」さるかに、黒本に「猿蟹夢物語」等があるから、この童話は室町末迄には成形してゐたであらう。

その本據は恐らく外來の遊離説話と思はれる。南洋セレベス島の猿龜合戦の童話は我が猿蟹合戦の前半に、又同島の慾張婆退治の童話は後半に類似してゐる事が、松村武雄博士に依つて指摘せられてゐる。(神話傳説大系、インドネシア神話傳説集、「慾張り寡婦」及び「猿龜合戦」参照)同じインドネシア地方の首狩物語も婆退治の異形であり、それ等と類話をなす我が九州地方の山姥退治童話は又、更に海を隔てた大陸の蒙古に於て全く同型の童話を見出すのである。即ち鳥居

み子女史の「土俗學上より觀たる蒙古」所載の鬼婆の話は、グリム童話の「赤頭巾」及び狼と子山羊型の話と猿蟹との混融したやうなもので、同女史の見では更に桃太郎をも併せたと觀てあるが、是は猶即斷を許し難いけれども、猿蟹と蒙古童話との關係は確かに認められねばならない。

又別に猿の形態に關する天然傳説で、朝鮮及び九州に流布する猿蟹の争ひの童話も、猿蟹合戦の前半と交渉あるべきを想はせる。

本童話は童話長篇にも作られてゐるが、黄表紙に戀川春町作の猿蟹遠昔噺があり、又、六樹園の序を添へた狂文猿蟹物語（六々園春足作）及びこれを題にした狂歌大會の詠草もある。

口惜しと梢にらみし時よりや蟹の眼は上につきけん

聽風軒草浪

白杵に強くうたれて人よりも蟹のまねして泡をふく猿

龍瑞園弘主

猿が取りて投げし一つの葎柿が昔ばなしの種となりなき

松十歸

桃太郎

昔々、爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に。美しき桃流れ來しを、取りて歸る。

爺「あゝ草臥れた。早く歸つて婆が顔でも見よう」婆「やれよい桃かな。も一つ流れて來い。

爺におませう」

爺婆桃を服し、忽ち若やぎて一子を設け、桃太郎と名づく。

爺「これ程めでたい事はない」婢一「御藥よう御さんす」

桃太郎誕生。ふぎやく／＼ほぎや。

産婆「この婆が齡に肖りなさいよ」婢二「湯を進ぜやせう」婢三「さあ着せ申しやんせう。栗蟲のやうな御子でござんす」

桃太郎「なんとお爺。澤庵漬の石でも、片手でかう差上げられよう。やい」甲「強い餓鬼だ」
乙「これはならぬぞ。四つ子の大力だ」

桃「團子持つて鬼が島へ参りたい」爺「それはよしにしや。團子が好きなら、こしらへてやり申さう」婆「太郎が初めての望みで御さんす。やらしやいませ」

爺「日本一の黍團子、道中の辨當に澤山出来るが、一人旅が心もとない」婆「よく出来ました」桃「ちよつと百まるめた」

桃太郎島渡り。

桃「汝等供をせよ」犬と猿「随分仲善くしましよ」猿「日本一の黍團子。二三十下され。御供申ませう」雉「さるとは慾の深い。一つ下され。御供申さん」犬「猿を可愛がらしやるより犬を可愛がつて、も一つ下され。御恩報じに御供致さん」

樊噲・朝夷(兩人前の門破り、いでもの見せんといふまゝに、わりや／＼)。

猿「きやつきやと言うても、おいらはならぬ事だ」雉「親方、そこらで力一せい出して頼みます」犬「片端から鬼共を噛み拉いでくれん」鬼「鬼若衆が来た」鬼王「やれ、門を破らせるな」鬼二「あゝ草臥れた」

桃太郎寶物を得て、本國へ歸る。

桃「寶はそれぎりか、やい」鬼王「命には代へられぬ。みんな出せ」鬼共「寶物残らず差上げます。親方を御免」

(赤本、むかし／＼の桃太郎)

註 (英雄譚・力競説話、朝夷門破り参照。(一)一册、藤田秀素畫)



(村栖栗ニイラ本日) 地生誕郎太桃

〔附イ〕

日本國に於ては、欽明天皇の御宇に、大和國泊瀬の河に、興水の折節、河上より一の壺流

れ下る。三輪の杉の鳥居の邊にて、雲客この壺を取る。中に嬰兒あり。容柔和にして玉の如し。是降人(1)なるが故に、内裏に奏聞す。その夜御門の御夢に、嬰兒の曰く、「我はこれ大國秦の始皇の再誕なり。日域(2)に機縁ありて今現在す」と云々。御門奇特に思召し、殿上に召さる。成人に随ひて、才智人に超えて、年十五にて、大臣の位に昇る。秦の姓を下さる。秦といふ文字「はた」なるが故に、秦河勝是なり。

上宮太子(3)天下少し障ありし時、神代、佛在所の吉例に任せて、六十六番の物まねを、彼の河勝に仰せて、同じく六十六番の面を御作にて、即ち河勝に與へ給ふ。橘の内裏の紫宸殿にてこれを勤む。天下治まり國靜かなり。上宮太子、末代の爲、神樂なりしを、神といふ字の片をのけて、作を残し給ふ。これ日よみの申なるが故に、申樂と名附く。即ち樂しみを申すによりてなり。又は、神樂を分くればなり。

彼の河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子に仕へ奉り、この藝をば子孫に傳へて、化人跡をとめぬによりて、攝津國難波の浦より、空船(4)に乗りて、風に任せて、西海に出づ。播磨國、坂越の浦に着く。浦人舟をあけて見れば、形人間に變れり。諸人に憑き崇りて(5)きすい(6)をなす。乃ち神と崇めて國豊か也。大きに荒るゝと書いて、大荒大明神と名附く。今

の代に靈驗あらたかなり。本地毘沙門天王にてまします。上宮太子、守屋(1)の逆臣を平らげ給ひし時も、かの河勝が神通方便の手に懸りて、守屋は亡せぬと、云々。

(花傳書(5)、風姿花傳第四、神祇)

註 (1) 天から降下した人。(2) 日本。(3) 聖德太子。(4) 物部氏。(5) 詳しくは風姿花傳書。能樂即ち猿樂能の大成者世阿彌(觀世元清)の著。彼の藝術論集。但しこの神祇篇は後人の偽作だとの説もある。

〔附、口〕

小兒の昔話、古書に似たるもの多かり。又必ず古事にも據らず、幼遊びの事に付きて出で來しも有るにや。瓜姫の話等これなり。今江戸の小兒多くはこの話を知らず。

老父老嫗在り。老父は柴を刈りに山へ行き、老嫗は洗濯に河へ行きたりしに、瓜流れ來ければ、嫗拾ひ取りて家に歸り、老父に食はせむとて割りたれば、中より小さき姫出でたり。愛しき事限り無し。夫婦喜びて、一間の中に置く。姫生ひ立ちて、機織る事を能くして、常に一間の外に出でず。或時庭の木に鳥の聲して、「瓜姫の織りたる機の腰に天邪鬼が乗りたりけり」と聞えければ、夫婦怪しと思ひて、一間の中に入りて見るに、天邪鬼瓜姫を繩にて縛りたり。夫婦驚きて是を助け、天邪鬼を縛り、「此奴薄の葉にて引かん」とて、薄の葉にて引き

て切殺しぬ。薄の葉の根に赤く色付きたるは、その血の痕なりと云ふ物語、田舎には今も語れり(信濃の人の語るを聞きし事有り)。桃太郎の話と何れが先なるか。基づく處は竹取の翁などにや。古き雀小弓の射乏に、姫の河端に衣洗ふ處に、瓜の流るゝ晝を描きたる有り。天和・貞享頃の晝と見ゆ。(下略)

(嬉遊笑覽卷之九、言語、瓜姫の咄)

【解説】

五大國民童話の一。恐らく世界大播布説話の一たる英雄出生説話の一種型に屬するもの。建國英雄(聖祖)に關して語られるのが普通である。即ち支那の竹王傳説(華陽國志・後漢書の西南夷傳・述異記)と類型。朝鮮及びアイヌにも同型の説話が流布してゐる。又瓜子姫子の民間童話(附ロ)とも出生の形式に於て類型をなし、秦河勝の出生傳説(附イ)とも相似てゐる。文献としては江戸時代初期の雛豆本(童話篇、舌切雀の項別圖(九二頁・九三頁間)参照)や赤本が古いが、老夫婦が桃を食して太郎を産む形が必ずしも原形であるかは定め難い。後のものであるが、燕石襟志(卷四)に童話として本文に掲げてあるやうな、桃の中から生れる形が本格の説話型で、原話は必ずさうであつたと思はれる。(桃を食する形も燕石襟志には別傳として添加せられ

てゐる)地方により箱入りの幼兒が漂着する型もある。

この童話の成形は室町末であらう。鬼ヶ島渡りは一寸法師(童話篇、一寸法師参照)や朝夷・義經の島巡り(英雄譚、巡島説話参照)と交渉があり、何れも爲朝の鬼ヶ島渡り(同上)から派生したかと思はれ、一面和寇時代の國民の元氣を反映し、「日本一」の詞も近古思潮を示してゐる。

禽獸童話の分子は支那・朝鮮等のものには無い。不和の二動物犬猿の協力に教訓が自ら寓せられてゐようが、猶、猿には猿田彦(神話篇、猿田彦解説参照)、雉には頓使(神話篇、雉の頓使解説参照)と、それ〴〵記紀神話に源流が求められ得るやうに考へられる。桃が鬼を征服する思想の本源乃至來由を併せ考へる事が、一段この推測を可能ならしめる(神話篇、千五百産屋参照)。

瓜子姫子の童話は、植物の形態に關する天然傳説をも含んでゐる。あまのじやくは是又記紀神話の天探女に關係があらう(神話篇、雉の頓使参照)。

なほ、近時、桃太郎の誕生地として、日本ラインの栗栖村・岡山・讃岐の鬼無等が何れもその候補者としてそれ〴〵提示せられ、互にその主張を持して譲らぬのは面白い現象である。童話の遊離性と粘着性と、それから説話乃至文學が事實・地名・古跡等を生む作用とを、如實に物語ると同時に、如何に本童話が國民的に廣く深く浸透してゐるかを自ら説明してゐる。

I

(上略) 然る折節(1)、傍に有りける大の岩二つに割れ、一人の老女十六七なる童が手を引き立
出で、「我こそは山河を廻る鬼女にてあり。さればこの子を人倫に交らせ、輪廻の業を免れさせ
んと願へども、秋津島がその中に、主と頼まん者無く、空しく黙止す所に、御身の未生以前の
武勇、現在の剛力、聞くにつけて頼もし。このくわい(2)を奉る。臣下となさせ給へ。時得て
仕ふる君なれば、彼が名告をば公時と召さるべし。如何にくわい(3)と、親とな思ひそ、鬼ぞかし。
常々申し聞かせし如く、我が壽命二百餘歳に極まり、來る十三日にちくらが沖(4)に沈むなり。
輪廻の業をば助けて得させよ。萬事は頼む人々」と忽ち鬼女と現じ、虚空に飛んで失せにける。
くわい(5)とは恩愛の名殘堪へ難く、暫しは呆れて立ちにける。頼光御覽じて、「いで彼奴が心をみ

ん」と、「未練なる小冠者や」と、傍なる大石おつ取り投げ給ふを、左手へ開きむすと取り、在
りし所にそつと置き、驚く氣色無かりけり。頼光見給ひ、「神妙く、夫れ傳へ聞く石公(6)は兩
度まで大河に履を落し、張良が心をみる。我も家臣と爲す上は、和殿が心底を能つく知らでは
叶はぬなり。今の足踏身の開き、心剛にて大力、頼光が臣下と頼み、苦しからざる器量なり。
いでく主従の契約せん。名告は母が理にまかせ、坂田宿禰公時」とぞ付け給ふ。假初ながら
三世の奇縁淺からず、大江山迄御供申し、「數多の鬼神を亡し、名を世上に觸れたりし、坂田
公時とは是なり。」

(古淨瑠璃、清原右大將(5)、第五)

註 (1)源頼光清原右大將の讒により勅勘を蒙り足柄山に世を忍ぶ折の事。(2)日本内地と朝鮮との界で

對馬の海中に在るといふ。(3)黄石公。張良の故事。英雄譚、義經傳説、大天狗僧正坊參照。(4)英雄

譚、鬼神退治、酒類童子參照。(5)金平本(六段本)、延寶五年刊。

〔附イ〕

(上略)されば従ふ郎黨には、渡邊源五綱・卜部季武・碓氷定光・坂田平太金時、以上四人
の者共は、四天王と號して世に威を振ふ勇者なり。その中にも金時は、山姥の子なりしが、

一歳頼光山中にて、鬼女に貰ひ給ひつゝ、君臣の好をなし、日夜に忠を勵まし、累代無雙の勇士なり。

(古淨瑠璃、公平誕生記(初段))

註 (*金平本(六段本)、刊年不明。)

〔附 口〕

爰に攝津守源頼光、天下の武將たりし時、御家の執權坂田民部金時とて、累代無雙の勇士あり。出生を尋ぬるに、一歳頼光清原の右大將の讒言にて勅勘を蒙り、足柄山に忍ばせ給ふ折節、何處よりともしら眞弓、矢猛心の類無き、名にしおひたる足引の、山路を廻る山姥が、頼光に奉りしその子なり。その時よりも君に仕へ、四天王と號し、數度の功名比類無く、その勸賞に駿河の國を賜り、府中の城に居住あり、榮華に暮し給ひける。(下略)

(古淨瑠璃、澁根悪太郎(第一、金時都入り))

註 (*金平本(五段本)、寛文四年刊。澁根悪太郎は金時の一子坂田金平の幼名。)

II

總州太守(頼光朝臣、かねては天延四年八月には任限充ちて、可上洛にて有りけるを、

遮つてその年の三月、太政官の廳より下文を賜はり、可被仰付旨あり、急ぎ可被上洛由被仰下。かゝりし程に、三月二十一日御首途ありければ、當國の武士は申すに不及、農民工商等に至る迄、皆濱際に出儲けて、御暇を乞ひ、既に纜を解き給へども、帆影遙かに隠るゝ迄、その後を見送りて、甚だ名残を惜しみけり。

かくて太守相模國より陸地を経て、足柄山に差し懸り、峠に眺望し給へば、南は蒼海冥濛として、萬點の帆風、天、北は重山峙ちて、花の梢は見えねども、文無く誇る若葉の茂み、青みたる中天の雲の上より、皓々と見えたる雪は時知らぬ、富士の高嶺の我貌なるも、無類眺めにて、暫し御馬を控へ遣遙し給ひけるが、「渡部源次」と召す。「綱これに候」とて進參す。「何如にや源次あれを見よ。向ふの岨に赤色の雲氣有り。頼光嘗て聞けり。四方常に大雲有り、五色具つて而も不雨降、その下には必ず賢人の隱家有りと云り。されば漢の高祖始皇帝が疑を避けて、芒碭の山澤(巖石の間に隠れたりしを、妻の呂后その跡を求めて、尋ね逢ひたりしかば、高祖怪しめて、「何として我が隱所を知れるや。呂后が曰く、「君の坐する所には常に上に有三雲氣。この故その所を慕うて尋ね來る」と云へり。今彼所に有三雲氣は、一定人傑の隠れ居るなるべし。急ぎ見て參れ」と宣へば、綱「承りぬ」とて、馬引寄せ打乗り、件の雲氣を

目に付けて歩ませ行く。

とある岩角に到りて、谷底を直下したれば、屏風を立てたるが如くにて、何如なる駿足なりとも、通る事は難得と見えければ、頓て馬を乗り放ち、鞭片手に持つて、木陰の蜘蛛の絲打拂ひ、草推分け、木の枝に取り付き、岩間を跪て、七八町がほど歩み下りて見れば、怪しの萱屋あり。内には親子と覺しくて、六十餘なる姫と、傍に面ざしは二十ばかりにや有らんが未だ童形なると向ひ居たり。渡部打嗽きて立寄りければ、老姫「御事は誰そ」と問ふ。「これは總州刺史頼光朝臣の陪臣渡部源次綱と云ふ者なり。頼光主上洛し給ふが、今この上の山に御座します。御邊達を召具して參れとの御使に來れり。いざ渡り給へ」。老姫聞きて、「太守何として我がこの幽窟を知れるや」。綱が曰く、「雲氣に従征してこゝに來れり」。老姫「さては太守その機を知れる人なり。世に人雖多、然も知れる者少し。我將に行いて見えん」とて件の童形を誘引して歩みたり。最前渡部がさしも歩みかね泥みたりし岩壁を、平地の如く歩みなして、太守の前にぞ出でたりける。

太守見給ひ、その相の奇なる事甚だ驚嘆し給ひて、その姓名を問ひ給ふ。老姫答へて、「天地の間に孕まれて、天の命を稟け、何を以てか姓とせん」。太守、「その童は汝が子か。その父は誰

そ」老姫が曰く、「これ我が子なり。而も無父。妾嘗てこの山中に住む事、幾年と云ふ事を不知。一日この巔に出でて寝ねたりしに、夢中に赤龍來つて妾に通ず。その時雷鳴夥しくして驚き覺めぬ。果してこの子を孕めり。生れてより二十一年を経たり。長るに及んで、山嶽をも不爲難、磐石をも不爲重、而もその意密如たり」。太守宣ひけるは、「昔秦の時に沛縣の太公が妻劉媪と云ふ者、大澤の陂に息めり。夢に與神遇す。時に雷電晦冥なり。太公往いて視之、蚊蛟龍その上に見る。已にして孕める事あり、遂に産一光適々茲に來りて茲に遇ふ、可然値遇ならめ。向後は頼光を頼めかし。心の及ばん程は、恩をも思ひ宛つべけれ。何如にや」と宣ひければ、老姫承り、「鹿ある山を獵師知り、魚ある浦を漁夫知れり。太守武勇に富み給へば、その武勇の在所を知り給ふ。我この童を以て人に託せんと思ひつれども、可然武將の在さぬ故、その本意を空しくせり。今よりしては太守に可獻



(面能) 姥山

子。その爲人隆準に於て龍顔なり。この子立つて沛公となり、秦楚を滅して爲帝、漢高祖これなり。今この童比之。雖然陰德未見、世人曾て不知之。頼

之、御命の料に召し使ひ給はれ」とぞ申しける。

太守不斜喜び給ひ、旅の儲の破子(7)など召寄せて、主従約盟の御盃とて賜つてけり。渡部綱拍子を取りて、「美玉有(8)斯(9)置に罷めて藏したり、善(10)き賈を求めて沽諸(11)。今善(12)き賈を求めたり、事(13)公得(14)時」と祝しけり。太守笑(15)壺に入り給ひ、「能く仕りたり源次、當座の會釋面白し。誠に公に事(16)るに時を得たれば、その名を酒田公時と可(17)名乘(18)漢の陳平・張良・紀信・樊噲(19)と云ふとも、綱・季武・貞光・公時この四傑の上に何をか有(20)加」とて、喜び給ふ事無(21)限。さてこそ須彌の四天(22)に表し、頼光の輔翼の臣四天王として稱しけり。(下略)

(前太平記(1)卷十六、頼光朝臣上洛の事(2)酒田公時が事)

註

(1)上總守。(2)秦始皇帝常曰、東南有二天子氣。於是因東游以厭之。高祖自疑、亡匿隱(3)於芒碭山澤(4)巖石之間。呂后與(5)人俱求常得之。高祖惟(6)問之。呂后曰、季所居上常有(7)雲氣。故從往常得(8)季。高祖心喜。(史記、高祖本紀)厭は鎮める意。季は高祖の字。(9)芒縣と碭縣との間に在る山澤。(10)さつぱりと開けてゐる。(11)其先劉媪嘗息(12)大澤之陂、夢與(13)神遇。是時雷電晦冥、太公往視、則見(14)二蛟龍於其上。已而有(15)身。遂產(16)高祖。高祖爲(17)人降準而龍顏……意蓋如也、常有(18)二大度。(史記、同上) (19)鼻の高いこと。(20)辨當箱。(21)子貢曰、有(22)美玉於(23)是、韞(24)匱而藏(25)諸。求(26)善賈

而沽(27)諸。子曰沽(28)之哉、沽(29)之哉。我待(30)賈者也。(論語子罕篇) (31)四人共漢高祖の名臣。(32)帝釋の外臣で須彌山の半腹に在る四王天の主。東方持國・西方廣目・南方增長・北方多聞。(33)四十一卷。醍醐天皇の延喜七年から近衛天皇の御宇までの通俗的な國史。太平記に做つたこと言ふまでもない。

作者は藤本元。享和三年の自序、同二年の愚山外史の漢序がある。

【解説】

山姥傳説と合體した怪童傳説の童話化したもの。英雄童話として桃太郎と對をなし、その出生説話としての型も相對立してゐるが、此は主人公が少年で且禽獸童話の分子を含むにかゝらず、史上英雄たる坂田公時の出自を物語るものであるから、彼の架空的なのに對し傳説的成分が濃厚である。土地も相州足柄山中と固着的なもの(信州説・越後説等もある)、主人公の名に實在性を帯びてゐる點と共に童話の定則を破つてゐる。

この童話は世界大播布説話の一種、動物傳育型(Rhea Sylvia type或は Atalanta type)の變種とも云ふべきものであるが、内國的に類型の先蹤説話として、宇津保物語(後蔭卷)の仲忠の生立物語を有する。(萬一これが金太郎童話の前身とすれば、本童話に禽獸説話が含まれてゐるのは不

思議でない)是に、民間傳説に本源を有し、且謡曲山姥で一層藝術化せられた半身半人的な存在山姥——一種の鬼女でもある——が謬着して來たと見られ得る。近世の山中鹿之助生立傳説に至つては、明らかに本童話の變形である。

源頼光の勇臣としての坂田公時の逸話は、古く今昔物語(卷二十八、頼光郎等共紫野見物語)に見え、四天王としては古今著聞集(卷九)にも出てゐる。(英雄譚、怪賊説話、鬼同丸參照)

本童話の成形は室町末か或は恐らく徳川初期に入つてからであらう。前太平記(享和二年の序がある)の記述は説話の筋は最も整備してゐる代りに、かなり文飾があり、又、支那傳説の影響を認め得るが、原傳説はもつと單純な素材なものであつたに違ない。即ちそれよりも遙に早い徳川初世の金平淨瑠璃の諸曲(本文I及び(附イ・ロ))でも知られるし、又それらを繼承し、且前太平記よりも猶九十年も古い近松の戯曲^{こまち}山姥は、謡曲山姥から來てゐるが、一層空想的であると同時に頗る童話的で、既に禽獸説話を含み、公時の名も、清原右大將の古曲(I)に於て怪童としてあるのを承け繼いで、怪童丸としてある。金太郎の名はその後何時頃から與へられたか不明であるが、それは特別の理由からではなく、金時が童話化するに當つて、當然に且自然に桃太郎・浦島太郎・物臭太郎等に類化したものであらう。文化六年四月中村座二代目菊之丞

三十七回忌追善の所作^{かんたんそののきくてよ}邯鄲園菊蝶で、瀬川路考が勤めた役名は即ち金太郎となつてゐる。なほ金平淨瑠璃の主人公坂田公(金)平は、この金時の子として作り出された架空の勇士であるが、逆に金太郎童話の發達完成をば却つて幫助した點が少くないと考へられる。

この童話に取材した歌曲が清元・富本・長唄それ／＼にあるが、最も有名なのは常盤津^{たきつ}の薪荷雪間市川である。

母重ねて「あの岩窟に熊・猪を追ひ入れ置き、折々力を試してみれば、御覽候へ、あの如く引裂き候。これ、お目見えのしるしに相撲所望」と云ひければ、ずんと立つて、窟の口に立つたる磐石、軽々と取つて投げのけ、兩手を擴げ突つ立つ所に、内より荒熊飛んで出るを、どつこいまかせとしつかと抱く。熊事もせず、捻ぢ付けんとすれども、いつかな動かばこそ。搦み付けばこぢ放し、組み付けば押伏せ、呻き猛る咽笛を、二つ三つ叩きつけ、ひるむ所を取つて押へ、片足掴んでくる／＼、二三間かつばと投げ、「あゝ草臥れた。乳が飲み度い、母様」と、母の膝にぞ凭れける。

(山姥)

文 福 茶 釜

往昔茂林に守鶴と云ふ老僧有り。應永年中、開山禪師に随つて館林に來り、茂林寺十世岑月禪師まで随從す。この僧有徳碩學(1)にて又能書なり。茂林寺七世舟禪師の時、會下(2)の衆僧千人に越え、法幢(3)盛なる事他に較ぶる無し。然るに茶釜小さくして、茶行き渡らざるを嘆きければ、守鶴何處とも知らず一つの茶釜を持ち來り、茶を煎じけるに、晝夜汲めども盡きる事無し。人々不思議に思ひ、その故を問ふ。守鶴曰く、「これは分福茶釜とて、何千人にて飲むとも盡きる事無し。殊にこの釜八つの功德有り。中にも福を分ち與ふる故、分福茶釜と云ふ。一度この釜にて煎じたる茶にて、喉を潤す輩は、一生渴きの病を煩ふ事無く、第一文武の徳を備へ、物に對して恐るゝ事無く、智慧を増し諸人愛敬を添へ、開運出世し壽命長久なるべし。この徳疑ふべからず」となり。

それより年月を経、十世岑月禪師の代に至り、或時守鶴一睡の中、手足に毛生え尾見えたり

など、誰となく嘯きければ、守鶴早く悟り、方丈(4)に向つて曰く、「我れ開山禪師に随ひしより、當山に在る事百二十拾餘年に成りぬ。然るに今化縁盡きて退き侍る。我れ眞は數千載を経たる貉なり。釋尊靈鷲山(5)にて説法なし給ふ。余これ八萬の大衆の數に連り、それより唐へ渡り、又日本へ來り住む事凡八百年、開山禪師の徳に感じ、隨從せしより今に至る迄、由來の高恩言語に述べ難し。今は名残を惜しまん爲、源平八島の戦ひを、今現はして見せ申さん」と、一つの咒文を唱ふる中より、寺内忽ち滿々たる海上となり、源氏は陸、平氏は船、兩陣互に攻め戦ふ有様、恰も壽永の陣中に有るが如し。人々不思議と見る中に、跡形も無く消え失せぬ。又、「釋尊靈山上説法の體を拜ませ申さん。然し、假の戯れ事なりと、疎しと思ひ給ふ事勿れ」とて、又も咒文を唱ふれば、庭上梢紫雲棚引き、空に花降り、音樂聞え、七寶の瓔珞、千種の莊嚴、ありくと釋尊獅子の寶座に説法あれば、數多の御弟子、羅漢達、頭をうな垂れ聽聞の體、今見る事の有難さよと、



茂林寺(上州館林)

皆一同に伏し拜めば、守鶴「今はこれ迄なり」と、正體現はし貉となりて飛び去りぬ。方丈始め一山の僧俗、嬰子の母に別るゝ如く、歎き慕はぬは無し。その後神に祭り、守鶴宮とて一山の鎮守となり、今に靈驗あらたなり。

扱守鶴能書なりと雖も、筆跡皆失せて、直堂の札のみ残り。今打碑して人に與ふ。これを懸け置けば、惡魔を拂ひ、萬づの災難を除く。信すべし。又、茶釜の茶にて練丸する守鶴傳の妙藥あり。その功神の如し。右に云ふ如く、守鶴貉となり飛び去ると雖も、眞はこれ羅漢の化現なりと云ふ。實にさも有るべし。百有餘年の中の善行、子弟を教へ、俗を導く、皆世の常の人の能く及ぶ所に非ず。尊むべし、敬ふべし。 上州館林青龍山茂林寺。

(茂林寺縁起〔甲子夜話〕卷三十五)

註 (1)徳高く學識博く深い人。(2)會集して師事する。(3)法流・法統。(4)長老。(5)印度摩羯陀國五山の最高峰。鷲峯とも靈山とも云ふ。釋迦如來說法の聖地。(6)平戸城主松浦靜山公の隨筆。正・續・後篇合せて二百八十卷。文政四年十一月甲子の夜から稿を起したに因んで此の題名がある。

〔附〕



赤本表紙題簽

中昔の事かとや。東山殿(1)の御茶坊主、分福・福齋・分齋・福庵とて、御側去らすの座頭有り。頃は秋の末つ方、餘り淋しさのまゝ、分福は築山に唯一人、吸ひ筒(2)を友として、四方の景色を眺め居けるに、木陰より狐一匹駈け出で、草藻屑を冠り、既に化けんとしたる所を、分福はよき慰みと飛んで下り、聽て狐と引組み、難無く生捕り、我が部屋に來りける折節、友の坊主達、「是は善き物を捕へ召さつた。いざ料らん」と、俎の上に直しけり。

無慘や狐は、茲こそ一世の命づく。さあらば此處を遁げんと思へど、四足を括られ、遁ぐる事なり難く、空死をぞしたりける。それとは知らず坊主達、「いざや彼奴めが生肝を取らん」と云ふ。福齋は「尻尾が望み」と云ふ。思ひ／＼に狐一匹を四人の主付き、既に危く見えし時、「時分は此處よ」と跳ね起き、知らせの尻をひり懸けて、驀地に遁げ行くを、「何處へ遁がさん、憎き狐奴。剩へ尻までひり懸け居つた」と、我も／＼と追ひかけ行く。

狐も此處を大事と駈け行けど、四足を痛められける故、道果行かず、血氣盛んの坊主共に追ひ立てられ、最早敵はねば、「如何せん」と傍らを見れば叢あり。「此處こそ天の引合せ」と、叢へ駈け入れば、福齋ひよつくりと叢より出る。こは敵はじと逃げんとするに、後よりは追ひ来る、先へとは行かれじ、如何と思案落着かず。やう／＼と思付き、茶釜と身を引變へける間もなく、草むらを「此處よ其處よ」と探せども、狐の形は見えもせず。分福はきつと見て、「これに見事な茶釜有り。せめての代りにこの茶釜を持ち行き、茶を煮て楽しまん。狐奴は残念、打漏したる腹立ち」と茶釜取り持ち歸りける。

部屋にもなれば、圍爐裏に炭を熾し立て、茶釜を設らひ煮立てける。無慘やな、狐は化ける物こそ多かるべきに、茶釜と化けたは絶體絶命運の盡き、諦め無常を觀念す。次第／＼に火は強く、熱さは耐へ難く、思はず知らず正體の尻尾をによつと突出せば、四人共に肝を消す。何が火の勢強く熾つて、圍爐裏の中より跳んで出で、座敷の内を跳び廻れば、皆口々に聲を揚げ、「分福茶釜に尾が生えた。分福茶釜に目が生えた」と、大聲揚げて囃しける。

この騒ぎを東山殿聞き給ひ、「憎き坊主共が爲業」と、皆裸にして追ひ出さる。四人の坊主は思はずも裸坊主となり、とある山陰に休み居る。件の狐は火傷だらけになつて、この所

へ遁げ来て見れば、件の坊主共此處に居たるを見て、うたてや鈍めと、貉に斯くと話せば、貉是を聽きて、「我に任せよ」と、件の坊主の臥したる所へ罌丸を廣げて、頭へとんとかぶせける。坊主共是とは知らず、「こは暖かになつた事かな。有難や、汗が出る」と貉の業とは知らず喜びける。何とか爲たりけん、「あたり坊主に目を醒させん」と強か小便をしかけるが、天の憎しみに因つて、忽ち四人の坊主に形を見つけれられ、遂に生捕となつて、「是を土産に訴せん」と、貉を先にほつ立て／＼、東山殿の屋敷へ歸りける。

東山殿聞召し「我が前へ貉を連れける、神妙」と、御褒美を下され、件の貉は御家中の疝氣持共に下されける。有難しとも中々何に譬へんしるも無し。

(4) 分福「化けるは／＼、よい慰みだ」分福様子を見る。

甲「あれ／＼二郎見ろ。ぼん様狐と角力取るわ」乙「どつちが勝つな」丙「繩を進ぜう、縛らさい」分福「こいつ奴が、やらかしおつた、臭い。分福が手並みを見よ」

福庵「分福、よき物を持つて来やつた」福齋「なんだきよつねか。さあ取り敢へず獻さう。飲みや」分福「狐奴が化ける所を生捕つた」分齋「此奴料るべい」狐「あゝ、夢になれ」

福齋「分福や、待ちや。此奴が耳を切つてくりや。黒焼にして疝氣に用るやう」分福「おらは尻尾を切つて賣るべい。さあ、どれから切るべいの」分齋「おらは其奴が目玉を取るべい」狐「狐そら死、生きたる心無し。」

分齋「迷子の狐やい。福齋、どつちへ逃げおつた、見えぬか」福齋「これはよい釜ぢや」福庵「福齋、なんと金儲けか」分福「その茶釜は己れが見つけたぞ。分福がのだ、手をつけるな」

小姓甲「たみや殿（見しやしやれ」小姓乙「おかしな物だの」分齋「さあさ、分福茶釜に尾が生えた」分福「も一つ反して」分福勇む。福齋「そこらで、分福茶釜に手が出たわ」福庵「分福茶釜に目が出来た」分福「あんまり分福と呼んで呉れるな。奥へ聞えてしくじらせるな」

狐「この度はさんぐ命からぐの目に逢ひました」狐頼む。貉「憎い奴等だ。氣遣ひするな。敵を取つてくりやう」貉様子を聞く。貉「此奴等に罫の袋をかぶせてやらう。坊主共かたはちから芋雜炊にするぞ」四人の「これは」同「よい御馳走かな。暖い事の」分福「あ、この狸奴故に苦勞した」福齋「苦勞の段か、お冷飯まで食べた」福庵「坊主が散し髪で働きました」分齋「即ち生捕りました」殿「褒美取らせい。今より前の如く勤めい」

(赤本、ぶんぶくちやがま⁽¹⁰⁾)

註 (1)足利義政。(2)瓢。(3)當り棒(搦粉木)にかけて輕蔑して呼んだ語。搦粉木といふ語だけでも、僧侶の蔑稱に用ゐられる。(4)以下、挿繪の散語を一括して掲げる。(5)本文では福齋とあるが、挿繪の服装から判ずれば、この詞は分福の語として記されてある。(6)姓ならば「田宮」であるが、挿繪は小姓姿に畫かれてあるから、「民彌」であらうか。(7)9ポイントの人名は原文に記載在るもの。以下同じ。(8)此處の挿繪だけ分福と福庵との服装が入れ違つてゐるが、頭巾を冠つてゐる點からも、此の説明の地の文からも、亦詞からも、これを分福とせぬわけに行かぬので斯うして置いた。(9)片端。(10)一冊、近藤清春畫作。享保年間刊(井筒屋板)。

【解説】

文福茶釜或は分福茶釜と書かれてゐる。後者の方が正しいであらう。上州館林青龍山茂林寺に傳はる口碑で、怪談味を帯びた仙僧傳説であるが、現在では前掲の原話から更に進展して、屑屋に賣られた化釜の狸が見世物興行に出場する滑稽な童話として行はれてゐる。茶釜の湯が盡きないのは一種の如意寶モチーフで、同時に怪狸のマジックである。江戸時代初期の赤本に「ぶんぶくちやがま」黒本に「分福功藥罐平」「とんだ茶釜」等の作があるから、この童話の流布は先づ徳川初世であらう。「附」に掲げた赤本の内容は面白い形になつてゐるが、決して原話そのまゝとは看られ難く、又別に傳はつてゐた異傳でもあるまいと思はれる。而もそれを通して却つて原話の既に廣く流布してゐたことを十分想像し得る。又ぶんぶくを湯の沸く音から來た名稱とする説（本朝俗諺志はこの説を採つてゐると推し得られる）があるが、恐らく附會の説であらう。但しその方が童話味はある。

本童話に取材したものに、坪内逍遙博士の兒童劇「文福茶釜」がある。

粘

桶

或山寺に慳貪なる房主ありて、粘桶ねりかじ一つ持ちて、一人ある小兒こごに些少せうせうも食はせずして、「これは人の食へば死ぬ物ぞ」とて、唯一人食ひては、良く置き／＼しけるを、この兒、如何してこれを食はましと思ひて、房主他行の暇に、棚に高く置きたるを取るほどに、髪にも小袖にも打零こぼして附けたりけり。日比欲し／＼と思ひけるまゝに、能く／＼二三杯食ひて、房主の秘藏ひかくの水瓶すいへいを、雨滴あまたりの石に落して打破りて、房主の歸りたる時、しく／＼と泣く。「何事ぞ、怪しからずの泣きやうや」と云へば、「あさましき事の候。御水瓶みすいへいを過あやちに打破りて候時に、如何なる御勘當もやと思ひ候ひて、命生きても由無く覺えて、人の食へば死ぬと仰せられ候物を、一杯食へ候へども、死なれ候はず。二三杯食へつれども、死なれ候はず。髪にも小袖にも附けて、死なんとし候へども、すべて死なれ候はず」と云ひける。慳貪なるは勝る損なり。少し食はせたらば、水瓶は破られじかし。兒の心が賢かりけり。學問の器量も無下むげにはあ

粘

桶

らし。

註 (1) 飴を容れた桶。(2) 藏ひ置く。

(沙石集卷第七下、慳貪者事)

【解説】

日本童話に普通に見る和尚と小僧型の一例で、狡童の凱歌即ち智力の勝利を説くもの。小動物が大動物を服すると同型(童話篇、因幡の白兔参照)。前文では慳貪の戒めとしてのみ説かれ、小童が却つて推賛せられてあるのが注目される。この童話を作品化したものは狂言附子で、和尚は大名、兒は太郎冠者・次郎冠者、粘は黒砂糖となつてをり、是を附子と云ふ毒と稱して大名が藏して置く事にしてある。

太馬「さて蓋を開けたぞ。身共はあの附子を見て來う」次郎「一段とよからう」太馬「やい／＼見
て來たわ」次郎「如何様な物ぢや」太馬「何ぢやは知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。旨
さうな物ぢや程に、身共は食うて見よう」次郎「やくたいたいもない事を。おけ」太馬「身共は附子
に領じられたか、食ひ度うてならぬ。行て食うて來う」

(狂言、附子)

傳
說
篇
(上)

英
雄
譚

猿神退治

今ハ昔、美作國ニ中參高野ト申ス神在シマス。ソノ神ノ體ハ、中參ハ猿、高野ハ蛇ニテゾ在シマシケル。毎レ年ニ一度ソレヲ祭りケルニ、生贄ヲゾ備ヘケル。ソノ生贄ニハ國人ノ娘ノ未ダ不レ嫁ヲゾ立テケル。コレハ昔ヨリ近ク成ルマデ不レ怠シテ久シク成リニケリ。

而ル間、ソノ國ニ何人ナラネドモ、年十六七許ナル娘ノ形清氣ナル持チタル人有リケリ。父母コレヲ愛シテ、身ニ替ヘテ愛シク思ヒケルニ、コノ娘ノカノ生贄ニ被レ差ニケリ。コレハ今年ノ祭ノ日被レ差ヌレバ、ソノ日ヨリ一年ノ間ニ養ヒ肥シテゾ次ノ年ノ祭ニハ立テケル。コノ娘被レ差テ後、父母尤レ限ク歎キ悲シビケレドモ、可レ遁キ様无キ事ナレバ、月日ノ過グルニ隨ヒテ命ノ促ルヲ、祖子(1)ノ相見ム事ノ残り少ク成行ケバ、日ヲ計ヘテ互ニ泣悲シムヨリ外ノ事无シ。

然ル間、東ノ方ヨリ事ノ縁有リテソノ國ニ來レル人有リケリ。コノ人犬山(2)ト云フ事ヲシテ數多ノ犬ヲ飼ヒテ山ニ入りテ、猪鹿ヲ犬ニ令ニ噉(3)テ取ル事ヲ業トシケル人也。亦心極メテ猛

キ者ノ物恐デ不爲ニテゾ有リケル。ソノ人ソノ國ニ暫ク有リケル間、自然コノ事ヲ聞キテケリ。而ルニ可云事有リテコノ生贄ノ祖ノ家ニ行キテ云ヒ入ル、程ニ、延有ルニ突居テ、葺ノ迫ヨリ臨キケレバ、コノ生贄ノ女糸清氣ニテ、色モ白ク形モ愛敬付キテ、髮長クテ田舎人ノ娘トモ不レ見。品々シクテ(5)寄り臥シタリ。物思ヒタル氣色ニテ、髮ヲ振り懸ケテ泣キ臥シタルヲ見テ、コノ東人哀レニ思ヒ、糸惜シク思フ事无限シ。既ニ祖ニ會ヒヌレバ、物語ナド爲。祖ノ云ハク、「只一人侍ル娘ヲ、然々ノ事ニ被差テ歎キ暮シ思ヒ明シテ、月日ノ過グルニ隨ヒテ、別レ畢ナムズル事ノ近キ侍ルヲ悲シビ侍ル也。此カル國モ侍リケリ。前ノ世ニ何ナル罪ヲ造リテ、此カル所ニ生レテ、此ク奇異シキ目ヲ見侍ルラム」ト。東ノ人コレヲ聞キテ云ハク、「世ニ有ル人、命ニ増ル物无シ。亦人ノ財ニ爲ル物、子ニ増ル物无シ。ソレニ只一人持チ給ヘラム娘ヲ、目ノ前ニテ膽ニ造ラセテ見給ハムモ糸心疎シ。只死ニ給ヒネ。敵有ル者ニ行キ烈レテ、徒死爲ル者ハ无クヤハ有ル。佛神モ命ノ爲ニコソ怖シケレ。子ノ爲ニコソ身モ惜シケレ。亦ソノ君ハ今ハ无キ人也。同ジ死ヲ、ソノ君我ニ得サセ給ヒテヨ。我ソノ替リニ死ニ侍リナム。ソレハ己ニ給フトモ苦シトナ思ヒ給ヒソ」ト。祖コレヲ聞キテ、然テハソレハ何ニシ給ハムト爲ルゾト問ヘバ、東ノ人「只可爲様ノ有ル也。コノ殿ニ有リトテ人ニ不レ宣シテ、只精進ストテ注連ヲ

引キテ置キ給フベシ」ト云ヘバ、祖ノ云ハク、「娘ダニ不レ死バ我ハ亡ビムニ不レ苦」ト云ヒテ、コノ東ノ人ニ忍ビテ娘ヲ合セ、東ノ人コレヲ妻トシテ過グル程ニ、難去ク思ヒケレバ、年來飼ヒ付ケタリケル犬山ノ犬ヲ二ツ撰リ勝リテ、汝ヨ我ニ代レ」ト云ヒ聞カセテ、勲ニ飼ヒケルニ、山ヨリ密ニ猿ヲ乍生捕ヘ持チ來テ、人モ无キ所ニテ役(6)ト犬ニ教ヘテ噉セ習ハス。本ヨリ犬ト猿トハ中不吉者ヲ、然カ教ヘテ習ハスレバ、猿ダニ見レバ數懸ケテ噉ス。コノ様ニ習ハシ立テ、我ハ刀ヲ微妙ク磨ギテ持チタリ。東ノ人妻ニ云ハク、「我ハソノ御代リニ死ニ侍リナムトス。死ハ然ル事ニテ、別レ申シナムズルガ悲シキ也」ト。女不心得トモ哀レニ思フ事无限シ。

既ニソノ日ニ成リヌレバ、宮司ヨリ始メテ、多クノ人來テコレヲ迎フ。新シキ長櫃ヲ持チ來リテ、コ、ニ入レヨ」ト云ヒテ、長櫃ヲ寢屋ニ指シ入レタレバ、男狩衣・袴許リヲ着テ、刀ヲ身ニ引キ副ヘテ長櫃ニ入りヌ。コノ犬二ツヲバ左右ノ高ニ入レ臥セツ。祖共女ヲ入レタル様ニ思ハセテ取り出デタレバ、鉾・神・鈴・鏡ヲ持テル者雲ノ如クシテ、前ヲ追噓リテ行キヌ。妻ハ如何ナル事カ出來タラムズラムト怖シキニ、男ノ我ニ替リヌルヲ哀レニ思フ。祖後ノ亡ビムモ不レ苦、同ジ无ク成ラムヲ此テ止メナムト思ヒ居タリ。

生贄御社ニ將參リテ、祝申シテ(8)瑞籬ノ戸ヲ開キテ、コノ長櫃結ヒタル緒ヲ切りテ指シ入レテ去ヌ、瑞籬ノ戸ヲ閉ヂテ、宮司等外ニ着キ並ビテ居タリ。男長櫃ヲ塵許リ劈開ケテ見レバ、長七、尺許リナル猿横座(9)ニ有リ。齒ハ白クシテ顔ト尻トハ赤シ。次々ノ左右ニ猿百許リ居並ビテ、面ヲ赤ク成シテ眉ヲ上ゲテ叫ビ噉ル。前ニ俎ニ大キナル刀置キタリ。酢鹽・酒鹽ナド皆居エタリ。人ノ鹿(10)ナドヲ下シテ食ハムズル様也。暫許リ有リテ、横座ノ大猿立チテ長櫃ヲ開ク。他ノ猿共皆立チテ共ニコレヲ開クル程ニ、男俄ニ出デテ犬ニ、「噉へ、ヲレ」ト云ヘバ、二ツノ犬走り出デテ、大キナル猿ヲ噉ヒテ打チ臥セツ。男ハ凍ノ如クナル刀ヲ拔キテ、一ツノ猿ヲ捕ヘテ俎ノ上ニ引キ臥セテ、頭ニ刀ヲ差シ宛テ、「汝ガ人ヲ噉シテ肉村ヲ食フハカク爲ル。シヤ頸切りテ犬ニ飼ヒテム」ト云ヘバ、猿顔ヲ赤メテ目ヲシバ扣キテ、齒ヲ白ク食ヒ出シテ、涙ヲ垂レテ手ヲ摺レドモ、耳ニモ不聞入シテ、「汝ガ多クノ年來、多クノ人ノ子ヲ噉ヘルガ替リニ、今日噉シテム。只今ニコソ有メレ。神ナラバ我ヲ噉セ」ト云ヒテ、頭ニ刀ヲ宛テタレバ、コノ二ツノ犬多クノ猿ヲ噉噉シツ。適ニ生キヌルハ、木ニ登リ山ニ隠レテ、多クノ猿ヲ呼び集メテ、山響ク許リ呼バヒ叫ビ合ヘレドモ更ニ益無シ。

而ル間、一人ノ宮司ニ神託キテ宣ハク、「我レ今日ヨリ後永クコノ生贄ヲ不得。物ノ命ヲ不_レ煞サ。亦コノ男我ヲカク接ジツ(11)トテ、ソノ男ヲ錯リ犯ス事无カレ。亦生贄ノ女ヨリ始メテ、ソノ父母類親ヲモ不_レ可_レ接。只我ヲ助ケヨ」ト云ヘバ、宮司達皆社ノ内ニ入りテ、男ニ御神カク被_レ仰ル。免シ被_レ申ヨ」ト、「忝シ」ト云ヘバ、男不_レ免シテ、「我ハ命不_レ惜ズ。多クノ人ノ替リニコレヲ煞シテム。然シテ共ニ无ク成ラム」ト云ヒテ不_レ免ルヲ、祝申シ、極ジテ(12)誓言立ツレバ、男「吉々シ。今ヨリハカ、ル態ナセソ」ト云ヒテ免シ奉レバ、逃ゲテ山ニ入りヌ。男ハ家ニ返リテ、ソノ女ト永ク夫妻トシテ有リケリ。父母ハ聲ヲ喜ブ事无限シ。亦ソノ家ニ露恐ル、事无カリケリ。ソレモ前生ノ果ノ報ニコソハ有リケメ。ソノ後ソノ生贄立ツル事无クシテ、國平カ也ケリトナム語り傳ヘタルトヤ。

(今昔物語卷第二十六、本朝付宿報、美作國神依三獵師謀一止ニ生贄二語 第七)

註 (1)親子。(2)犬を使つて山野に狩すること。(3)縁。(4)日除け、又は風雨を防ぐ爲の横戸。(5)上品な様子で。(6)専一の務め。(7)数多くの意か。或は攻懸の誤か。(8)禍災を除くことを神に祈る。祝詞をあげて祭る。(9)正座。(10)肉。(11)はづかしめた。(12)いみじく。一生懸命に。

【解説】

宇治拾遺物語(卷十)にも載せてある。今昔物語(卷二十六)には今一つ同種の傳説(飛彈國猿神止生贄一語)を収めてある。民間信仰とその習俗とを示す面白い口碑である。搜神記・幽怪録等に見える支那説話の影響もあるかもしれぬが、その影響の有無に關せず、説話の本質と形式から云へば、大蛇退治神話(神話篇、肥河上参照)の變形、少くとも同神話型の遊離説話である。邪神退治といふ點で、同じく同神話の變形した鬼神退治説話(次項参照)と同性質のものであるが、これは漠然たる邪神退治ではなくて、完全に大蛇退治型の條件に適ひ、一層同神話に近いものである。即ち生贄モーターティフを含む事も、生贄の處女と退治者との結婚する事も具備してゐる。要するに、次項のやうに明白な史上英雄の怪物乃至鬼神退治ではないが、民間傳説中で立派に英雄譚の形を取つた特殊なもので、國民傳説に准すべきものである。

この種の傳説は美作・飛彈二國に限らず、口碑として紀伊・丹波・遠江・肥後等を初め諸國に分布し、特に助勢者たる犬が猿神を斃して自身も絶命し、義犬塚に祀られるのを常型としてゐる。その最も代表的なものは信濃の義犬早太郎(兵坊太郎)の傳説である。御伽草子の藤袋草子に語られてゐるのは、近江の猿神退治で、退治者は狩人と犬、娘が猿の爲に藤袋に入れられ

て、梢に吊されてゐたのを、代りに犬を入れておくことになつてゐる。但し普通の生贄モーターティフでなく、翁の戯言から娘を猿に捧げねばならなくなつた舌禍モーターティフに起因するのと、この説話が結局清水觀音の利生談に歸せしめられてゐる點とは、山城國の蟹滿寺縁起(今昔物語卷十六第十六話・法華驗記卷下・三寶繪詞卷中・古今著聞集卷二十等。日本靈異記卷中第八話及び第十二話も同一話の異傳)と類話をなしてゐる。又同種の生贄説話で斯くの如き英雄譚の形を取らず、法力・孝徳に依つて犠牲の難を免れる形式の系統もある。なほ、近世ではこの説話型は小説中の構想として用ゐられる他、武者修行談の一節として屢々含まれてゐる。

老叟おはぢも姥も如何にして彼の姫取下さんと、足摺をして悶えける程に、觀音の御計ひかや、狩人數多來たり。老叟見るよりも歡びて、馬に乗りたる人の前に畏つて、姫が事を始めより有のまゝに語りければ、情有る人にて、如何せんとて皆々談合しける。「高き梢なれば、登る事叶はじ」と言ひければ、供に侍る平次と云ふ人弓の上手なり、「吊り繩を急ぎ射切れ」と仰せければ、「若し射外すものならば、姫にや當るべし」とて固く辭退しけれども、老叟申すやう、「とても猿の心に隨はず、後には喰殺しもすべし。只今射させ給へ」と頻りに言ひける故、又人々も重ねて仰せければ、力なく領掌して、平次も此處を先と思ひければ、心中に祈念をぞ致しける。那須の與一の扇の心も斯くやとぞ覺えける。皆々祈念して見居たる藤袋を、誤たず雁股かりまたにて射切りけり。老叟も姥も喜ぶ事限りなし。(藤袋草子)

鈴鹿御前——鬼神退治(一)

二二二

斯かりける所に、歳二年ありて、伊勢國の鈴鹿山に大だけ丸とて鬼神出で來、行き交ふ人を惱まし、貢物も絶えくくなり。御門この山聞召し、俊宗に仰付け、急ぎ亡すべしとの宣旨なり。將軍畏まつて宣旨承り、軍兵を召寄せ、三萬餘騎にて打立ち、鈴鹿の山へ押寄する。大だけ丸は飛行自在の者なれば、この由を聞きて、峯の黒雲に立紛れ、火の雨を降らせ、雷電暇も無く、風凄じく吹きて、攻め寄るべきやうも無くして年月を送り給ふ。

又この山陰に天女天降りて在します。名をば鈴鹿御前と申しける。大だけ丸鈴鹿御前に心を惱まし、或時は美しき童子となり、又或時は公卿殿上人に變じて、様々の謀を廻らし、一夜の契りを籠めばやと、心を碎き憧憬れけれども、鈴鹿通力にして知り給ふ故、更に靡き給はず。斯くて俊宗は、如何にもして敵の在所を慥に知りて攻め入り、勝負を決せばやと思ひ、諸天に祈りを懸け給へば、或夜の曉夢ともなく現ともなく老人來り給ひて、「この山の鬼を従へんと思は

ば、この邊に鈴鹿御前とて天女の在しますを頼むべし。この謀ならでは大だけ丸を討つ事成り難し」と教へて立去り給ふと御覽じて、夢は醒めたりけり。

俊宗有難く思召し、先づ三萬餘騎の兵をば都へ歸し給ひて、唯一人鈴鹿山に立忍ばせ給ふが、夕暮の月ほのかにさし映り、草葉の露も置き惑ひ、蟲の聲々哀れを添へ、舊の秋を思ひ出し、草の枕にうち傾き給ふに、年の程二八許りなる女、玉の簪に金銀の瓔珞懸け、唐錦の水干に紅の袴踏みしだきて、忽然と來り給ふ。俊宗是は彼の鬼の謀りて、我が心を引き見るにこそと思ひ、劍を膝の下に隠し、さらぬ體にて見給へば、

目に見えぬ鬼の住處を知るべくは我が在る方に暫し留まれ

と打詠めて搔消す如く失せにけり。俊宗「こは有難き御告ぞ」と思ひ、太神宮を初め奉り、神々を伏拜み給ふ。されどもその行方を知らず、されば尋ねべき方も無くて、只呆然として大だけ丸が事はうち忘れ、現に見えつる人の面影身に添ひて、時の間も忘らで戀路の闇に迷ひ給ふが、せめては暫し夢の便りもがなと交睫み、上の空なる物思ひに沈み果てなん事も、只是鬼の計らふらんに、思ひ切らんと、又神々を伏拜み、「願はくはこの惡念を忘れて、鬼神を従へさせ賜ひ給へ。諸天諸神の中にも、大慈大悲の御誓ひこそ有難けれ」と、肝膽を碎き祈りて心を澄し給へ

ども、猶忘れもやらぬ面影の立ち添ひて、露の命も頼み少なき有様にて、斯く口ずさび給ふ。

垣間見し面影こそは忘れぬ目に見ぬ鬼はさもあらばあれ

と打詠めて、唯呆然として居給ふに、有りし人の來り、「疾く〜我が方へ御入候べし」と語らひ行き、比翼の契り淺からず、來るともなく月日を送りけるが、或夜の睦言に、「我はこの山に假に來りて三年なり。御身この山の鬼神を従へ給はむとて來り給ふとも叶ひ難し。我力を添へ奉らん爲に、假にこの界に降るなり。彼の大だけ丸我に契りを籠めんとて、様々言ひ寄るなり。我謀にてた易く討たせ申すべし。御心安く思ひ只管に頼み給へ。さらば我が跡を慕ひ給へ」とありしかば、山々峯々を辿り越えて見給へば、大きな岩穴あり。見給へば、滿々たる霞の中に黄金の臺あり、金銀瑠璃の砂を敷き、鐵の門を過ぎ行けば、白金の門あり。猶し過ぎ行けば金銀の反橋を懸けたり。眞に極樂世界と云ふとも是にはいかで勝るべき。庭に四季の體を現し、先づ東は春の景色にて、出づる日の影も長閑なり。谷の戸開くる鶯の、聲も高嶺の雪解けて、垣根の梅のかつ散れば、櫻は遅しと咲き續く。岸の山吹色深く、藤波寄する松が枝の、緑の空に立ち續き、南面は夏の夜の、明方近き郭公、啼き行く山は繁り合ひ、岩角削る瀧津瀬に、波も涼しき夕暮に、飛び交ふ螢幽かにて、蛩の戸叩く水鶏鳥も、曙や猶惜しむらむ。扱又

西は秋風の、末葉の露の散る蔭に、所々の叢紅葉の色、野邊の虫の聲知らるゝ蓬生の、露に亂るゝ糸萩の、花紫の藤袴、桔梗・刈萱・女郎花、今を盛りと見えたりけり。北は冬の景色にて尾上の松の梢までも、降り埋みたる雪の日に、炭焼く煙灰かにて、池の氷の片寄るに、番はぬ鶯の立騒ぐ、羽風も寒き曉は、獨り寝る身や憂かるらん。又辰巳の方を見れば、色とり〜の鳥の羽にて葺き分けたる館百許り並びたり。その内を見れば、玉の床に錦の褥を敷き、七寶の格子の内には、玉の簪懸けたる女許多並み居て、琵琶・琴調べ、或は碁・雙六に心を寄せたるもあり。それより奥を見るに、大だけ丸が住みける所と思しくて、黄金の扉に白金の柱にて一段高く作り、氷の如くなる劍・矛をば隙間も無く立て並べ、鐵の弓・胡篋は數を知らず。俊宗思召しけるは、「只今好き折節なり、鎬矢一つ射ばや」と思召しけるが、先づ鈴鹿御前に問ひ給へば、「暫時待ち給ふべし。只今事の出で來るならば、眷屬共に取込められ、御命有るまじ。それを如何にと申すに、この鬼は大とうれん・小とうれん・けんみやうれんとて三つの劍あり。この劍どもを帶する内には、日本が寄せて攻むるとも、討たるゝ事は有るまじ。大だけ丸我に契りを籠めんと度々言ひ語らへども、遂に靡く事無し。定めて又今宵も訪れ來るべし。さらば招じ入れ、睦まじげに待遇し、三つの劍を預りて取るべし。その後來らん時、易々と討ち給へ。

先づ只今は歸り給ふべし」とて、打連立ち歸り給ふ。

案の如く日暮れければ、大だけ丸美しき童子となり、鈴鹿の御枕に立寄りて、

岩ならず枕なりとも朽ちやせん夜々の涙の露の積れば

と詠み、袂を顔に押當てて泣きける。鈴鹿御前は豫て企みし事なれば、返し

朽ち果てん枕は誰れに劣らめや人こそ知らね絶えぬ涙を

と詠み給へば、大だけ丸是を聞き、「こは如何に。千束に文の重なる迄、一度の御返事だに無かりつるに、只今の人の言葉の嬉しさよ。誠なるかな、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。我れ歌の道を知らずしては、いかでこの君と契りなむ、天晴れ歌詠みかな」と、そゞろに我が身を讃めたりける。

扱鈴鹿御前の側近く寄臥し、「この程盡せし心の程を憐み給ふにや、只今の言の葉こそ有難けれ」と涙を流しければ、鈴鹿御前、「我も岩木ならねば、如何ばかり思ひつるぞや。構へて見捨て給ふべからず」と、うち解け顔に仰せければ、大だけ丸も何か心を残すべき、越し方行末の事ども言ひ語らひけるが、曙告ぐる鳥の聲、起き別れ行くきぬくの、袖を控へ仰せられけるは、「斯様な事申すにつけて、痴がましき事ながら、この程俊宗とやらん云ふ者、我に文を通

はしけれども、手にも取らず、御身に斯く馴れぬると聞くならば、如何なる憂き目にも逢はずべき。心細く思ふなり。御身の劍を我に預け給へかし」と仰せければ、「誠にさる事、その俊宗と云ふ小冠者奴は、由ある曲者にて、我等をも狙ふと聞え候。さり乍ら、この劍どもの有らん程は、御心安く思召して御枕に立て給へ」とて、大とうれん・小とうれん二つの劍を抜き出して、「抑もこの劍と申すは、天竺摩訶陀國にて阿修羅王、日本の佛法盛んなり。急ぎ魔道に引入れよ」との御使に、某眷屬共を具して参る時、三つの劍を賜はる事、後代迄の面目なれば、身を離す事なし。然るを一夜の情に絆されて、鈴鹿御前に参らせ候。御枕上に立て給へ」とて、未だ夜を籠めて立迷ふ黒雲にうち乗りて、鬼の住處に歸りける。

斯くて俊宗はこの由を聞召し、「唯是佛神の御計らひなり」とて、いよ／＼觀念し給ふ。斯くて夜も明けければ、「急ぎ御用意あるべし」とて、先づ二つの劍を参らす。「一つのけんみやうれんと云ふ劍は、大だけ丸が伯父に三面鬼と申す鬼が預りしが、この程天竺へ参り候ぞや。又今夜は鬼共に酒を勧めて飲ませよと、瓶子を送りて候間、皆眷屬共は酔ひ臥し候べし。御心安く思召して討ち給へ」とて、鈴鹿は雲に乗りて立隠れ給ふ。

さる程に大だけ丸、是をば夢にも知らずして、日の暮るゝを待ち兼ねて來り、「御前は何處に

在すぞ」とて、簾中指して入りければ、俊宗立向ひ給ひて、「鈴鹿御前と申すは何者ぞ。定めて大だけ丸と云ふ曲者か。汝知らずや、我は是日本の御門に仕へ奉る田村大將軍俊宗とは我が事なり。十七にて大和の國奈良坂山に金飛礫のりやうせんと云ふ化生の者を従へ、大將軍司を賜はり、御門を守護し申す事、異國迄もその隠れなし。それに何ぞ、目の前にて大悪を爲す事、誰が許しけるぞ」と宣へば、大だけ丸は今迄美しき童子なりしが、見る／＼文十丈許りなる鬼神となり、日月の如くなる眼を見出し、俊宗を睨みけるが、天地を響かし大音上げて、「汝は粟散國の御門の臣下として、何程の事の有るべきぞ。手並の程を見せん」とて、氷の如くなる劍矛を三百許り投げ懸くる。されども俊宗の味方には、千手觀音と鞍馬の大悲多聞天兩脇に立ち給ひて、將軍の上に落ちかゝる矛を拂ひ給ふ。鬼神は怒をなし、數千騎に身を變じ、大山の動く如し。されども田村騒ぎ給はず、神通の鎗矢射給へば、千萬の矢先となり、鬼神の頭に落ちかゝれば、或は打たれ、痛手を負ひ、四方へ散り／＼になりけり。されども大だけ丸は微塵となり、磐石と變化、暫らく打たれざれば、俊宗劍を投げ給へば、首は忽ち討ち落され、雲霞の如く見えたる眷屬も、皆消え／＼となりけり。その後鬼の首どもを牛車に積み、都に上せ給ふ。御門叡覽ましく／＼て、伊賀の國を賜はり、いよく榮え給ふ。(中略)



傳坂上田村磨所用壺鐙 (鞍馬寺藏)

或時鈴鹿仰せけるは、「一歳大だけ丸がけんみやうれんの劍を取落しし故に、魂魄残りて天竺へ歸り、又日本へ渡り陸奥國に霧山ヶ嶽に立て籠りて、世の妨げを爲すべきとの瑞相有り。急ぎ都に上り、良き馬を求め給へ」と仰せければ、聽て上洛して馬を尋ね給ふ所に、五條の傍らに住み荒したる館に立寄り見れば、二百歳にも及びたる翁、厩の前に眠り居たり。又世の常の野馬五つ許り一つにしたる程の馬を、金鎖にて八方へ繋ぎたるが、百日にも秣呉れたりとも見えず、引立つるとも一足も行くべきとも見えず。俊宗「この馬賣るべきか」と仰せければ、翁嘲笑ひ、「何の用にこの馬買ひ給ふべき。欲しくば價は入るべからず、引かせ給へ」と云ふ。俊宗嬉しく思召し、「明日引かせ申さん」とて歸り給ひて、かの翁に百石百貫に色よき小袖を添へて下し賜ふ。翁大きに喜びけるなり。扱その馬を飼ひ給ふに、世の中に雙び無き名馬にて、俊宗乗り給へば、山を驅けり海を渡るも、同じ平地の如し。不思議に

思召し、鈴鹿へ行かんと思ひ、乗り出し給へば、刹那が間に着き給ふ。鈴鹿御前は御覽じて、「天晴御馬候。是に召されて陸奥國霧山ヶ嶽を御覽じ置かれ候へ。大だけ丸が來り候とも、駒の足立ちを知らせ給はば、唯一合戦の勝負ぞ」と仰せられければ、聽てこの駒に打乗りて、東を指して打ち給ふに、片時の間に霧山邊りを驅け廻り、元の所に歸り給ふ。

斯くて月日を過し給へば、案の如く大だけ丸が魂魄元の如くになりて、霧山ヶ峯に居て、人を取る事限り無し。この由奏聞申しければ、二十萬騎の軍兵を田村將軍に附け給ひて、急ぎうつ立つべしとの宣旨なり。俊宗畏まつて承り、この由鈴鹿に語り給へば、「人數は然様に入るべからず。唯御手勢許り連れ給ふべし」とて、皆人々を歸し給ひて、五百餘騎の勢許り召連れ給ふ。都より霧山迄は三十五日の道なるを、軍兵共をば先に立て、俊宗は鈴鹿御前と酒宴管絃様々の御遊びにて、七月の末より八月半迄、夜と共の御遊び様々なりしが、都を出でて三十四日と申すに鈴鹿を出づる。御前は飛行の車に召す。俊宗はかの駒に打乗り、片時の間に霧山の麓に着き給ふに、軍兵共は未だ二時許り後に着きける。

さる程に鬼神は山を掘り抜き、口には大盤石を扉として、攻め入るべきやうは無し。されども田村は豫て案内は知るなり、搦手に廻り攻め入りて見給へば、大だけ丸は無かりけり。門守

の鬼一人出で、「何者なれば我に案内も云はで通るらん。物見せん」とて、鐵の棒にて打たんとすれば、俊宗扇にて打落し、「憎き者の振舞かな」とて先づ縛めて引出す。扱「大だけ丸は何處に在るぞ」と問ひ給へば、「八大王と申すは我等が主なり。蝦夷ヶ島に在します。御見舞の爲に昨日御越し候程に、聽て歸り給はん」と申せば、俄に空曇り雷鳴して、黒雲一叢の中より鬼の聲荒まじくして、「あら珍らしや田村殿、久しき程の見參なり。一歳伊勢の鈴鹿山にて、御身は某を討止めたりと思ふらん。我はその頃天竺に用有りて、魂一つ残し置きて歸るなり。それを我が本體と思ふらん。人間の智慧のあましまさよ」と笑ひければ、田村聞き給ひて、「それはさる事も有るべし。汝が劍は如何に」と仰せければ、「是こそけんみやうれんよ」とて差し上ぐる。俊宗御覽じて、「嬉し〜、二つの劍は賜りて日本の寶と爲し、今一つの劍を取残し、心に懸り思ひしに、是迄の持參何より満足なり」と宣へば、大だけ丸腹を立て、「あの童に物な言はせそ。三面鬼は無きか」と云へば、面の三つ有る赤き鬼躍り出でて、大石を雨の降る程打ちけれども、一つも當らず。その時俊宗例の大弓に鎬矢番ひ、暫し固めて放ち給へば、三面鬼が眞向射碎かれ、朝の露と消えにけり。大だけ丸腹を据ゑかね、手取りにせんと、半町許り一飛に飛んで懸るを、飛び違へて切り給へば、首は前に落ちけるが、その儘天へ舞上る。鈴鹿御前は

御覽じて、「この首只今落ち懸るべし、用心あれ」とて鐵兜を重ねて着給ふに、二時ばかり有りて鳴り渡り、田村の兜の天邊に喰ひ付く。俊宗兜を脱ぎ御覽するに、その儘首は死にける。残りの眷屬共には繩を懸け引上り、皆斬つて獄門に懸けられける。又大だけ丸が首をば、末代の傳へにとて、内裏の寶藏に納め、千本の大頭だいがしらと申して、今の世迄も御輿みこしの先に渡るはこの大だけ丸が頭なり。(下略)

(田村の草子(s)下卷)

註 (1)俊仁將軍の一子。陸奥國はつせの郡田村郷に誕生す。初の名ふせり殿、後、田村丸と改む。元服

していなせの五郎坂上の俊宗と名告る。(2)目に見えぬ……歌なり。(古今集和序)(3)信心を凝らす。

(4)此の事は上卷に見える。(5)佛語。粟粒を散布したやうな小國。日本を卑しんで云つた語。(6)あれを見よ不思議やな、味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の光を放つて虚空に飛行し、千の御手毎に大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨霰と降りかゝつて、鬼神の上に亂れ落つれば、悉く矢先にかゝつて、鬼神は残らず討たれにけり。(謠曲田村)(7)おほがしら。おにがしら。竿の先に黒色の筋を束ね垂れて飾とした旗。(8)上下二卷、作者未詳の室町時代小説。

【解説】

鬼神退治は前項の猿神退治と同じく大蛇退治神話(神話篇・肥河上参照)の傳説時代に於ける變形で、それに史上英雄の賊魁捕獲の武功談が合體して形成せられるを常とする(武人の代りに高僧傳と結合する事も往々ある)。従つて大蛇退治型の典型からは崩れた形相のものが多く、共通した特定の型では律せられない。退治の手段は武力が主であるが、神助・劍威・法力等の力が加はる場合が多い。

鈴鹿御前傳説は坂上田村麿の鈴鹿山鬼神退治で、謠曲田村の題材として知られてゐる。田村の草子の説話では、神婚説話と結合したサムソン型(Samson type) 敵妻の手引に依つて目的を達する型)の變種、即ちあきみち型(近古の小説あきみち物語の内容をなす説話)である(鈴鹿の草子は大略同じであるが、又稍違つた形になつてゐる)。又寶劍説話をも含み、全體としては神佛の冥助に依る靈驗として語られてゐる。故に一面清水寺縁起傳説(田村の草子・謠曲田村)でもある。鬼神の首が俊宗の兜に喰ひ付くのは大江山傳説の影響であらう(次項参照)。御輿の大頭の來由説明まで附加せられてゐるのは面白い。

鈴鹿山の盜賊の事は今昔物語(卷二十九、於鈴香山一蜂螫三盜人一語)にも見えるが、鈴鹿御前を一名、立烏帽子と云ふ名の怪女とした同じ傳説は御伽草子立烏帽子にも作られ、又本傳説に

取材した謡曲は他に鈴鹿・清時田村・阿黒王がある。

田村の草子では俊仁・俊宗父子の事蹟を述べ、俊宗の怪物退治の他の武功をも傳へてゐる。俊仁は藤原利仁で田村鷹と父子ではない。俊宗の名も史實の根據は無い。但し田村・利仁が將軍として奥羽の賊主惡路王を征した史實は東鑑(卷九、文治五年十月二十八日)にも記されてある。

或時立烏帽子、「阿黒王を射よ」といふ告げあり。されば彼の鈴鹿の御前に仁對玉といふ寶を持てり。彼の珠は此處にて思ふ事を言ひ含めれば、彼處に行きて、有のまゝに言ひ聞かする明珠なり。彼の玉に云々言ひ含めて田村が方へ投げければ、飛び行きて述べて曰く、「明日の曙に阿黒王こそ鳥の面に出で、湖水を眺むべき由也。よく狙ひ寄せて射殺せ」と言へり。その音僅に小蟲の鳴くに似たり。田村嬉しく有難く思ひて、三度禮拜してこの玉を戴き給ふ。それより人に忍びやかなる事を玉章と言ひ習はしたりとぞ。

(立烏帽子)

酒 顛 童 子 〓 鬼神退治 (二)

昔我が朝の事なるに、天地開けし以來は神國と云ひながら、又佛法盛にて、人皇の始めより延喜の帝(一)に至るまで、王法共に備はり、政事直にして、民をも憐れみ給ふ事、堯舜の御代とて、これにはいかで勝るべき。然れども世の中に不思議の事の出で來たり。丹波の國大江山には鬼神の棲みて、日暮るれば近國他國の者迄も、數を知らず奪りて行く。都の中にて奪る人は、眉目よき女房の十七八を頭として、これをも數多奪りて行く。何れも哀れは劣らねども、こゝに哀れを留めしは、院に宮づき奉る池田の中納言にたかとして、御覺えめでたくし、寶は内に満ちくゝて、富貴の家にて坐すが、一人姫を持ち給ふ。三十二相の形を受け、美人の姫君を見聞く人、心を懸けぬ者は無し。二人の親の御寵愛斜ならず。斯程に優しき姫君を、或日の暮方の事なるに、行方知らず失せ給ふ。父くにたかを初めとし、北の御方の御歎き、お乳や乳母や女房達、その外有り合ふ者迄も上を下へと返しけり。中納言は餘りの事の悲しさに、左近を召さ

れ、如何に左近、承れ。この程都に隠れ無き、村岡のまさときとて、名譽の博士有りと聞く。連れて參れ」と仰せけるに、「承る」と申して、連れて御所へぞ參りける。痛はしや、父くにたかも御臺所も、恥も人目も入らばこそ、博士に對面召されつゝ、如何にまさとき承れ。それ人の習ひにて、五人十人有る子さへ、何れ疎かは無き習ひ、自らは唯一人の姫を、昨夕の暮程に、行方知らず見失ふ。今年十三寅の年、生れてよりも以來は、縁より下へ下るゝさへ、お乳や乳母の付添ひて、荒き風をも厭ひしに、迷ひ變化の業ならば、自らをも諸共に、などや連れては行かざりし」と、袂を顔に押當てて、「占ひ給へ、博士」とて、料足萬正博士が前に積ませつゝ、「姫が行方を知るならば、數の實を得さすべし。よくよく占ひ給ふべし」。もとより博士は名人にて、一つの巻物取出し、件の體を見渡し、横手をちやうど打ち、「姫君の御行方は、丹波の國大江山の鬼神が業にて候なり。御命には仔細無し、猶某が方便にて、延命と祈らむ、何の疑ひ有るべきぞ。この占形をよく見るに、觀世音に御祈誓あり、誕生なりしその願、未だ成就せぬ御咎めと見えて有り。觀音へ御參りあり、よきに御祈誓坐さば、姫君左右なく都に歸らせ給はむ」と、見透すやうに占ひて、博士は我が家に歸りけり。

中納言の御臺所聞召し、「これは夢かや現かや」と歎かせ給ふ御有様、何に譬へむ方も無し。

中納言殿は落つる涙の隙よりも、急ぎ内裏へ奏聞有りければ、帝御覽坐して、公卿大臣集りて、色々詮議まぢ／＼なり。その中に關白殿進み出でて、「嵯峨の天皇の御代の時、これに似たりし事有りしに、弘法大師の封じ込め、國土を去つて仔細無し。さりながら今此處に賴光(三)を召されつゝ、鬼神討てよと宣はば、定光・季武・綱・金時(三)・保昌(四)を始めとし、この人々には鬼神も怖ぢ戰慄きて、恐れを爲すと承る。この者共に仰せ付けられ候へかし」。帝實にもと思召し、賴光を召されける。賴光勅を承り、急ぎ參内仕りければ、帝御覽坐して、「如何に賴光承れ。丹波の國大江山には鬼神が住みて仇を爲す。我が國なれば率土の中、何處に鬼神の住むべきぞ。況んやま近き邊にて、人を惱ます謂れ無し、平げよ」との宣旨なり。賴光勅命を承り、天晴大事の宣旨かな。鬼神は變化の物なれば、討手向ふと知るならば、塵や木の葉と身を變じ、我等凡夫の眼にて見つけむ事は難かるべし。さりながら勅をばいかで背くべき。急ぎ我が家に歸りつゝ、人々を召し寄せて、「我等が力に叶ふまじ。佛神に祈りを懸け、神の力を頼むべし」。尤も然るべし」とて、賴光と保昌は八幡に社參有りければ、綱・金時は住吉へ、定光と季武は熊野へ參籠仕り、様々の御立願(六)もとより佛法神國にて、神も納受坐して、何れもあらたに御利生有り、喜びこれに如かじとて、皆々我が家に歸りつゝ、一つ所に集りて、色々詮議まぢ／＼なり。

頼光仰せけるやうは、「この度は人数多にて叶ふまじ。以上六人が山伏に様を變へ、山路に通ふ風情にて、丹波の國鬼が城へ尋ね行き、栖だにも知るならば、如何にも武略を運して、討つべき事は易かるべし。面々笈を拵へて、具足冑を入れ給へ。人々如何に」と有りければ、「承る」と申して、面々笈を拵へける。先づ頼光の笈には、らんでん鎖くさりと申して緋威の御鎧、同じ色の五枚冑に、獅子王とこそ申しける、ちすると申しし劍二尺一寸候ひしを、笈の中にぞ入れ給ふ。保昌は紫威の腹巻に、同じ毛の冑を添へ、岩切と申して二尺有りける小薙刀、二重に金を延べ付けて、三束餘り拵ち切りて、笈の中へぞ入れ給ふ。綱は萌黃の腹巻に同じ毛の冑を添へ、鬼切と云ふ太刀を笈の中へぞ入れ給ふ。定光と季武・金時も思ひくゝの腹巻に同じ毛の冑を添へ、何れも劣らぬ劔を笈の中にぞ入れにける。さゝへと名づけて酒を持ち、火打・附茸・雨紙を笈の上に取り付けて、思ひくゝの打ち刀・兜巾・篠懸・法螺の貝・金剛杖を突き連れて、日本國の神佛に深く祈誓を申しつゝ、都を出でて丹波の國へと急がせ給ふ。この人々の有様、如何なる天魔破句てんまはじのんも恐れを爲すべきと覺えたり。

急がせ給へば程も無く、丹波の國に聞えたる大江山にぞ着き給ふ。柴刈り人に行き逢うて、頼光仰せけるやうは、「如何に山人、この國の千丈嶽は何處ぞや、鬼の岩屋を懇に教へて給べ」

とぞ仰せける。山人この山承り、「この峰を彼方へ越えさせ給ひつゝ、又谷峰の彼方こそ鬼の栖と申して、人間更に行く事無し」と語りけり。頼光聞召し、「さらばこの峰越えや」とて、谷よ峰よと分け上り、とある岩穴見給へば、柴の庵いほりのその中に翁三人有りけるを、頼光この山御覽じて、「如何なる人にて坐すぞ、覺束なし」と仰せける。翁答へて仰せける、「我々は迷ひ變化の物にて無し。一人は津の國のかけの郡の者にて有り。一人は紀の國の音無里の者にて有り。今一人は京近き山城の者にて有り。この山の彼方なる酒吞童子といふ鬼に妻子を奪られ無念さに、その敵をも討たむ爲、この頃此處に來りたり。客僧達を良く見るに、常の人にて坐さず。勅諭を蒙りて、酒吞童子を亡ぼせとの御使と見えて有り。この三人の翁こそ妻子を奪られて候へば、是非先達を申すべし。笈をも下し心解け、疲れを休め給ふべし、客僧達」とぞ申されける。頼光この山聞召し、「仰せの如く我々は、山路に踏み迷ひ草臥れて候へば、さらば疲れを休めむ」と、笈共を下し置き、さゝへの酒を取り出し、三人の人々に、「御酒聞食せ」とて參らせける。翁仰せけるやうは、「如何にもして忍び入らせ給ふべし。かの鬼常に酒を呑む、その名をよそへて酒吞童子と名付けたり。酒を盛り酔ひて臥したる時は、前後も知らず候なり。この三人の翁こそ此處に不思議の酒を持つ、その名を神便鬼毒酒じんべんきどくしゅと云ひ、神の方便鬼の毒酒と讀む文字ぞか

し。この酒鬼が呑むならば、飛行自在の力も失せ、斬るとも突くとも知るまじき。御身達がこの酒を飲めば、却つて薬と成る。扱こそじんべんきどく酒とは、後の世迄も申すべし。尙々奇特を見すべし」とて、星冑を取り出し、「御身は是を着て、鬼神が首を切り給へ。何の仔細も有るまじき」と、件の酒を相添へて、頼光にぞ下されける。六人の人々はこの山を御覽じて、扱は三社の御神のこれ迄現じましますかと、感涙肝に銘じつゝ、忝しともなかくに言葉にも言ひ難し。その時翁は岩屋を立ち出で、「尙々先達申さむ」と、千丈嶽を登りつゝ、暗き岩穴十丈許り潜り出で、細谷川に出で給ひ、翁仰せけるやうは、「この河上を上らせ給ひて御覽ぜよ。十七八なる上蕨の在すべし。精しく逢ひて問ひ給へ。鬼神の討つべきその時は、尙々我等も見繼ぐべし。住吉・八幡・熊野の神これ迄現じ来る」とて、かき消すやうに失せ給ふ。

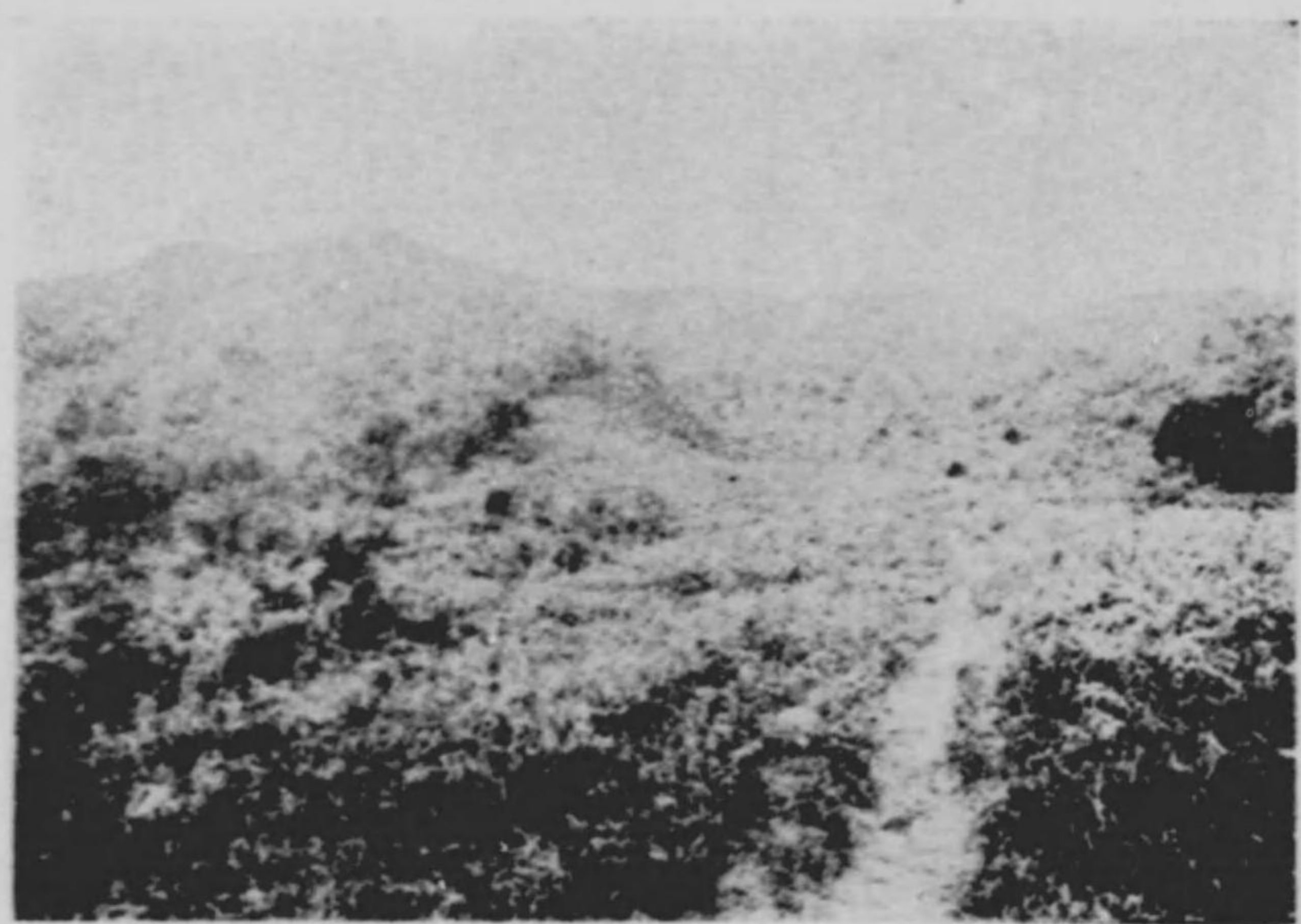
六人の人々はこの山を見給ひて、三社の神の歸らせ給ふ御跡を伏し拜み給ひつゝ、教へに任せて河上を上らせ給ひて見給へば、教への如く十七八の上蕨の、血の付きたる物を洗ふとて、涙と共に坐すが、頼光この山御覽じて、「如何なる者ぞ」と問はせ給へば、姫君この山聞召し、「さん候。自らは都の者にて候が、或夜鬼神に掴まれて、是迄参りて候が、戀しき二人の父母や、お乳や乳母に逢ひもせて、斯く浅ましき姿をば、哀れと思召せや」とて、唯さめんと泣き給ふ。

ふ。落つる涙の際よりも、「あら浅ましや、此處は鬼の岩屋と申して、人間更に來る事無し。客僧等は是迄來らせ給ふぞや。如何にもして自らを都へ歸してたび給へ」と、仰せもあへず唯さめさめと泣き給ふ。頼光この山聞召し、「御身は都にて誰の御子」と問はせ給へば、「さん候。自らは花園の中納言の一人姫にてありけるが、我等許りに限らず、十餘人在します。この程池田の中納言にたかの姫君も捕られてこれに坐すが、愛しておきてその後は、身の内より血を搾り、酒と名付けて血をば呑み、肴と名付けて、葷を削ぎ喰はるゝ悲しみを、側にて見るも哀れなり。堀河の中納言の姫君も、今朝血を搾られ給ひしぞや。その帷子を我々が、洗ふ事こそ悲しけれ。眞に物憂き事ぞ」とて、さめんと泣き給へば、鬼を欺く人々も、實に道理とて、共に涙にむせび給ふ。頼光仰せけるやうは、「鬼をた易く平げ、御身達を悉く都へ返さむその爲に、是迄尋ね参りたり。鬼の柄を悉に語らせ給へ」と有りければ、姫君この山聞召し、「是は夢かや現かや、その義ならば語り申さむ」と、「この河上を上らせ給ひて御覽ぜよ。鐵の築地を築き、鐵の門を建て、口には鬼が集まりて番をしてこそ居るべけれ。如何にもして門より内へ忍び入りて御覽ぜよ。瑠璃の宮殿玉を垂れ、薨を並べて建て置きたり。四節(10)の四季をまなびつゝ、鐵の御所と名付けて、鐵にて館を建て、夜になればその内にて、我等を集めて愛せさせ、足手

を擦らせ、起き臥し申すが、廊の口には谷族共に、ほし熊童子・熊童子・虎熊童子・かね童子、四天王と名付けて番をさせて置きける。彼等四人の力の程は、如何程とも譬へむ方無しと聞く。酒吞童子がその姿、色うす赤く背高く、髪は禿におし亂し、晝の間は人なれども、夜にもなれば恐ろしき、その丈一丈餘りにして、譬へて云はむ方も無し。かの鬼常に酒を呑む。酔ひて臥したる時なれば、我が身の失するも知らぬなり。如何にもして忍び入り、酒吞童子に酒を盛り、酔ひて臥したる所を見て、思ひの儘に討ち給へ。鬼神は天命盡き果てて、遂には討たれ申すべし。如何にも才覺在しませ、客僧達」とぞ仰せける。

扱六人の人々は、姫君の教へに任せて、河上を上らせ給へば、程も無く鐵の門に着く。番の鬼共これを見て、「こは何者ぞ珍らしや。この程人を喰はずして、人を戀ひける折節に、愚人夏の蟲、飛んで火に入る」とは、今こそ思ひ知られたり。いざや引き裂き食はむ」とて、我も我もと勇みける。その中に鬼一人申しけるは、「周章てて事を仕損すな。斯く珍らしき肴をば、私にては叶ふまじ。上へことわり、御意次第に引き裂き食はむ」とぞ申しける。「實に尤も」とて、それより奥を指して参りつゝ、この由かくと云ひければ、童子この由聞くよりも、「こは不思議なる次第かな。何さま對面申すべし。此方へ請じ申せ」と有りければ、六人の人々を縁の

上にぞ請じける。その後、醒き風吹き來り、雷電稲妻頻にして、前後を忘するその中に、色薄赤く背高く、髪は禿におし亂し、大格子の織物に、紅の袴を着て、鐵杖を杖に突き、邊を睨



大江山千丈ヶ嶽

んで立つたるは、身の毛もよだつ許なり。童子申しけるやう、「我が住む山は常ならず、石巖岨々と聳えつゝ、谷深くして道も無し。天を翔る翅、地を走る獸まで、道が無ければ來る事無し。況んや面々人として、天を翔りて來るかや、語れ、聞かむ」と申しける。

頼光は聞召し、「我等が行の習ひにて、役の行者(12)と申せし人、路無き山を踏分けて、後鬼・前鬼・惡鬼とて鬼神の有りに行き逢うて、呪文を授け餌食を與へ、今に絶えせぬ年々に、餌食を與へ憐れむなり。この客僧も流れを汲む、本國は出羽の羽黒の者なりしが、大

峰山(13)に年籠り、漸く春にも成りければ、都一見その爲に、昨夜夜を籠め立ち出づるが、せん

の行者の御引合せ、何より以て嬉しう候。一樹の蔭一河の流れを汲む事も、皆これ他生の縁(14)と聞く。御宿を少し貸し給へ。御酒を持たせて候へば、恐れながら童子へも御酒一つ申さむ。我等も是にて御酒賜はり、終夜酒盛せむ」とぞ申されける。童子はこの由聞くよりも、「扱は苦しう無き人か」と、縁より上へ呼び上げて、猶も心を知らむ爲、童子申されけるやうは、「持たせの御酒の有りと聞く。我等も亦客僧達にも御酒一つ申さむ。それく」とありければ、「承る」と申して、酒と名付けて、血を搾り、銚子に入れて盃添へ、童子が前にぞ置きにける。童子盃取り上げて頼光にこそ獻しにけれ。頼光盃取り上げて、これもさらりと乾されけり。酒呑童子が是を見て、「その盃を次へ」と云ふ。承る」とて綱に獻す。綱も盃一つ受け、さらりとこそは乾しにける。童子申しけるやうは、「肴は無きか」と有りければ、「承る」と申して、今切りたるとおぼしくて、肘と股とを板に据ゑ、童子が前に置きにける。童子この由見るよりも、それ調理へて参らせよ。」承る」とて立つ所を、頼光は御覽じて、「某調理へ賜はらむ」と、腰の差添するりと抜き、截四五寸おし切りて、舌打ちしてこそ参りけれ。綱はこの由見るよりも、「御志の有難さを、某も賜はらむ」と、これも四五寸おし切りて、美味さうにこそ食はれける。童子この由見るよりも、「客僧達は如何なる山に住み馴れて、かく珍らしき酒肴を参る事こそ不

思議なれ」。頼光は聞召し、「御不審は御道理なり。我等が行の習ひにて、慈悲とて賜はる物有れば、假令心に受けずとも、いやと云ふ事更に無し。殊に斯様の酒肴をくう(15)に浮みし謂れ有り。討つも討たるゝも夢の中、即神即佛是なる故、くうに二つの味はひ無し。我等も共に浮ぶなり。あら辱な」と禮すれば、鬼神に横道無きとかや(16)、童子も却りて頼光に、禮拜するこそ嬉しけれ。童子申されけるやうは、「心に染まぬ酒肴を参らせけるこそ悲しけれ。餘の客僧へは無益」とて、心解けてぞ見えにける。その時頼光座敷を立ち、件の酒を取り出し、「これは又都よりの持参の酒にて候へば、恐れながら童子へも御酒一つ参らせむ。御試みの爲に」とて、頼光一つさらりと乾し、酒呑童子に獻されける。童子盃受け取り、これもさらりと乾されたり。實にも神便有難や、不思議の酒の事なれば、その味甘露の如くにて、心も詞も及ばれず。斜ならず喜びて、「我が最愛の女有り。呼び出して吞ませむ」とて、くにたかの姫君と、花園の姫君を呼び出し、座敷に置く。

頼光この由御覽じて、「これは又都よりの上臈達に参らせむ」と、お酌にこそは立たれける。童子餘りの嬉しさに、酔ひ惚れ申しけるやうは、「某が古を語りて聞かせ申すべし。本國は越後の者、山寺育ちの兒なりしが、法師に妬有るにより、數多の法師を刺殺し、その夜に比叡の山

に着き、我が住む山ぞと思ひしに、傳教と云ふ法師、佛達を語らひて、我が立つ袖(17)とて追ひ出す。力及ばず山を出で、又この峰に住みし時、弘法大師と云ふえせ者封じて、此處をも追ひ出せば、力及ばぬ處に、今はさまの法師も無し、高野の山に入定す。今又此處に立ち歸り、何の仔細も候はず。都よりも我が欲しき上臈達を召し寄せて、思ひの儘に召使ひ、座敷の體を御覽ぜよ、瑠璃の宮殿玉を垂れ、臺を並べ立て置きて、萬木千草目の前に、春かと思へば夏も有り、秋かと思へば冬も有り。かゝる座敷のその内に、鐵の御所とて、鐵にて館を建て、夜にもなればその内にて、女房達を集め置き、足手を擦らせ起き臥し申すが、如何なる諸天王の身なりとも、これにはいかで勝るべき。されども心に懸るは、都の中に隠れ無き頼光と申して、大惡人の強者なり。力は日本に雙び無し。又頼光が郎黨に定光・季武・金時・綱・保昌、何れも文武二道の強者なり。これ等六人の者共こそ、心に懸り候なり。それを如何にと申すに、過ぎつる春のことなるに、某が召し使ふ茨木童子と云ふ鬼を、都へ使ひに上せし時、七條の堀河にて彼の綱に渡り逢ふ。茨木、やがて心得て、女の姿に様を變へ、綱が邊に立ち寄り、髻むづと執り、掴んで來むとせし所を、綱この山見るよりも、三尺五寸するりと抜き、茨木が片腕を水も湛らず打落す。やうく武略を運らして、肘を取り返し、今は仔細も候はず。彼奴原がむつかしさを

に、我は都に行く事無し。その後酒吞童子は頼光の御姿を、目をも放さず打眺め、「扱も不思議の人々や。御身が眼をよく見るに、頼光にておはします。扱その次は茨木が肘を切りし綱にて有り。残る四人の人々は、定光・季武・金時や保昌とこそ覺えたり。我等が見る目は違ふまじ。いぶしう候、御立ちあれ。これに有り合ふ鬼共よ、心許して怪我するな。我等も罷り立つぞ」とて、色を變へてぞ奪きける。

頼光この由御覽じて、こゝを陳じ損ずるならば、事の大事と思召し、もとより文武二道の人なれば、少しも騒がぬ氣色にて、からくと打笑ひ、「扱も嬉しの仰せかな。日本一の強者に山伏共が似たるとや。その頼光も、季武も、名を聞くだにも初めに、まして目に見る事は無し。只今仰せを能く聞けば、惡逆無道の人と聞く。あら勿體無や、淺ましや。然様の人には似るもいや。我等が行の習ひとして、物の命を助けむ爲、山路を家とする事も、饑ゑたる虎狼に身を與へ、有情非情を救はむ爲、釋迦牟尼如來の古はしうふう(20)と名を付けて、諸國を修行に出で給ふ。或時山路を通らせ給へば、深き谷の底よりも、何者なるとは知らねども、『諸行無情』と唱へければ、谷に下りて御覽するに、九足八面の鬼神とて、頭は八つに足九つ、さも恐ろしき鬼にぞ有る。しうふう彼に近づきて、『只今唱へし半偈の文、我に授けよかし』とある。鬼神答へて云ふや

うは、『授けむ事は易けれど、饑に臨みて力無し。人の身をだに服するならば、唱へむ』とこそ申しけれ。しうふうこの由聞召し、『それこそ易きことなるべし。残りの文を唱ふるならば、汝が餌食に某成らむ』と仰せければ、鬼神斜に喜び、残りし文をぞ唱へける。『是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂』と唱へければ、しうふう是を授かりて『あら有難や』と禮しつゝ鬼神が口に入らせ給へば、則ち菩薩と現れ、鬼神は即ち毗盧遮那佛、しうふうは釋迦佛なり。又或時はこれやこの、鳩の秤に身を懸けしも、皆これ生けるを助けむ爲。是に有り合ふ山伏も同じ行にて候へば、文を一つ授けつゝ、早く命を召さるべし。露塵程も惜しからじ』と、さも有りさうに宣へば、童子はこれに欺罔られ、面の色を直しつゝ、『仰せを聞けば有難や。彼の奴原がこれ迄はよも來らじとは思へども、常に心に懸る故、酔ひても本地(23)忘れず』とて、『御持參の酒に酔ひ、只繰言と思召せ、赤きは酒の咎ぞかし。鬼とな思召されそよ。我もそなたの御姿、打ち見には恐ろしけれど、馴れてつばい(24)は山伏』と、歌ひ奏でて心打解け、獻し受け／＼吞む程に、これぞ神使鬼毒の酒なれば、五臟六腑に浸み渡り、心も姿も打亂れ、如何に有り合ふ鬼共よ。斯く珍らしき御酒一つ御前にて下されて、客僧達を慰めよ。一さし舞へ』とぞ仰せける。

「承る」と起つ所を、頼光この由御覽じて、『先づ御酒一つ申さむ』とて、並び居たりし鬼共に、件の酒を盛り給へば、五臟六腑に浸み渡り、前後も更に辨へず。されどもその中に、いし熊童子はずんと立つて舞うたりける。

都より如何なる人の迷ひ來て酒肴のかざしとはなる

「面白や」と押返し二三返こそは奏でける。この心を能く聞けば、是に有りける山伏共を、酒や肴に爲すべしとの歌の心と覺えたり。聽て頼光御酌にこそは立たれける。童子が受けたる盃を、綱はこの由見るよりも、ずんと立つてぞ舞うたりける。

年を経し鬼の岩屋に春の來て風やさそひて花を散らさむ

「面白や」と、これも亦押返し二三返こそ舞うたりける。この歌の心持、これに有り合ふ鬼共を、嵐に花の散る如くに爲すべしとの歌の心を、鬼は少しも聞き知らず、『あら面白や』と感じつゝ、次第々々に酔ひ惚れて、童子申されけるやうは、『如何に有り合ふ鬼共よ。客僧達をよきに慰め申すべし。某が代官には二人の姫を残し置く。それに姑く御休みあれ。明日對面申すべし』とて、童子は奥にぞ入りにける。残る鬼共童子の歸らせ給ふを見て、此處や彼處に臥したるは、宛然死人の如くなり。

頼光この由御覽じて、二人の姫君を近づけて、『御身達は都にては誰の姫にたましますぞ』と

ん候。自らは池田の中納言にたかの一人姫にて有りけるが、近き程に奪られ来て、戀しき二人の父母や、お乳や乳母に逢ひもせで、斯く淺ましき姿をば、哀れと思召せや」とて、唯さめざめと泣き給ふ。「今一人の姫君は」と、問はせ給へば、「さん候。自らは吉田の宰相のおと姫にて候ひしが、中々命の消えやらで、恨めしさよ」とかき口説き、二人の姫君諸共に、聲も惜しまず消え入るやうに泣き給ふ。頼光この由聞召し、「道理なり、さりながら鬼を今夜平げて、御身達を都へ御供申しつゝ、戀しき二人の父母に見参させ申すべし。鬼の臥所を我々に導き給へ」と有りければ、姫君達は聞召し、「これは夢かや現かや」と、「その儀にて有るならば、鬼の臥所を我がよきに案内申すべし。御用意あれ」とありければ、頼光斜に思召し、「その儀にて候はば、面々物具し給へ」とて、先づ傍にぞ忍ばれける。頼光の扮装には、らんでん鎖と申して、緋威の鎧を召し、三社の神の賜ひし星冑に、同じ毛の獅子王の御冑押重ねて召されつゝ、ちすゐと申せし劔を持ち、南無や八幡大菩薩と、心の中に祈念して進み出で給ふ。残る五人の人々も思ひ／＼の鎧を着、何れも劣らぬ劔を持ち、女房達を先に立て、心靜に忍び行く。廣き座敷をさし過ぎて、石橋をうち渡り、内の體を見給へば、皆々酒に酔ひ臥して、誰ぞと咎むる鬼も無し。乗り越え／＼見給へば、廣き座敷のその中に、鐵にて館を建て、同じ扉に鐵の太き門鎖し

立てて、凡夫の力に中々内へ入るべきやうはなし。廊の隙より打見れば、四方に燈火高く立て、鐵杖逆鋒立て竝べ、童子が姿を見てあれば、宥の形と變り果て、その丈二丈餘りにして、髪は赤く、倒に髪の間より角生ひて、鬚も眉毛も繁り合ひ、足手は熊の如くにて、四方へ足手をうち投げて、臥したる姿を見る時は、身の毛もよだつばかりなり。有難や、三神現れ給ひつゝ、六人の者共に、「能く／＼これまで参りたり。さりながら心易く思ふべし。鬼の足手を我が鎖にて繋ぎつゝ、四方の柱に結び付けて、働く氣色は有るまじきぞ。頼光は首を切れ。残る五人の者共は後や前に立ち廻り、すん／＼に斬り捨てよ。仔細は有らじ」と宣ひて、門の扉を押開き、かき消すやうに失せ給ふ。扱は三社の神達の、これ迄現れ給ふかと、感涙肝に銘じつゝ、頼もしく思ひつゝ、教へに任せて、頼光は頭の方に立ち廻り、ちすゐをするりと抜き給ひて、「南無や三社の御神、力を合せてたび給へ」と、三度禮して斬り給へば、鬼神眼を見開きて、「情無しとよ、客僧達。欺り無しと聞きつるに、鬼神に横道無きものを」と、起き上らむとせしかども、足手は鎖に繋がれて、起くべき様のあらざれば、大聲を上げて叫ぶ聲、雷電、雷、天地も響くばかりなり。

もとよりも強者共、刀は劔、太刀早にすん／＼に斬り給へば、首は天にぞ舞ひ上る。頼光を目

に掛けて、唯一嚙にと狙ひしが、星冑に恐れを爲し、その身に仔細は無かりけり。足手胴まで切り、大庭指して出で給ふ。數多の鬼の中に茨木童子と名告りて、「主を討つ奴原に手並の程を見せむ」とて、面も振らず懸りける。綱はこの由見るよりも、「手並の程は知りつらむ。目に物見せて呉れむ」とて、追うつ捲りつ暫しが程戦ひけれども、更に勝負は見えざりけり。押し並べてむすどと組み、上を下へともて返す。綱が力は三百人、茨木力や強かりけむ、綱を取つて押伏する。頼光この由御覽じて、走り懸つて茨木が細首宙に打ち落せば、いし熊童子・かね童子、その外門を固めたる十人餘りの鬼共が、この由を見るよりも、「今は童子も坐さず、何處を住所と爲すべきぞ。鬼の岩屋も崩れよ」と、喚き叫んで懸りける。六人の人々は、この由を見給ひて、「やさしの奴原や。手並の程を見せむ」とて、習ひ給ひし兵法を取り出させ給ひて、彼方此方へ追ひ詰めて、數多の鬼共悉く平げて、暫く息をぞつがれける。頼光仰せけるやうは、「如何に女房達、早々出でさせ給ふべし。今は仔細も候まじ」と仰せければ、この聲を聞くよりも、捕られて坐す女房達、囚屋の中より轉び落ち、頼光を目に掛けて、「これは夢かや現かや、我をも助けてたび給へ」と、我もくと手を合せて歎き悲しむ有様を、物によく々々警ふれば、罪深き罪人が獄卒の手に渡り、無間地獄に落されしを、地藏菩薩の錫杖にて、唵阿阿阿毘施塞婆娑呵(と)と、救ひ

取らせ給ひしも、斯くやと思ひ知られたり。

その時六人の人々は、姫君を先に立て、奥の體を見給へば、宮殿樓閣玉を垂れ、四節の四季をまなびつゝ、葦を竝べて立てたるは、心も詞も及ばれず。又傍を見給へば、死骨白骨生しき人、或は人を鮮にして目も當てられぬその中に、十七八の上臈の片腕落し股削がれ、未だ命は消えやらで、泣き悲しみて坐すを、頼光御覽じて、「あの姫君は都にて誰の姫君にて坐すぞ。姫君達は聞召し、「さん候。あれこそは堀河の姫君にて候」とて、急ぎ傍に走り寄りて、「如何に姫君、いたはしや。自ら共は客僧達の、鬼悉く平げて、都へ連れて歸らせ給ふが、御身一人残し置き歸るべきかや。悲しやな、斯く恐ろしき地獄にも、御身に心の引かされて、跡に心の残るぞ」と、髪搔き撫でて、「何事にて御心に思召さるゝ事有らば、我々に語らせ給へ。都へ上りて候はば、父母によきに届けて参らすべし。姫君如何に」とありければ、この由を聞召し、「羨ましの人々や。斯く淺ましき露の身の、早くも先に消えもせで、斯様の姿を人々に見せ参らす恥しさよ。都に上らせ給ひつゝ、父母のこの事を知召されて有るならば、我が身の事を中々に歎き給はむ悲しさよ。形見は思ひの種なれど、姫が形見」と宣ひて、「我が黒髪を切りて給へ。又この小袖は自らが、最期の時迄着たる小袖」と宣ひて、その黒髪を押包み、「母上様に参らせて、後世をば弔うてたび

給へと、よく／＼届けてたび給へ。如何にあれなる客僧達、歸らせ給はぬその前に、自らには止めを刺して給はれ」とて、消え入るやうに泣き給ふ。頼光この由聞召し、「實に道理なり、理なり。さりながら都に上りて候はば、父母にこの事をよきに案内申しつゝ、明日にも成るならば迎ひの人を下すべし、暇申してさらば」とて、物憂き洞を立ち出でて、谷嶺過ぎて急がせ給へば、程も無く大江山の麓なるしもむらの在所につく。頼光仰せけるは、「如何に所の者共よ、急ぎ傳馬を觸れさせて、女房達を都へ送るべし。如何に／＼と有りければ、承る」と申す時、その頃丹波の國司をば大宮の大匠殿とぞ申しけるが、この由を聞召し、「扱もめでたき次第」とて、急ぎ雜餉構へ參らせけり。その暇に馬乗物にて、人々を都へ送り給ひけり。

都にはこの事を聞くよりも、頼光の御上りを見物せむとて、さゞめき渡りて控へたり。その中に姫を奪られし池田の中納言夫婦の人も出で給ひ、何處迄も逢ひ次第と、迎ひに出でさせ給ひしが、頼光を見つけつゝ、「すはや是へ」と宣へば、早姫君も御覽じて、「母上様」とて泣き給ふ。母上この由御覽じて、する／＼と走り寄り、姫君に取り付きて、「是は夢かや現か」と、消え入るやうに泣き給へば、中納言も聞召し、「一度別れし我が姫に、二度逢ふこそ嬉しけれ」と、急ぎ宿所に歸らせ給ふ。頼光は參内有り、帝叡覽坐して、御感申すばかり無し。御褒美限り無かりける。

る。それよりも國土安全長久に、治まる御代とぞなりにける。彼の頼光の御手柄、前例少なき弓取とて、上一人より下萬民に至る迄、感ぜぬ者は無かりける。

(御伽草子、酒吞童子)

註

- (1) 醍醐天皇。(2) 攝津守源頼光。滿仲の子。(3) 頼光の四天王、碓井定光・卜部季武・渡邊綱・坂田金時。(4) 平井保昌。英雄譚、怪賊説話、袴垂參照。(5) 八重鎖。(6) 酒を入るゝ竹の小筒。(7) 欲界の第六天の魔王の名。(8) 神變奇特酒に掛けてある。(9) 助力する。(10) 佛語。結夏・解夏・冬至・元旦。(11) 俚諺。(12) 役小角。葛城山で修業三十年、終に神仙と成る。後輯、高僧譚、法力説話、役行者參照。(13) 大和葛城山。修驗道の靈場。(14) 宿二樹下一波二河流一、一夜同宿、一日夫妻(中略)、皆是、先世宿縁也(説法妙眼論應身品)。(15) 空と食に掛けてある。(16) 俚諺に「鬼神に横道無し」。(17) 阿頼多羅三藐三菩提の佛達わが立つ袖に冥加あらせ給へ(新古今集卷二、釋教、傳教大師)。(18) 次項茨木參照。(19) いぶせく。厭はしく。(20) 雪山童子の故事をいふのであらう。釋尊本生譚の一。(21) 佛の徳を讃へた四句の偈の半分。(22) 釋迦を試さうとした帝釋天、自ら鷹と變じ、毘首羯磨を鳩に代へこれを追つた。鳩は救を求めて釋迦の腋下に隠れると、釋迦は自身の肉を切り秤にかけ鷹に與へたといふ。同じく本生譚の一。(23) 本性の意。(24) 可愛い。しほらしい。(25) 咒語。

土蜘蛛

I

(上略) 同じき年の夏の頃、頼光瘡病(2)を仕出し、如何に落せども落ちず、後には毎日に發りけり。發りぬれば頭痛く身熱り、天にも着かず地にも着かず、中に浮かれて惱まれけり。斯様に逼迫する事三十餘日にぞ及びける。

或時又大事に發りて、少し減につきて醒め方になりければ、四天王の者共看病しけるも、皆閑所に入りて休みけり。頼光少し夜深け方の事なれば、幽なる燭の影より、長七尺許りなる法師するくと歩み寄りて、繩を擱きて頼光に付けんとす。頼光之に驚きてがばと起き、「何者なれば頼光に繩をば付けんとするぞ。悪き奴かな」とて、枕に立て置かれたる膝丸(3)おつ取つて、はたと斬る。四天王共聞きつけて、我もくと走り寄り、「何事にて候」と申しければ、「云々」とぞ宣ひける。燈臺の下を見ければ、血溢れたり。手々に火を炬して見れば、妻戸より簀子へ血溢

れけり。是を追ひ行く程に、北野の後に大きな塚あり。彼の塚へ入りたりければ、即ち塚を掘り崩して見る程に、四尺許なる山蜘蛛にてぞありける。搦めて参りたりければ、頼光、「安からざる事かな。是程の奴に誑され、三十餘日惱まざるこそ不思議なれ。大路に曝すべし」とて、鐵の串に刺し、河原に立ててぞ置きける。是より膝丸をば蜘蛛切とぞ號しける。

(平家物語、劍卷(4))

註 (1)次項茨木田に掲げた文に

引續く一節である。(2)おこり。

(3)蜘蛛切と共に父滿仲より傳へ

られた重代の寶劍(次項参照)

(4)太平記の附卷になつてゐることもある。



能の土蜘蛛

II

源頼光

清和帝(一)の御末と聞

猛くつも

たり。神無月廿日餘りの頃、

北山の邊を遊行しけるに蓮台野に至りぬ。郎等に綱と云ふ男有り。是も餘の人に勝れる賢き兵なりければ相隨へて行きけり。頼光三尺の劍を提げ、綱は腹巻を

をたと

かへり、兎角竹む程に、一つの鬮腰空を飛ぶ。是を見るに、風に隨ひて雲に入りぬ。綱言ひ合せてこの行方を尋ね行くに、神樂岡と云ふ所に到りぬ。鬮腰見えすなりぬ。その所に古き家あり。いと廣き庭の面に

分け入る袖も絞るばかり

門を見やるに、葎閉ちて自ら絶

えたり。古き上達部の住處なるべし。西に紅錦繡の山有り、南に碧瑠璃の水有り、庭は蘭菊の野となり、門は禽獸の住處となれり。扱中門の中に到りぬ。綱をば留め置きて頼光は左右を顧る。

臺所の障子の一間なるに、老女の息さし騒がしきを音なひ聞ゆ。遣戸を打ち叩くに開けたり。

頼光問ひて曰く、「汝は何者ぞ。事の心辨き難し」と宣へば、答へて云ふ、「我はこの所の年頃(一)の者なり。二百九十に罷りなる。主君九代に仕へたり」と云ふを見れば、髮白くして同じ物を集めたり。扱(二)と云ふ物を持ちて、左右の目を開けて、上の臉を頭のうち被きたれば帽子の如し。又笄(三)の様なる物にて口を差し開けて唇をひ

して頂に結へり。

左右の乳を延べて、膝

に引き懸けしをきたるゝに似たり。云ふやう、「春往き秋來れども思はあらたまらず。歳去

り歳來りて恨のみ切なり。この處には魔して人跡絶えたり。若きは去ると雖も、老いて自らの残る恨めしきかな。宮の鶯住ますなり、梁の燕遠さかる事を泣けり。君を見奉るは長安娼家の娘(一)元和の白樂天に逢へる心地す。人所異なりと雖も、きしは之同じ。彼處には江の上に浮ぶ月を見る毎に、枕の上に積る涙を悲しむ。今然るべき知識(二)に逢ひ奉る事を得たり。願はくは我を殺し給へ。十念成就(三)して三尊(四)來迎に與らん。何事か是に過ぎたる御恩候べき」と云ふ。頼光斯くの如き者に逢ひて問答無益と思ひ、其處を出でて有り。綱臺所に行きて世間を窺ひ見けり。

夕闇の程、空の氣色昏ならずなりぬ。

暮に紛ふ木の葉もいたく降り増り、風夥しく吹き

て神鳴り電繁し。更に生けるべき心地もせず。綱の思ひけるは、此處に留まりつる事は、若し群れ入る化物有らば、兩人の中に取り込めて、十方より切り敗るべし。く(一)ら中に取込められなば更に敵ふべからず。又然りとて一處に寄るべきに非ず。又逃ぐべきに非ず。忠臣は兩君に仕へず、からちよは朱に(二)すと云ふ事あり。いかでか命を背き、更に恩を忘るべきと思ひて、雨に濡れ風に萎れて居たり。頼光は心を鎮めて聞くに、鼓を打つが如く足音して、言ひ知らぬ異類異形の者共、幾らと云ふ數を知らず歩み來れり。柱を中に隔てて各、居ぬ。姿まち／＼な

り。頼光燈火の方を見やるに、その眼白毫びやくごうの如し。皆一度に噓うそと笑ひて、障子を引き立てて去り行きぬ。

又一人の尼來れり。道州民みちしゅうの如し。その丈三尺許りなり。面二尺丈一尺なるべし。下の短さ思ひやられて怪しからず。燈臺の下に打寄りて火を消さんとす。頼光に瞰みまれて尼公にこにこと笑へり。眉太々と作りて紅赤く、向齒むかしばね二つに鐵漿てつじやう附けて、正しく紫の帽子にて、紅の袴長やかに着たり。身にはつやく掛る物無し。手細くして糸筋の如し。色白くして雪の如し。

けむにくち満てり。雲霞の消ゆるが如くして失せけり。

鶏人けいじんの曉を唱へて忠臣晨あしたを待つ程になりぬれば、今は何事か有るべきと思ふに、怪しき足音にて、對むかひひたる障子を開け、五寸許り細めて屢しばしばはた隠れたり。その様春の柳の風に亂れたるよりも細やかなり。つくくと立ちて引開くるを見る程に、漸々歩み來りて、甚くけ近くはあらで疊かさねに居溢れたる程、先づ情あり。所謂あかぬりつゝの雪を打拂へる氣色なり。楊貴妃・李夫人と争ふ程の容貌かたちなれば、家主などの喜び思ひて來れる事迄も思ひ續けて見るに、風冷やかに吹きて隙白み行けば、この女つと立ちて歸ると見ゆるたけところに、なり、髪を前へ掻い取りて、燈を瞰みまへたる眼つき漆を差せるに似たり。火の光に輝き合ひたり。目もあやなる

心地するに、この女袴の裾を蹴上げたれば、け毬の程なる白雲を十許り頼光にうち懸けつゝ、目も見えずなるに、やがて二三間許り行き寄せて、取り敢へぬに、太刀を抜きて強かに斬るに搔消つやうに失せぬ。板敷を打通して、礎いしづなの石を半ら許り打ちけり。

化人歸りつれば、綱來れり。御敵は強かにめされ候ひぬ。但し御太刀の先や折れぬらん」と云ふ。板敷より抜き出でて見れば、實にも折れたり。其處を見るに白き血影しく溜り、總て流れず、太刀にも白血附きたり。扱綱諸共に行方を尋ぬる程に、昨日の老女の局に到りぬ。此處にも白血許り有りて主は見えず。早一口に喰はれてけるなと思ひ尋ね行くに、西の山の方遙かに分入りたる洞の中に尋ね行くに、白血流れ出でて細谷川の如し。

綱が云ふやうに御劍の先の折れやうを見るに、楚國の眉間尺ひまげんぢの始皇を思ひて、雄劍の先を折りつるに違はず。願はくは藤を切り葛を斷ちて人形を作りて、烏帽子直垂を脱ぎ着せて前に立てて行かむ」と申す。頼光諸共に用意しけり。今は四五町も來ぬらむと思ふに、穴のはたに到りぬ。棟庫むねくらと思しき古屋一つ有り。瓦に松を、垣に苔生して、人跡絶えたり。見るに長さ二十丈許りなる頭、錦を着たる如し。頭の方によりて足幾らとも知らず多し。眼は日月の光の如く輝けり。大きに呻うなめきて曰く、「あな詮無や。こは何事、身に病いびの焦るも苦し」と言ひ果

てぬに、案違はず、白雲の中に異光を放ちたる物一つ來りて人形に立てば、人形倒れぬ。取り
 て見るに我が劍の先なり。この男の言葉に違はず、只物に非すとぞ思ひける。化人音もせずな
 りぬ。やがて近付きて兩人力を併せて掴み出す。この物力強くして、却りて害を爲さんとす。大
 磐石を動かさむが如し。天照大神・正八幡宮に祈念す。「我が國は神國なり。神は國を守り給ひ、
 國は又帝の謀臣をもて治む。我は又臣として而も王孫なり。我十善(1)の餘慶の家に生れ、今こ
 の物を見るに畜生なり。畜類は極惡無間、破戒無愆の故に、この道に生を享く。而も國に患ひ
 を爲す、人の仇となる。我即ち帝を守る兵なり。國を治むるかたて(1)なり。汝従はざらん」
 と云ひて、兩人「ゑい」と引くに、始めあ[]心有りとも雖も、早く従ひて仰様に倒れぬ。頼光
 劍を抜きて首を刎ぬ。綱腹を開けてむとするに、腹の半ばの程に深く切れたる疵有り。頼光板
 敷迄切通す處の疵なり。「抑も何物ぞ」と見るに、山蜘蛛と云ふ物なり。劍の切目より死人の首千
 九百九十ぞ出でたる。やがて傍を探すに、七八の子供の勢なる小蜘蛛幾らと云ふ事を知らず走
 り騒ぐ。腹を探すに、無下に少なきちやう首二十許りは有り。一つの穴を掘りて首を埋みぬ。
 彼の所に火を懸けて焼き拂ひつ。公おほやけ聞召して御感あり。頼光をば津守つのかみに爲す。正下の四位に
 至る。綱は丹波國を賜はりて、正下の五位に爲されにけり。

(土蜘蛛雙紙)

土蜘蛛退治

土蜘蛛雙紙(帝室博物館藏、南北朝頃の繪卷、詞書は兼
 好筆と傳へられてゐる) ————二四八頁「土蜘蛛」I 參照———

てぬに、案違はず、白雲の中に異光を放ちたる物一つ来りて人形に立てば、人形倒れぬ。取り
 て見るに我が剣の先なり。この男の言葉には、只物に非ずとぞ思ひける。化人昔もせずな
 りぬ。やがて近付きて兩人力を併せ^三掴み^三世す。この物力強くして、却りて害を爲さんとす。大
 磐石を動かさむが如し。天照大神、^一八幡宮^一新念す、我が國は神國なり。神は國を守り給ひ、
 國は又帝の謀臣をもて治む。我は^二皇^二とし^二皇^二も王孫なり。我十善の餘慶の家に生れ、今こ
 の物を見るに畜生なり。畜類は極惡無間、^三法^三及^三無慈^三の故に、この道に生を成く。而も國に患ひ
 を爲す、人の仇となる。我即ち帝を^四匡^四する^四兵^四護^四なり。國を治むるかたて^五は^五なり。汝從はざらん
 と云ひて、兩人、^六ま^六いと^六引^六くに、^七如^七め^七ぬ^七。心有り^八と^八雖^八も、早く^九從^九ひて^九仰^九様^九に^九倒^九れ^九ぬ。額光
 劍を抜きて首を割ぬ。額腹を割けてむと^{一〇}守^{一〇}る^{一〇}。額^{一一}の^{一一}半^{一一}ば^{一一}の^{一一}程^{一一}に^{一一}深^{一一}く^{一一}切^{一一}れ^{一一}たる^{一一}痕^{一一}有^{一一}り。額光板
 敷迄切通す處の痕なり。抑も何物ぞと^{一二}見^{一二}る^{一二}。山^{一三}蜘蛛^{一三}と云ふ物なり。劍の切目より死人の首千
 九百九十ぞ出でたる。やがて傍を探すに、^{一四}七^{一四}言^{一四}の^{一四}子^{一四}供^{一四}の^{一四}跡^{一四}なる^{一四}小^{一四}蜘蛛^{一四}幾^{一四}らと云ふ事を知らず走
 り騒ぐ。腹を探すに、無下にゆなきちやう首^{一五}二十^{一五}許^{一五}りは^{一五}有^{一五}り。一つの穴を掘りて首を埋みぬ。
 彼の所に火を懸けて焼き拂ひつ。公^{一六}開^{一六}召^{一六}して^{一六}御^{一六}感^{一六}あり。額光をば^{一七}津^{一七}守^{一七}に^{一七}爲^{一七}す。正下の四位に
 坐す。額^{一八}は^{一八}津^{一八}守^{一八}を^{一八}編^{一八}は^{一八}りて、^{一九}正^{一九}下^{一九}の^{一九}五^{一九}位^{一九}に^{一九}爲^{一九}され^{一九}に^{一九}け^{一九}り。
 (上巻終)



註

(1) □内は文字不明。推當てに埋めた箇處もある。(2) 長年住む。(3) 象骨で作った先の尖ったもので、物の結び目を解く具。(4) 白樂天が琵琶行に作った娼婦を指す。(5) 安樂淨土に導く名僧。(6) 南無阿彌陀佛の名號を授かつて、佛に結緣すること。(7) 彌陀・觀音・勢至。(8) 佛の眉間に在つて光を放つ毛。(9) 未詳。(10) 宮中で時刻を知らせる役人。此處は或は函谷關の故事か。(11) 名劍工莫耶の子、父の遺言によつて雌劍を携へ、楚王を仇と狙つた故事。今昔物語卷九・太平記卷十三・曾我物語卷四等に詳しく見える。(12) 十惡を行はぬ功德によつて、天子に生れること。(13) 片手か、或は固めの誤か。

【解説】

鬼神退治説話の中で、被退治者が比較的人間的分子を多分に含む點では、この酒顛(吞)童子退治即ち大江山傳説は鬼賊退治と稱しても不可ではない。而も鬼同丸傳説に比して寧ろ猶鬼神退治と目するが妥當であらう。

大江山繪詞(酒顛童子雙紙・大江山記等と題したのもある)にも見え、謡曲大江山・語酒吞童子等にも作られてゐる。童子の住處を近江國伊吹山千丈嶽とした伊吹山繪詞もある(前太平記は大江山・伊吹山兩度の事として兩者を併せ認めようとしてゐる)。頼光の鬼賊退治に關しては、

鬼同丸傳説の他に史實の根據は無い。斬られた首の食ひ附く點でも同傳説からの轉移を暗示してゐる(英雄譚、怪賊説話、鬼同丸參照)。匪賊捕戮の武功はあつたであらうし、又この傳説の完成に支那説話白猿傳の影響も與つてゐるかもしれないが、説話の本質と型態から觀れば、明らかに大蛇退治神話(神話篇、肥河上參照)の傳説時代に於ける變形である。精しく云へば日本武尊熊襲誅戮の史的傳説を経ての變形である。山伏姿の變裝と酒色の手段に依る點もこの意味で解明せられ得る。而してその神便鬼毒酒の奇瑞に關聯して、神明の助力が述べられてある。

酒頭童子の本體は不明であるが、一面に賊人横行の世相を反映し、他面に近古に於ける國民信仰上の鬼乃至鬼神の觀念の具象化を示してゐる。説話型としても、邪神の實體としても、猿神退治傳説(前項參照)との交渉も看過し難い。同時に民間傳説としての遊離的な巨人傳説と結び付いてゐる事も想像し得られ、又その繪卷等に於ける面容形相の完成には、能の狸々が適切な粉本を提供したと考へられる。童子の名は佛説の金剛童子・衿羯羅童子などの用例の聯想から來てゐるのであらう。

頼光の四天王といふ名稱は古事談(第二)が初見か。季武・公時等の名は今昔物語に既に見えてゐる(次項及び童話篇、金太郎參照)。一人武者の保昌は平井氏、頼光の縁族である(英雄譚、怪

賊説話、袴垂參照)。

本傳説に取材した近松の作に酒頭童子枕言葉があり、その四段目道行は一中節の四天王大江山入りとしても行はれた。同じく近松の傾城酒頭童子は、本傳説に借りて茨城屋幸齋の事件を脚色したものである。

土蜘蛛傳説は同じく頼光竝に四天王等の武功談である。大江山傳説と種類の怪物退治で、同時に土蜘蛛の名稱に異民族或は賊人の穴居生活の聯想がある(古代の土蜘蛛の誅伐は記紀の神武天皇・景行天皇の條等に見える)。

I・II 共同一傳説の異傳で、共に寶劍説話の要素を含み、I は特に純粹の寶劍説話を形成してゐる。説話としてはIの方が有名で、後世文學に影響を與へたのもこの方であるが、IIも亦面白く、怪談味は却つて豊で、百鬼夜行繪卷・付喪神繪詞等と共通したものがある。

本傳説に取材した謡曲の土蜘蛛が有名で、新古演劇十種の土蜘蛛もこれから來てゐる。古淨瑠璃にも頼光蜘蛛切があり、近松も關八州繫馬四段目にこの傳説を利用してゐ、又歌舞伎には別に蜘蛛線宿直噺(くものいとやまぶねばなし)の所作事の系統が生れた。長唄では蜘蛛拍子舞として行はれてゐる。

茨

木——鬼神退治 (三)

I

(上略)ワキ謠「扱も渡邊の綱は、只假初の口論に因り、鬼神の姿を見ん爲に、物の具取つて肩に掛け、同じ毛の兜の緒を締め、重代の太刀を佩き、地謠「たけなる馬に打乗つて、舍人をも連れず只一騎、宿所を出でて二條大宮を、南がしらに歩ませけり。春雨の、音も頻りに更くる夜の、春雨の音も頻りに更くる夜の、鐘も聞ゆる曉に、東寺の前を打過ぎて、九條おもてに打つて出で、羅生門(1)を見渡せば、物凄じく雨落ちて、俄に吹き來る風の音に、駒も進まず高嘶し、身振してこそ立つたりけれ。その時馬を乗り放し、その時馬を乗り放し、羅生門の石壇に上り、標の札を取り出し、壇上に立て置き歸らんとするに、後より兜の、鍔を搦んで引止めなければ、すはや鬼神と太刀抜き持つて、切らんとするに、取りたる兜の緒を引きちぎつて、覺

えず壇より跳び降りたり。斯くて鬼神は怒をなして、斯くて鬼神は怒をなして、持ちたる兜をかつばと投げ捨て、その長衝門(2)の軒に等しく、兩眼月日の如くにて、綱を睨んで立つたりけり。

ワキ謠「綱は騒がず太刀差駢し、地謠「綱は騒がず太刀差駢し、汝知らずや王地を侵す、その天罰は遁がるまじとてかゝりければ、鐵杖を振り上げ、えいやと打つを、飛び違ひちやうと斬る。斬られて組み付くを、拂ふ劍に腕打落され、ひるむと見えしが脇つちに上り、虚空を指して上りけるを、慕ひ行けども黒雲覆ひ、時節を待ちて又取るべしと、呼ばはる聲もかすかに聞ゆる、鬼神よりも恐しかりし、綱は名をこそ揚げにけれ。

(謠曲、羅生門)

註 (1)平安城の正門。朱雀大路の中心に當り朱雀門と相對す。羅城門。(2)かぶきもん(冠木門)。

シテ 鬼神 ワキ 綱

II

(上略)鬼切と申すは、もとは清和源氏の先祖、攝津守賴光の太刀にてぞありける。その昔大和國宇多郡に大森あり。この陰に夜なく妖物在つて、往來の人を奪食ひ、牛馬六畜(1)を囓み裂く。賴光これを聞きて、郎等に渡邊源吾綱と云ひける者に、「彼の妖物討つて參れ」とて祕藏の太

茨 木

刀をぞ賜びたりける。綱則ち宇多郡に行き、甲冑を帯して、夜々件の森の陰にぞ待ちたりける。この妖物綱が勢にや恐れたりけん、敢て眼に遮る事無し。さらば形を替へて謀らんと思つて、髪を解き亂して掩ひ、鬘を懸け、鐵漿黒に大眉を作り、薄衣を打被きて、女の如くに出立つて、朧月夜の曙に、森の下をぞ通りける。俄に空かき曇りて、森の上に物の立翔るやうに見えけるが、虚空より綱が髪を囀んで、宙に提げてぞ擧つたりける。綱、頼光の許より賜はりたる太刀を抜いて、虚空を拂斬にぞ切つたりける。雲の上に「啞」と云ふ聲して、血の颯と顔に懸りけるが、毛の黒く生ひたる手の指三ありて、爪の鉤りたるを、一の腕よりかけず切つてぞ落しける。綱この手を取つて頼光に奉る。頼光之を秘して、朱の唐櫃に收めて置かれける後、夜々怖しき夢を見給ひける間、占夢の博士(二)に夢を問ひ給ひければ、「七日が間の重き御慎」とぞ占ひ申しける。依之堅く門戸を閉ぢて、七重に七五三を引き、四門に十二人の番衆を据ゑて、毎夜宿直(三)をぞ射させける。

齋する事己に七日に満じける夜、河内國高安の里より、頼光の母義おはして門をぞ敲かせける。齋の最中なれども、正しき老母の、對面の爲とて渺々と來り給ひたれば、力無く門を開いて、内へ誘ひ入れ奉つて、終夜の酒宴にぞ及びける。頼光酔ひに和して、この事を語り出され

たるに、老母持つたる盃を前に擱き、あな怖しや。我が傍の人も、この妖物に奪られて、子は親に先立ち、婦は夫に別れたる者多く候ぞや。扱も如何なる物にて候ぞ。あはれその手を見ればや」と被三所望(一)ければ、頼光「易き程の事にて候」とて、櫃の中より件の手を取り出して、老母の前にぞ擱きける。母これを取つて、暫らく見る由しけるが、我が右の手の臂より切られたるを差出して、「これは



新 古 演 劇 種
茨 木 十

頼光件の太刀を抜いて、牛鬼の頭をかけず切つて落す。その頭宙に飛揚り、太刀の鋒を五寸食切つて口に

我が手にて候ひける」と云ひて差合せ、忽ちに長二丈許りなる牛鬼となつて、酌に立つたりける綱を、左の手に乍提、乍含、半時許り跳り上りく、吠え忿りけるが、遂には地に落ちて死にけり。その形は猶破風(四)より飛出でて、遙の天に上りけり。今に至る迄、渡邊黨の家作に、破風をせざるはこの故なり。その頃修験清淨の横川の僧都覺蓮を請じ奉つて、壇上にこの太刀を立て、七五三を引き、七日加持し給ひければ、鋒五寸折れたりける劔に、天井より俱梨迦羅(五)下り懸りて、鋒を

口に含みければ、忽ちに如元生ひ出でにけり。その後この太刀、多田満仲が手に渡つて、信濃國戸藏山にて又鬼を斬つたる事あり。依之その名を鬼切と云ふなり。この太刀は、伯耆國會見郡に、大原五郎大夫安綱と云ふ鍛冶、一心清淨の誠を致し、鍛へ出したる劔なり。時の武將田村の將軍に是を奉る。これは鈴鹿の御前(6)、田村將軍と鈴鹿山にて劔合の劔是なり。その後田村丸伊勢太神宮へ參詣の時、大宮より夢の告を以て、御所望有つて、御殿に被納(7)。その後攝津守頼光、太神宮參詣の時夢想あり。「汝にこの劔を與ふる。是を以て子孫代々の家嫡に傳へ、天下の守たるべし」と示し給ひたる太刀なり。されば源家に執せらるゝも理なり。

(太平記卷第三十二、直冬上洛事附鬼丸鬼切事)

註

(1)牛馬羊犬豕雞。(2)夢占ひの博士。(3)響き目の義。朴又は桐で作り内を空洞にして多く孔を穿つ

た鐵。その鳴る音によつて妖魔を降伏させ得るといふ。(4)屋造りの様式。搏風造。切妻屋根の端の

兩下して山形をなす所を搏風と云ふ。(5)詳しくは俱梨迦羅不動明王。俱梨迦羅龍王とも云ふ。(6)英

雄譚、鬼神退治、鈴鹿御前參照。

III

(上略)その頃攝津守頼光の内に、綱・金時・貞道・末武とて四天王を仕はれけり。中にも綱は四天王の隨一なり。武藏國の美田と云ふ所にて生れたりければ、美田源次とぞ申しける。

一條大宮なる所に、頼光聊か用事有りければ、綱を使者に遣さる。夜隠に及びければ、鬚切(1)を帶かせ馬に乗せてぞ遣しける。彼處に行きて尋ね、問答して歸りけるに、一條堀川の戻橋(2)を渡りける時、東の詰に齡二十餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて誠に優なりけるが、紅梅の柱に守懸け、佩帶の(3)袖に經持ちて、人も具せず唯一人、南へ向ひてぞ行きける。綱は橋の西の詰を過ぎけるを、はた／＼と叩きつゝ、「や、何地へおはする人ぞ。我等は五條邊に侍り。頻に夜深けて恐し。送りに給ひなんや」と馴れ／＼しげに申しければ、綱は急ぎ馬より飛び下り、「御馬に召され候へ」と云ひければ、「悦しくこそ」と云ふ間に、綱は近く歩み寄つて、女房をかき抱きて馬にうち乗せて、堀川の東の詰を南の方へ行きけるに、正親町へ今一二段が程打ちも出でぬ所にて、この女房後へ見向きて申しけるは、「眞には五條邊にはさしたる用も候はず。我が住居は都の外にて候なり。それ迄送りに給ひなんや」と申しければ、「承り候ひぬ。何處迄も御座所へ送り參らせ候べし」と云ふを聞きて、頓て美しかりし姿を變へて怖しげなる鬼になりて、「いざ、我が行く所は愛宕山(4)ぞ」と云ふ儘に、綱が鬚を掴みて提げて、乾の方

へぞ飛び行きける。綱は少しも騒がず、件の鬚切を颯と抜き、空さまに鬼が手をふつと切る。綱は北野の社(4)の廻廊の屋の上にどうと落つ。鬼は手を切られながら、愛宕へぞ飛び行く。扱綱は廻廊より跳り下りて、鬚(5)に附きたる鬼が手を取りて見れば、雪の容貌(6)に引替へて、黒き事限り無し。白毛際なく生ひ繁り、白銀の針を立てたるが如くなり。是を持ちて参りたりければ、頼光大(7)に驚き給ひ、「不思議の事なり」と思ひ給ひ、「晴明(8)を召せ」とて、播磨守安倍晴明(9)を召して、「如何あるべき」と問ひければ、「綱は七日の暇を賜はりて慎しむべし。鬼が手をば能く能く封じ置き給ふべし。祈禱には仁王經(10)を講讀せらるべし」と申しければ、その儘にぞ行はれける。

既に六日と申しける黄昏時に、綱が宿所の門を叩く。「何處より」と尋ねれば、「綱が養母渡邊(11)に在りけるが上りたり」とぞ答へける。彼の養母と申すは、綱が爲には伯母なり。人して云ふは悪しき様に心得給ふ事もやとて、門の際迄立ち出でて、「適々の御上りにて候へども、七日の物忌にて候が、今日は六日になりぬ。明日ばかりは如何なる事候とも叶ふまじ。宿を召され候べし。明後日になりなば入れ参らせ候べし」と申しければ、母は是を聞きてさめくとうち泣きて、「力及ばぬ事どもなり。さり乍ら、和殿(12)を母が生み落ししより請ひ取りて、養ひ育て

し志、如何ばかりと思ふらん。夜とて安く寝もせず、濡れたる所に我は臥し、乾ける所に和殿を置き、四つや五つになる迄は、荒き風にも當てじとして、何時か我が子の成長して、人に勝れて善からん事を、見ばや聞かばやと思ひつゝ、夜晝願ひし甲斐有りて、攝津守殿御内には、美田源次(13)と云ひつれば、肩を並ぶる者も無し。上にも下にも譽められぬれば、悦びとのみこそ思ひつれ。都鄙遼遠(14)の路なれば、常に上る事も無し。見ばや見えばやと、戀しと思ふこそ親子の中の歎きなれ。この程打續き夢見も悪しく侍れば、覺束無く思はれて、渡邊より上りたれども、門の内へも入れられず、親とも思はれぬ我が身の、子と戀しきこそ果敢なけれ。綱は道理に責められて、門を開きて入れにけり。

母は悦びて、來し方行く末の物語し、「扱七日の物忌と云ひつるは何事にてありけるぞ」と問ひければ、隠すべき事ならねば、有りの儘にぞ語りける。母は之を聞き、「扱は重き慎しみにてありけるぞや。さ程の事とも知らず恨みけるこそ悔しけれ。さり乍ら親は守(15)にてあるなれば、別の事はよも非じ。鬼の手と云ふなるは、如何なる物にてあるやらん、見ばや」とこそ申されけれ。綱答へて曰く、「易き事にて候へども、固く封じて侍れば、七日過ぎでは叶ふまじ。明日暮れて候はば、見参に入れ候べし」。母の曰く、「よし、扱は見ずとても事の缺くべき事ならず。我

は又この曉は夜を籠めて下るべし」と、恨み顔に見えければ、封じたりつる鬼の手を取出し、養母の前にぞ置きたりける。母打返し、是を見て、「あな怖しや、鬼の手と云ふ物は、斯かる物にてありけるや」と云ひて、差し置く様にて立ちさまに、「是は我が手なれば取るぞよ」と云ふ儘に、恐しげなる鬼になりて、空に上りて破風の下を蹴破りて、虚空に光りて失せにけり。それよりして渡邊黨の屋造りには破風を建てず、東屋作（つらやま）にするとかや。綱は鬼に手を取り返されて、七日の物忌破ると云ふとも、仁王經の力に依りて、別の仔細無かりけり。この鬚切をば鬼の手切りて後鬼丸と改名す。

(平家物語 卷)

註 (1) 膝丸と一對を成す源家重代の寶劍。父滿仲より頼光に傳へられたもの。(2) 身につけた。(3) 山城國愛宕郡。(4) 京都北野神社。(5) 有名な陰陽家。天文博士。常に職神（しじん）を使うたと傳へる(後輯、高僧譚、法力説話、職神参照)。(6) 攝津國。難波江の渡口の地。(7) 都と田舎と遙か隔つてゐること。(8) 諺に「親は守りの神」。(9) 四阿造。四方葺き下しにして、搏風なき屋根。

【解説】

前項の大江山・土蜘蛛兩傳説に連關する同種の頼光竝に四天王の武功傳説の一であるが、こ

れではその四天王の筆頭たる渡邊綱を主人公とする英雄譚である。同一傳説が所傳を異にして、羅生門と戻橋と二系統の發展を遂げてゐる。前者は御伽草子酒吞童子(前項参照)及び謡曲羅生門(I)に見え、後者は劔卷(III)によつて代表せられる。IIの太平記の所傳はその中間に立つもので、大和國宇多郡としてゐる、相互と異同交渉があるが、或は最も原形に近いものであるかもしれない。IIとIIIとは又鬼切・鬼丸とそれ／＼寶劔説話を形成してゐる。

この兩異傳の展開するには極めて自然の理由がある。即ちIは十訓抄・江談抄等に傳へられる藝術傳説(後輯、藝術譚、歌(詩)徳説話、鬼の詞参照)で有名な羅生門の鬼に結び付き、IIIは謡曲鐵輪と交渉ある宇治の橋姫傳説に合體してゐる。謡曲姫切も後者の系統のものである。(曾我物語卷八「太刀刀の由來の事」には、八幡太郎義家の太刀が自づと抜け出て宇治の橋姫の左腕を斬つたので、それから姫切と號した話が見える。この傳説と關係のある事は疑ひ無い。)又、御伽草子の羅生門はIとIIとを併せたもので、且IIIの影響をも受けてゐる作である。

本傳説では斬り取られた腕を奪還するのが重要なモチーフをなし、全體の形式は英國のベオウルフ傳説と類型をなしてゐるが、内國的にも道場法師の傳説(日本靈異記・水鏡・謡曲飛鳥寺)・貞信公の傳説(源氏物語夕顔卷・大鏡)、特に今昔物語(卷二十七)の近江國安義橋の鬼女傳説を初め、

直接間接に先縦をなした諸説話がある。更に同じく四天王の一人平季武が産女の怪に逢うた傳説（今昔物語、卷二十七）は謡曲羅生門の内容の前身と見られ得る説話である。

新古演劇十種には本傳説を題材としたものが二つまである。即ち茨木は羅生門傳説の後半を戻橋は戻橋傳説の前半を劇化したものである。

題ス鬼 化ケテ嫉ニ媮レ 腕ヲ鬪ニ

鬼神 何ゾ横 道ナル

盜レシテ腕ヲ雲 中ニ没ス

回レセバ頭ヲ如シ郭公一ノ

只 見ル有 明ノ月

茨木はのびを一本半分し
あゝも似るものかと綱はくやしがり

紅葉

狩

鬼神退治

(四)

ツレ四人、謠「時雨を急ぐ紅葉狩、時雨を急ぐ紅葉狩、深き山路を尋ねん。ツレ謠「これはこの邊に住む女にて候。實にや長らへて浮世に住むとも今は早、誰白雲の八重葎、茂れる宿の淋しきに、人こそ見えね秋の來て、庭の白菊移ふ色も、憂き身の類と哀れなり。シテ謠「餘り淋しき夕まぐれ、時雨るゝ空を眺めつゝ、四方の梢も懐かしさに、ツレ謠「伴ひ出づる道の邊の、草葉の色も日に添ひて、下紅葉、夜の間の露や染めつらん、夜の間の露や染めつらん。朝の原は昨日より、色深き紅を、分け行く方の山深み、實にや谷河に、風の懸けたる柵は、流れもやらぬもみぢ葉を、渡らば錦中絶えんと、先づ木の下に立寄りて、四方の梢を眺めて、暫く休み給へや。

ワキ謠「面白や、頃は長月廿日餘り、四方の梢も色々に、錦を色どる夕時雨、濡れてや鹿の獨り鳴く、聲を導の狩場の末、實に面白き景色かな。トモ大勢、謠「明けぬとて、野邊より山

に入る鹿の、跡吹き送る風の音に、駒の足竝勇むなり。大丈夫が、彌猛心の梓弓、彌猛心の梓弓、いる野の薄露分けて、行方も遠き山陰の、鹿垣の道の峻きに、落ちくる鹿の聲なり。風の行方も心せよ、風の行方も心せよ。ワキ詞「如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「あの山陰に當つて人影の見え候は、如何なる者ぞ、名を尋ねて来り候へ。トモ詞「畏つて候。名を尋ねて候へば、やごとなき上藤の、幕打廻し屏風を立て、酒宴半と見えて候程に、懇に尋ねて候へば、名をば申さず、只さる御方とばかり申し候。ワキ詞「あら不思議や。この邊にてさやうの人は思ひも寄らず候。よし誰にてもあれ上藤の、道の邊の紅葉狩、殊更酒宴の半ならば、誰かたがた乗打叶ふまじと、馬より下りて沓を脱ぎ、馬より下りて沓を脱ぎ、道を隔てて山陰の、岩の峻路を過ぎ給ふ、心遣ひぞ類無き、心遣ひぞ類無き。シテ謠「實にや數ならぬ身程の山の奥に来て、人は知らじと打解けて、獨り眺むる紅葉の、色見えけるか如何にせん。ワキ謠「我は誰とも白眞弓、只やごとなき御事に、恐れて忍ぶばかりなり。シテ謠「忍ぶ振摺誰ぞとも、知らせ給はぬ道の邊の、便に立寄り給へかし。ワキ詞「思ひよらずの御事や。何しに我をば留め給ふべきと、謠さらぬやうにて過ぎ行けば、シテ謠「あら情無の御事や。一村雨の雨宿り、ワキ謠「一樹の陰に、シテ謠「立寄りて、地謠「一河の流を酌む酒を、いかでか見捨て給ふべきと、恥しながらも袂に縋り

留むれば、流石岩木に非されば、心弱くも立歸る、所は山路の菊の酒、何かは苦しかるべき。地謠「實にや虎溪を出でし古も、志をば捨て難き、人の情の盃の、深き契の例とかや。シテ謠「林間に酒を暖めて紅葉を焚くとかや。地謠「實に面白や所から、巖の上の苔筵、片敷く袖も紅葉衣の、紅深き顔容の、ワキ謠「この世の人とも思はれず、地謠「胸うち騒ぐばかりなり。さなきだに人心、亂るゝ節は竹の葉の、露ばかりだに受けじとは、思ひしかども盃に、向へば變る心かな。されば佛も戒の、道は様々多けれど、殊に飲酒を破りなば、邪淫妄語も諸共に、亂心の花蔓、かゝる姿は又世にも、類嵐の山櫻、他の見る目も如何ならん。シテ謠「よしや思へばこれとても、地謠「前世の契淺からぬ、深き情の色見えて、かゝる折しも道の邊の、草葉の露の託言をも、懸けてぞ頼む行末を、契るも果敢な打ちつけに、人の心も白雲の、立ち煩へる氣色かな。斯くて時刻も移り行く、雲に嵐の聲なり。散るか正木の葛城の、神の契の夜かけて、月の盃さす袖も、雪を廻す袂かな。堪へず紅葉、シテ謠「堪へず紅葉青苔の地地謠「堪へず紅葉青苔の地、又これ涼風暮れ行く空に、雨うち濺ぐ夜嵐の、物凄じき山陰に、月待つ程の轉寢に、片敷く袖も露深し。夢ばし覺まし給ふなよ、夢ばし覺まし給ふなよ。(中入)ワキ謠「あら淺ましや我ながら、無明の酒の醉心、まどろむ隙も無き内に、あらたなりける夢の

告と、地謠、驚く枕に雷火亂れ、天地も響き風遠近の、方便も知らぬ山中に、覺束無しや恐しや。不思議や今迄在りつる女、不思議や今迄在りつる女、とりくく化生の姿を現はし、或は巖に火焰を放ち、又は虚空に焰を降らし、咸陽宮(11)の烟の中に、七尺の屏風(12)の上に猶、餘りてその長一丈の鬼神の、角はかぼく(13)眼は日月、面を向くべきやうぞなき。

ワキ謠「維茂少しも騒がずして、地謠、維茂少しも騒ぎ給はず、南無や八幡大菩薩と、心に念じ、劔を抜いて待ちかけ給へば、微塵になさんと飛んで懸るを、飛び違ひむすと組み、鬼神の眞中刺し通す所を、頭を擱んで上らんとするを、斬り拂ひ給へば、劔に恐れて巖へ上るを、引下し刺し通し、忽ち鬼神を従へ給ふ、威勢の程こそ恐しけれ。

(謠曲、紅葉狩)

註 (1)八重葎茂れる宿の淋しきに人こそ見えね秋は來にけり(拾遺集卷三、秋、惠慶法師)。(2)山河に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり(古今集卷五、秋下、春道列樹)。(3)龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ(同、同、讀人不知)。(4)下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてや獨り鹿の鳴くらむ(新古今集卷五、秋下、藤原家隆)。(5)陸奥の忍ぶもぢぢり誰ゆるに亂れむと思ふわれならなくに(古今集卷十四、戀四、河原左大臣)。(6)宿二樹下、波三河流、一夜同宿、一日夫妻、(中略)皆是、先世宿縁也(說法妙眼論應身品)。(7)廬山記に見える。陶淵明・陸修靜の二友が來訪し

た歸りを見送るとて、廬山の惠遠法師が三十餘年越えたことの無い虎溪を覺えず過ぎて、三人大笑したといふ所謂虎溪三笑の故事。(8)林間煖酒燒紅葉一石上題詩掃三綠苔(白氏文集卷十四)。この白樂天の詩句に關して高倉天皇の御仁慈を傳へ奉る有名な話が平家物語卷六に見える。(9)移り行く雲に嵐の聲すなり散るかまさきの葛城の山(新古今集卷六、冬、藤原雅經)。(10)不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天(白氏文集卷十三)。(11)秦始皇帝の宮殿、兵燹に罹つた。(12)七尺の屏風は躍らば越えつべし(謠曲、咸陽宮)七尺屏風其徒高(本朝文粹卷十、源順)(朗詠集卷下、雜にも載す)。(13)枯木か。

シテ 女、後、鬼女 ツレ 女共 ワキ 維茂 トモ 從者・列卒

〔附〕

夫れ天下泰平に治まる事は、佛法を以て旨とし、五常を守り、信心を深くせん、などか國民の素直ならんや(1)。茲に人皇四十四代に當らせ給ふ帝をば、元正天皇と名付け奉る。この帝は漢朝の古、三皇(2)・五帝(3)の跡を慕ひ、信心を以て専らとし、賢臣の諫を用る俊臣を退け、善に近づき惡を離れ給ふ故にや、國豊かに治まり、民安穩に住めり。之に因つて國土の人民、遠國波濤に至る迄、靡かぬ草木も無かりけり。

されば治まる御代の徴にや、美濃國より不思議の事を奏聞す。本栖郡に泉の出でて(4)、飲

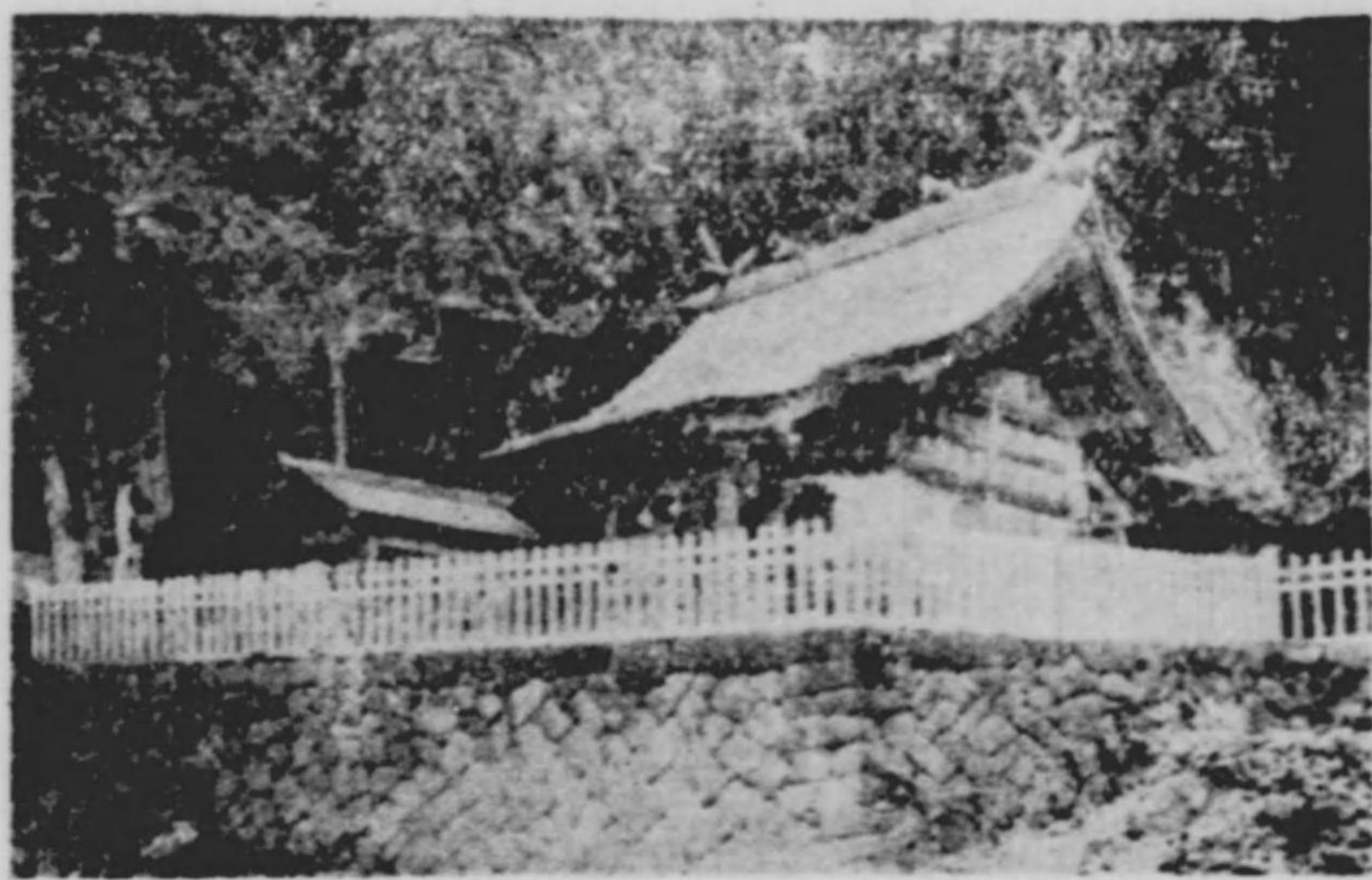
む人は白髪變じて黒くなり、老いたるは若やぎ、若きは何時も老いせぬ由を申上げければ、殿上人奇異の思ひを爲し、急ぎこの由奏聞ありければ、帝寂聞あり。斯かる奇特なる事こそ無けれ。急ぎ勅使をなし、見て參れ」と宣旨なりければ、聽て勅使を下して、事の様を見給へば、眞に希代不思議なり。勅使邊りの里人を近づけて、事の仔細を問ひければ、里人答へて申しけるは、「さん候。この泉の出で侍る事、古よりも出でたるやらん、又この頃出でたるやらん、知らざりしが、吾等年寄りたる父を持つて侍るが、彼を育まんその爲に、山に入り薪を切り、之を營みとして過し申す處に、或は山路の疲れにこの瀧川の邊に休らひ、何となくこの水を掬びて飲み侍れば、疲れも止み、心も若やぎ候程に、急ぎ家路に汲み運びて、父に是を與ふるに、彼の老人この水を飲みてより、何時しかに白髪を變じて黒くなり、足も軽く、夜の寢醒めも物憂からず、朝寢の床も起き易くして、疲れに臨む事も無き故、この水を朝夕汲みて飲み侍るにより、何時しかこの身も年寄る事なし。さるに依りてこの最初の人に、之を知り侍るなり」と申上げければ、勅使も奇特の思を爲し、扱瀧壺に立寄り、能く／＼泉の出づる所を見すまして、聽てそれより都に歸り、この由を有りの儘に奏聞ありければ、帝も大きに御感ありて、聽て年號を養老とぞ改められける。眞に聖代の御代には、斯様の瑞相有る事、

漢朝にもその例多し。愈々帝にも政を怠り給はず、君も臣も安穩にこそ過されけれ。

斯くて年月経る程に、又人民の煩ひこそ出で來にけれ。その故は、東山道信濃國戸隠山には不思議なる變化の者の住んで、暮れは往き來の人稀なりけり。初めの程こそあれ、後には夜と無く晝とも云はず、鬼神の姿を現はし、麓へ出で、往き來の人を惱ます莫大なり。是にたづさへられて、關東よりの貢物素直ならず。都より東へ下る事も叶はず。近國の人々は是が爲奪られ、或は親を奪られて子残りて歎くも有り、或は夫を失ひて女の歎くも有り、兄を奪られて弟後にて憂ふるも有り。何れも家々に啼哭する聲は、叫喚地獄の苦しみも、是には勝らじとぞ見えし。徒に田畠も耕さず、晝夜ともに門戸を閉ぢて籠り居る事、眞に天下の患なりとて、信濃國の人民舉り集つて詮議しけるは、「昔も斯かる事侍り。この儘にてあるならば、近國の人民悉く彼に滅され候べし。適々吾等如きもの残り留りても、斯くの如く門戸を閉ぢて籠り居ては、田を耕す事もならず。されば行末とても覽束無し。所詮この事都へ訴へ申し、何卒して國の素直ならんやうに計へ」とありければ、「その義尤も然るべし」とて、我と覺しき者數十人連れて、都を指してぞ上りける。

斯くて都に着きしかば、事の仔細を奏聞申せば、帝大きに驚かせ給ひ、彼の十人の者召さ

れ、尋ねさせ給へば、始め終りの事委しく申上げければ、帝叡開座して、殿上人を近づけ、「如何はせん」と仰せければ、中にも堀川の内大臣進み出でて申されけるは、「古もさる例有り。天智天皇の御時も、藤原の千方ちまたと云ひし逆臣も、鬼を悉く随へ召使ひしかども、宣旨を戴して攻めければ、忽ち滅びし例有り。今とても斯くの如し。急ぎ武士に仰せて退治せられば、何の仔細の侍るべき」とありければ、帝實にもと思召し、「その義にてあるならば、誰にか仰せ付くべし」とありければ、「きひの大臣」と申すは、文武二道の人なれば、これに仰せられ候へかし」と申上げらる。帝「さらば大臣召せ」とありければ、急ぎ勅使を下されける。大臣驚き、馳て参内せられけり。帝仰せけるやうは、「信濃岡戸隠山に鬼神の住んで、國中の人民を惱まし、往き來の人を滅す事奇怪なり。急ぎ汝信濃國に下つて退治せよ」との勅諭なり。大臣勅諭を承り、「我等如きの者の罷り下り候とも、滅し得ん事は難かるべし。是は天下に名を得たらん人に仰せ付られ候へかし」と申上げられければ、公卿・殿上人仰せけるは、「勅答はさる事なれども、人多きその中に、御邊を選び出さるゝこそ面目なれ。その上斯くの如くの論言汗りんげんの如くなれば、片時も時刻を移さず罷り下らるべし」と宣へば、大臣聞召し、「重ねて申さば宣旨を背くと云ひ、命を惜しむに似たるべし。その義にてあるならば、罷



(山隠戸信) 社奥社神隠戸

り下り申すべし」とて、御前を立つて宿所に歸り、御内の郎黨に蘇我の河麿・紀の貞雄として大剛の者あり。彼等二人を御前に召して、「如何に面々、承れ。この頃信濃國戸隠山には鬼神の住んで、人民を惱まし往き來の人の煩ひある由を奏聞申す。然る處に、吾等に彼の鬼神を退治せよとの勅諭を下さるれば、家の面目末代迄の聞え也。明日にもなるならば、早信濃國へ下るべし。汝等二人供せよ」とありければ、二人の者承り、「これは由々しき大事かな。人多きその中に、只今君にこの宣旨をなし下さるゝ事、家の面目何事か之に如かん。假令通力を得たる鬼神なりとも、眼にさへ見えなば、などか滅ほろさで叶ふまじ。その上勅諭なれば愈々頼もしう覺え候」とて喜ぶ事限り無し。大臣宣ひけるは、「汝等が申す如く、勅諭を帶して下るなれば、些か思ふ仔細無し。さり乍ら、佛神を頼むべし。我この年月長谷の觀音を信じたり。參籠申したくは思へども、大事の宣旨なれば早く下るべし」とて、長谷の觀音へは使者を下し、御身養老二年九月中旬に、河麿・

貞雄を大將として、その勢五十餘騎を引具し、彼の三人の者に案内せさせ、都を立出で大津の浦に着き給ふ。

瀬田の橋を打渡り野路の篠原を過ぎ、夜を日に繼いで急がせ給ふ程に、音に聞えし信濃國に着かせ給ふ。三人の者共はとある在家に入れ奉り、先づ旅の休息させ奉る。大臣殿は、「夜明けなば彼の山へ分け入るべし」とて、彼の三人の者を召して、山の様子を尋ねさせ給ひける。三人の者申す様、「さん候、彼の山と申すは、越中の立山に加賀の白山と續き候が、嶮しき事申す鳥ならでは通ふべきやうも無し。」老樹茂りて月日の光明らかならず、木の葉積りて道無ければ、偶々行き交ふ人とても歸るさを辨へず。眼に遮るもの空を翔る翼、耳に觸るゝものは峯の嵐谷の水音、是等の外に音するものも候はずとぞ申しける。大臣聞召し、「何ともあれ、夜明けなば彼の山へ分け入り、山の有様を見るべし。然らばたばからん爲に出づべき。その時思ひの儘に隨へん」と宣ひて、この夜は其處に明し給ふ。

さる程に、山の端白み横雲棚引き、日影も漸々映し給へば、大臣殿は、「人多くして叶ふまじ」とて、河鷹・貞雄を、「唯二人供せよ。残る者共は皆麓に留るべし。人多く行かば鬼神怖れて出づまじきぞ。その用意せよ」とて、大臣殿は緋緘の鎧の、未だ巳の時と輝くを、赤地の

錦の直垂を召し、二尺八寸の太刀を佩き、上に薄衣一つうち着つゝ、先に進んで出で給ふ。蘇我の河鷹も萌葱絲緘の鎧に、褐色の直垂を着しければ、紀の貞雄は小櫻緘の鎧を着て、何れも薄衣の上に被きて、彼の山へ分け入り給ふ。残りの者共は皆麓の野邊に留り、「何ともあれ、討ち洩し給ふものならば、此處にて捕へ止むべし」と皆牙を噛みてぞ待ちかけた。斯くて主従三人は、足に任せて分け入り給ふ。誠に聞くよりは彌増りて凄まじ。頃は九月下旬の折なれば、峯の木枯吹き萎り、木の葉積りて道も無し。山路に雨無うして霧深く、日輪の光稀なれば、時を辨ふる事も無し。斯かる物憂き險難を過ぎて、少し長閑なる所に出で給ふ。とある木陰に三人立寄りて息をつき給ふ。大臣仰せけるやうは、「是程迄分け入り、早夕陽も西に移り給ふと雖も、眼に遮るものも無し。如何様是は宣旨に畏るゝか、又は觀音の佛力にて、吾等が威勢に恐るゝか、不思議さよ」とぞ仰せける。二人の者承り、「眞に常には里迄も下りて人を奪る奴めが、斯かる所迄來れども仇を爲さぬは、如何様宣旨に畏るゝか、君の威勢に恐るゝなるべし。何ともあれ、この山にて年月を送るとも、姿を見ざらんに於ては罷り出づまじき」とぞ申しける。大臣聞召し、「能く申したり、吾等もそれは心得たり。この山にて暮すとも、姿を見ざらんに於ては二度故郷へは歸るまじき」とて、腰に附けたる乾飯など取出し

て、飢を休めつ在します。

斯かりける處に、峯の方に人の聲聞えければ、大臣不思議に思召し、「是こそ彼の鬼神なるべし。行きて見ん」と宣ひ、又遙々と分け上り給へば、美しき女房二人涙を流し居たり。大臣「是こそ彼の變化の者なるべし。吾等をたばからん爲に、女となりて出でたるぞや。彼奴を連れて來よ」と宣へば、「承る」と申して、河麿するくくと立寄りければ、女はいと恥かしげに木陰へ立忍びけり。河麿言ふ様、「汝等何者なればこの人倫稀なる山に住むぞ、不審なり」と申せば、この女房聞きて申す様、「吾等はこの山に住む者に非ず、麓の者なり」とぞ申しける。河麿聞きて、「さては苦しからず」とて、急ぎ歸りて大臣殿の前に行く。大臣御覽じて、「如何に汝等承れ。この山に鬼神の住處在りと聞く。何處の程ぞ、教へよ」と仰せければ、女房涙を流し申しけるは、「さん候、吾等は知らず候。この峯の彼方に氣高き上藤の數多酒盛して座す。この人々こそ能くく、知ろし召され候。吾等は住處へは入らず候。彼處へ行きて尋ね給へ」と申しければ、大臣兎や角彼の女房を具して、又峯を遙々と越え給ひければ、案の如く氣高き女房六七人、幕打廻し屏風を立てて、酒宴半と見えにける。大臣立寄り見給へば、彼の女房達恥かしげなる風情して、此處の木陰彼處の岩の下へ立隠れければ、大臣仰せけるは

「如何にく方々、是は苦しからぬ者なり、何しに隠れ給ふぞや。早やく出で給へ」と宣へば、女房達恥かしながら立出でて、「御姿を見奉れば都の人と見え申す。是はこの山に住む者ならねど、仔細ありて斯様の深山の奥に来て、人は知らじと打解けて戯れ侍りしに、見え參らせけるは恥かしさよ」と打臥し給へば、大臣御覽じて、「何をか恥らはせ給ふらん。一樹の陰の宿りにも、他生の縁と聞くなれば、斯かる折節、道の邊の草花の、露の託言をも問ひ交す事も、この世ならぬ契りなり。吾等は都者にて東の方に下りしが、路に踏み迷ひ、この山へ分け入り侍るなり。道を教へて給べ」とありければ、女房之を聞き、「都の人と聞けば懐かしくこそ侍れ。さらば此方へ渡り給へ、道しるべ申すべし。さり乍ら、一河の流を汲む酒を、いかに見捨てさせ給ふべき」と、御袖に縋りて勸むれば、流石岩木ならぬ身なれば、心弱くも立寄りて、林間に酒を煖め紅葉を焚く風情も斯くやと思ひ知られて、立舞ふ足下に心地惑ひ、早心を打解け給ふ。大臣仰せけるは、「如何にや方々聞き給へ。眞やこの山に鬼の住むと聞いてあり。何處の程ぞ教へ給へ」と宣へば、女房達聽きて、「さん候、この山には九生大王と申して、その丈一丈餘りの鬼あり。召使ふ眷屬に至る迄、一人として徒なる者無し。この頃は陸奥の國へ下り候。二三日は歸り申すまじきなれば、扱吾々留守の間に出でて心を慰み候なり」

とて、打解け顔にて強ひければ、大臣殿を初め河磨・貞雄、差受けく飲む程に、前後しどろに見え給ふ。(上卷)

側なる岩を枕として、少しまどろみ給ひしが、女房共之を見て、「しすましたり」と喜び、今迄は女と見えしが皆凄じき鬼となりて、「急ぎ九生大王に申さん」とて、皆々鬼の窟へ歸りけり。

無慘やな三人の人々、既に危く見え給ひしが、忝くも長谷の観音は、大臣殿の枕許に現じ給ひ、如何にや大臣、斯かる宣旨を承り、大事の敵を知らずして、斯く不覺見えけるぞや。早起きよ」と宣ひて、搔消すやうに失せ給ふ。大臣夢醒めて、かつばと起きて見給へば、邊りにありつる女一人も無し。二人の者も同じ枕に臥したり。大臣殿聲を怒らして、二人の者を起させ給ひければ、河磨・貞雄夢醒めかつばと起き上り、四方をきつと見廻して、「是は如何に」と言ひければ、大臣宣ふやう、「不思議やな、只今の女は皆この山の鬼なるぞ。用意せよ」と宣ひて、上に打着給へる薄衣脱ぎて捨て、太刀抜き持つて、三人一所に立集り、大木の一本ありけるを楯につき、今やくと待ち給ふ、心の中こそ頼もしけれ。

さる程に、彼の女は皆鬼の形を現し窟に歸り、九生大王の大前に參り申しけるは、「斯様にたばかりて、前後も知らず臥して候ひける。急ぎ出でさせ給ひて、早々餌食に爲し給へ。大王如何に」と申しければ、大王斜めに喜び、「能くこそ申してありける」とて、聽て窟を立出で、眷屬共を引具して、在りし處に立出で給へば、三人の人々は無かりけり。「是は如何に」と慌て騒ぎ、此處や彼處と尋ねれば、三人の人々之を御覽じて、「すはや鬼神の出でたるぞや、一人も漏すな」と宣ひて、木陰より現れ出でて大音揚げて宣ふやう、「如何にや鬼神確に聽け。普天の下卒土の中、王土に非すと云ふ事無し」。それに何ぞ、汝王地を汚すのみならず、往き來の人を惱ます、その天罰は遁るまじ」と懸り給へば、鬼共之を見て、「何、王地を汚すとや、昔はさもこそありつらめ。手並の程を見せん」とて、三人の人々を中に取籠めて攻めけるが、素より剛なる人々にて、かけ合せ闘ひ給ふ。鬼神は通力を得たる者なれば、惡風を吹かせ火を飛ばせ、谷を驅り峯に登り、岩を崩し古木を倒して闘ひければ、敵ふべきやうは無かりけり。然れども王威の忝き事は、何處とも知らず、十七八の天童一人飛び來り、鐵の楯を持ちて、三人の者の面に立ちて防ぎ給ふ。大臣之を御覽じて、「忝き事かな。扱は未だ佛神の擁護も廢らざるぞ」とて、面もふらず闘ひ給へば、さしもに飛行自在の鬼共も、忽ちに通力失せて、皆悉く討たれければ、九生大王之を見て大きに腹を立て、「憎き奴原かな。いで某が手並の程を見せん」とて、

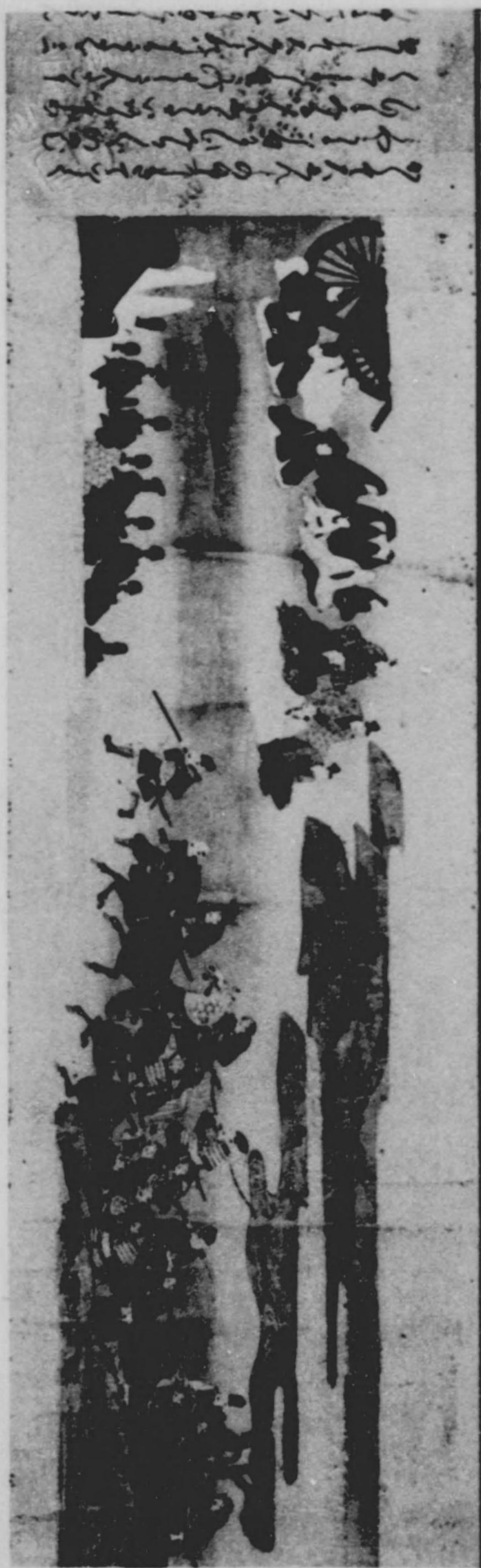
小高き岩の上に跳び上り、大臣殿を蹴こんで立ちたりしは、身の毛もよだつばかりなり。三人の人々之を見て、隙間も無く斬つて懸れば、敵はじとや思ひけん、大臣殿を目に懸けて、宙を飛んで懸りしが、纏まとてむづと組み合ひける。さしも險険しき山路を、上になり下になり轉まびしを、二人の人々之を見て、隙間も無く斬り給へば、少し弱りて見えけるを、纏まとて押へて首搔落しければ、この首虚こくう空に飛び上り、口より火焰を吹出し、三人の人々に吐き懸けけれ。などかはたまるべきやう無かりけり。鎧よろいの袖を頭に被かき、木陰を求めて彼方あつち此方こゝとし給へば、何處どこより來りけん、鷲じゆ・熊鷹くまたか二つ飛び來り、彼の舞まひ上る鬼の首を隙間も無く蹴こる程に、數千丈深き谷の底へ蹴落しければ、微塵ちりに碎けて失せにけり。三人の人々之を見て、愈い々々と手を合せ伏し拜み給ふ。「今は早思ふ仇は滅しつ、思ふ事無し」とて、木陰に立寄りて少し休らひ給ひしが、程無く日輪入り給へば、素より山路に月無うして道見えす。「さらば今宵はこの山に明せ」とて、木葉を集めて焚火として、長き夜寒を明し給ふ。麓ふもとに在りし者共は、「如何し給ひけむ、覺束無し。いざや尋ね參らせん」とて、道も見えぬ險険しき山を、彼方あつち此方こゝへ尋ね入りける、心の中こそ頼たのもしけれ。

斯くてその夜も明けければ、三人の人々は、斬り殺したる鬼の首を、二つ持たせて歸らんと

戸隠山惡鬼退治と凱陣

戸隠山繪卷(戸隠神社藏)

小高き岩の上に跳び上り、大臣殿を蹴んで立ちたりしは、身の毛もよだつばかりなり。三人の人々之を見て、隙間も無く斬つて懸れば、一敵はじとや思ひけん、大臣殿を目に懸けて、宙を飛んで懸りしが、懸てむづと組み合ひける。二こしも險しき山路を、上になり下になり轉びしを、二人の人々之を見て、隙間も無く斬り給へば、少し弱りて見えけるを、懸て押へて首落しければ、この首虚空に懸り上り、口より火三を吹出し、三人の人々に吐き懸りければ、なかはたまるべきやう無かりけり。鐵の袖を頭四に振り、木陰を求めて彼方此方とし給へば、何處より来りけん、驚・無慮二つ飛び来り、彼五の首を隙間も無く蹴る程に、數千丈深き谷の底へ蹴落しければ、微塵に碎けてま六せむ。三人の人々之を見て、急と忝しと手を合せ伏し拜み給ふ。「今は早思ふ仇は滅しつゝ、急思ふ事無し」とて、木陰に立寄りて少し休らひ給ひしが、程無く日輪入り給へば、素より七月無うして道見えす。さらば今宵はこの山に明せ」とて、木葉を集めて焚火として、八を明し給ふ。籠に在りし者共は、「如何し給ひけん、覺束無し。いさや味ね参らせん」と云、道も見えぬ險しき山を、彼方此方へ尋ね入りける、心の中こそ頼もしけれ。



し給ふが、貞雄申しけるやうは、「今は早思ふ仇は滅し給へば、心に懸る事も無し。とても
事に彼の鬼の住處を見て、故郷の物語にせん」と言ひければ、大臣實にもと思召し、又奥山
に分け入らせ給ひ、彼方此方と尋ね給へども、是こそと思ふ處無し。猶谷を指して下り給へ
ば、此處に大きな岩穴あり。立寄りて見給へば、口には石を疊んで門とし、奥には如何な
る事がありつらんと見えす、數千丈深き谷なり。藤の蔓を傳ひて出でたりとおぼしくて、藤
葛幾重にもあり。入りて見るに及ばねば、「いざや歸らん」と宣へば、二人の人々「尤も」
とて立歸り給ひける。谷に下り峯に登り給ふ程に、歸るべき道を忘れ給ふ。彼方此方と迷ひ
給へども、行く先詰りて岩石のみなり。「如何はせん」とて仰天し給ふが、大臣仰せけるは、
「知らぬ山路に迷ふ時は、谷に隨いて出づれば必ず里有り」と云ふ。いざや水に隨きて出でん。
流を尋ねて出で給ふ。斯かりし處に、麓より尋ね入りたる大勢、彼方此方と尋ね兼ね、聲を
揚げて呼ばはりける。「この邊にきひの大臣殿や在します。蘇我の河磨・紀の貞雄や居給はぬ
か」と聲々に呼ばはる聲、微かに谷へぞ聞えける。大臣不思議に思召し、耳を澄まして聽き給
へば、大勢の聲なり。如何様これは麓に在りし者共が、尋ね來ると思召し、聽て谷より答へ
給へば、大勢の者この聲を聞きとゞけ、谷を指してぞ下りたりける。見れば三人の人々鬼の

首を持ちて座す。喜び勇みて聽て伴ひ奉り、麓に出でさせ給ひける。

信濃國の里人、この由を聞くよりも、扱も有難き次第とて、皆々立出でて大臣殿を拜し奉る。それより聽て大臣殿、「先づ都へ人を上すべし」とて、御内の者一人召して、「如何に汝は都へ上り、事の次第を奏聞申せ。某は明日上るべし」と宣ひて、或在家に入らせ給ひ、暫し休らひ給ひける、御手柄の程こそ由々しけれ。斯くて御使大臣殿の仰せに隨ひ、都を指して上りける。

斯くて都には、大臣殿下らせ給ふ日より、毎日人を出して、大津・粟津・松本の邊迄御迎ひありしが、大臣殿の御使も、程無く潮田の橋に着きければ、彼の御迎に對面して、在りの儘に語りければ、御迎の人々立歸つて、この由斯くと申す。帝も聞召され、御喜びは限り無し。「さらば迎へを出せ」と宣へば、殿上人目出度き事とて、我も／＼と出で給ふ。又大臣殿の御臺所の御方よりも、思ひ／＼に出でさせ給ふ。都より大津・松本・粟津・潮田、野路の篠原迄、馬・車・徒歩・跣足の人々は引きも切らず。都の人々之を聞き、「いざや末代の物語に見物せん」とて出でにけるが、逢坂邊は棧敷を打つて並み居たり。

斯くて大臣殿は「片時も早く上らん」とて、鬼の首を持たせて、次の日信濃國を出で給へば、國中の人民、「扱も忝く候」とて、皆々大臣殿を送り奉りける。眞に由々しき有様なり。斯くて大臣殿近江國安川にて御迎の人に會ひ給へば、皆々馬より下りて色代しよだいはあり。それより信濃國の人民は、御暇申して本國に歸り、喜び合へる事限り無し。

斯くて大臣殿由々しき體にて都に入らせ給ひ、道々の御迎に皆々色代ありて宿所に入らせ、「その儘參内申すべし」とて、大臣殿河磨・貞雄に二つの鬼の首を持たせ、帝へ參内し給へば、内よりの宣旨は、「この度の忠孝は偏に數へ難し。近く參りて戸隱山の物語ども仕れ」とありければ、「忝し」とて御簾近く差寄りて、始め終りの事、女房に酒強ひられし事、鬼の首宙に迷ひし事、住處を尋ねし事、道に迷ひし事、委しく申上げ給へば、君も臣も各々舌を打ちて居給へり。「眞に由々しき手柄なり」とて、大臣殿には信濃國を下され、その上御劔、色々の巻物など取添へてぞ下されける。扱又二人の人々をば、忝くも少將に爲されけり。「有難し」とて御前を立ち、宿所に歸り給ひける。大臣殿仰せけるは、「この度の忠孝は偏に長谷の觀音の擁護に非ずや。いざや參籠せん」とて、二人の少將を引具して、御前に參りて三十三度の禮拜を奉り、扱堂塔一字も残らず建立あり。八十八間の廻廊、四十四間の廊下、佛前の道具を皆金銀を以て磨き立て結構し、末世の今に頽せず、有難かりし事どもなり。

扱大臣殿は急ぎ御下向あり、二人の少將を近付け、「この度の忠孝は擧げて數ふるに違非ず。その恩賞に」とて信濃國の總政所をぞ下されける。二人の人「忝し」とて御前を罷り立ちて、信濃國に下り給ふ。國中の人々は之を聞いて、「この國の安穩なりしも、偏にこの人々の御故なり」とて、國中に在る程の人々、色々の供御物・捧物を持ち、少將殿に参りける。二人の少將立出で給ひ、皆々に對面ありて仰せけるは、「この度この國の鬼神を隨へし事、是も一つは君の御蔭、又は佛神の力なり。さら／＼人間の一分にて及ぶべきとも見えす。然れども勅詔を蒙りたる故にや、思ひの儘に滅びしなり。構へて方々も、勅詔とあるならば、畏れ給ふべし。斯様の變化の物迄も、勅詔には滅ぶるぞかし」と、昔今の物語ありければ、國人承り、「眞に畏れても畏るべきは君の御蔭なり」と、皆々御暇を賜り、己が家々に歸りけり。

扱その後二人の少將は、思ひの儘に家造りして、榮華に榮え給ふ。斯くて大臣殿は信濃國へ下りても益無しとて、都に住み給ふが、眞に由々しき事なりけり。

斯くて帝は彼の二つの鬼の首を觀覽ありて、如何はせんと思召しけるが、「斯様の物末代迄も語り傳へさせん」とて、七條河原に獄門に懸けて曝されける。「誰も／＼君を敬ひ給ふべし」と、見聞く人々も勅詔を畏れ奉れば、愈々君の威勢目出度くして、靡かぬ處も無かりける。

ける。(下卷)

(戸隠山繪卷⁽¹⁴⁾)

註 (1)ならざらんやの誤か。(2)伏羲・神農・黃帝。一説、包犧氏・女媧氏・神農氏。又一説、天皇氏・地皇氏・人皇氏。(3)黃帝・顓頊・高辛・唐・虞。一説、少昊・顓頊・高辛・唐堯・虞舜。(4)養老傳説(後輯、由來譚、地名説話、養老の瀧參照)(5)太平記卷十六に載せ、謠曲田村にも見える。散佚古謠曲千方もある。(6)討手の大將紀友雄が、「草も木も我が大君の國なれば」の歌を送つた爲鬼が四散したのを云ふ。(7)原本きひ。紀の訛か。前の友雄の姓からの聯想であらう。併し紀貞雄が友雄から來てゐるとすれば、きひ大臣は吉備大臣か。(8)(9)(10)(11)謠曲紅葉狩(三六八-三九頁)參照。(12)普天之下莫レ非二王土^ニ、卒土之濱、莫レ非二王臣^ニ。(詩經小雅)。(13)挨拶。(14)上下二卷、作者未詳。

【解説】

所謂戸隠傳説である。同じく鬼神退治説話であるが、形式は單純である。筋立つた説話としての最も古い文獻はやはり謠曲紅葉狩であらうが、戸隠山の鬼退治は、口碑としては別に多田滿仲の武功談乃至鬼切の寶劍説話として太平記に傳へられる事前掲の通りである(二六〇頁參照)。この方が恐らくは古い傳へで、謠曲作者がこれを維茂に作りなしたか、或は最早その頃迄

には維茂の上に轉化してゐたものであらう。維茂は鎮守府將軍平貞盛の養子、世に餘五將軍と稱した。鬼退治ではないがその武勇談は今昔物語（卷二十五）にも載せてある。

戸隱山繪卷（附）の方は又別で、紀（或は吉備か）大臣主従となつて居り、大江山傳説に近い形を取つてゐるが、これは謡曲以後のものたる事は文詞の影響があるのでも明らかで、且謡曲養老と結合せられてゐる。但し口碑としてはこれも別に行はれてゐたものかもしれない。

近松の枹狩劔本地も新歌舞伎十八番の紅葉狩も共に謡曲から出てゐる。

天智天皇の御宇に、藤原千方と云ふ者有つて、金鬼・風鬼・水鬼・隱形鬼と云ふ四つの鬼を使へり。金鬼はその身堅固にして、矢を射るに立たず。風鬼は大風を吹かせて、敵城を吹き破る。水鬼は洪水を流して、敵を陸地に溺らす。隱形鬼はその姿を隠して、俄に敵を拉く。如斯の神變、凡夫の力を以て可防に非ざれば、伊賀・伊勢の兩國、是が爲に妨げられて、王化に従ふ者なし。爰に紀朝雄と云ひける者、宣旨を蒙つて、彼の國に下り、一首の歌を詠みて鬼の中へぞ送りける。

草も木も我が大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき

四つの鬼この歌を見て、扱は、我等惡逆無道の臣に隨つて、善政有徳の君を背き奉りける事、天罰遁るゝ處無かりけりとして、忽ちに四方に去つて失せにければ、千方勢ひを失うて、聽て朝雄に討たれにけり。

（太平記卷第十六、日本朝敵事）

倭 藤 太 怪物退治 (一)

（上略）この鐘と申すは昔龍宮城より傳はりたる鐘也。その故は承平（一）の頃倭藤太秀郷と云ふ者ありけり。或時この秀郷唯一人勢多の橋を渡りけるに、丈二十丈許なる大蛇、橋の上に横りて伏したり。兩の眼は耀いて、天に二つの目を掛けたるが如し。雙べる角尖にして、冬枯の森の梢に不異。鐵の牙上下に生交うて、紅の舌炎を吐くかと怪しまる。若し尋常の人これを見れば、目も昏れ魂消えて、則ち地にも倒れつべし。されども秀郷天下第一の大剛の者なりければ、更に一念も不動して、彼の大蛇の背中の上を荒らかに蹈んで、靜に上をぞ越えたりける。然れども大蛇も敢て不驚、秀郷も後を不顧して、遙に行隔たりける處に、怪しげなる小男一人、忽然として秀郷が前に來つて言ひけるは、我この橋の下に住む事已に二千餘年也。貴賤往來の人を量り見るに、今御邊程に剛なる人未見。我に年來地を争ふ敵有つて、動もすれば彼が爲に被惱。可然は御邊我が敵を討ちて給ひ候へ」と懇にこそ語らひけれ。秀郷一義も不謂、「仔細有

るまじ」と領狀りやうじやうとして、則ちこの男を前に立てて、又勢多の方へぞ歸りける。

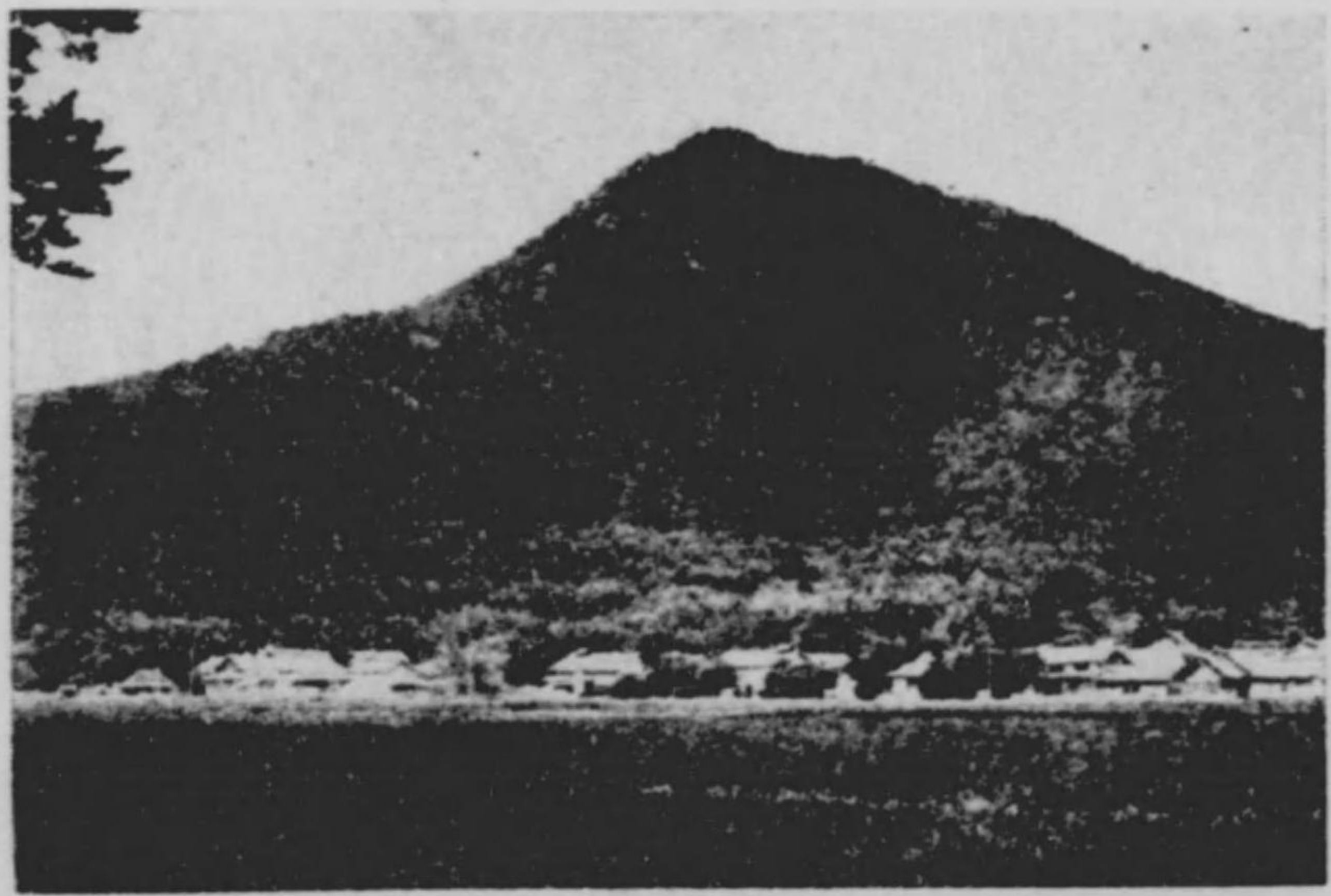
二人共に湖水の波を分けて、水中に入る事五十餘町あつて、一の樓門あり。開いて内へ入るに、瑠璃の沙厚く、玉の登いさご暖あたかにして、落花自ら繽紛ひんぱんたり。朱樓紫殿玉の欄干、金を鏤こじりにし銀を柱とせり。その壯觀奇麗未だ曾て目にも不見、耳にも聞かざりし所也。この怪しげなりつる男先づ内へ入つて、須臾しゆゑんの間に衣冠を正しくして、秀郷を客位きやくゐに請す。左右侍衛の官前後花の粧よそひ善盡し美盡せり。酒宴數刻に及んで、夜既に深ければ、「敵の可よすべ寄程になりぬ」と周章しゆしやうて騒ぐ。秀郷は一生涯が間、身を放たで持ちたりける五人張に、關弦せきげん懸けて嚼くひ濕し、三年竹の節ふし近なるを十五束三伏そくみつぶせに拵こしらへて、鏃やじりの中子なごこを筈本迄打通はずもとにしたる矢、唯三筋を手挟たばせみて、今や今やとぞ待ちたりける。

夜半過ぐる程に雨風一通り過ぎて、電火の激する事際無し。暫くあつて比良の高峰たかねの方より、松明たいまつ二三千が程二行に燃えて、中に島の如くなる物、この龍宮城を指してぞ近づきける。事の體ていを能くく見るに、二行に點ちばせる松明は、皆己が左右の手に點ちばしたりと見えたり。あはれ是は百足ひか蚊ごの化けたるよと心得て、矢頃やがた近くなりければ、件の五人張に十五束三伏、忘るゝばかり引絞ひきぢりりて、眉間まへげんの眞中まんなかをぞ射たりける。その手答てこたへ鏃やじりを射る様に聞えて、筈はずを返してぞ不立たごり

ける。秀郷一の矢を射損じて、不ふ安思あなごころひければ、二の矢を番ばんひて、一分も不ふ違態ちがひと前の矢所やがたをぞ射たりける。この矢も亦前の如くに躍り返りて、是も身に不ふ立けり。秀郷二つの矢をば皆射損じつ、頼むところは矢一筋也。如何せんと思ひけるが、屹きつと案あんじ出したる事有つて、この度射んとしける矢先に、唾つばを吐懸つげけて、又同じ矢所をぞ射たりける。この矢に毒を塗りたる故にや因りけん、又同じ矢所を三度迄射たる故にや因りけん、この矢眉間の直中たんなまを徹りて、喉のどの下迄羽ぶくら責めてくぞ立ちたりける。二三千見えつる松明も、光忽ち消えて、島の如くに有りつる物、倒るゝ音大地を響かせり。立寄りて是を見るに果して百足の蚊むか也。龍神はこれを悦びて、秀郷を様々さまざまに待遇もてなしけるに、太刀一振、卷絹まきぬ一つ、鎧一領、頸結くびむすひたる俵一つ、赤銅の撞鐘つづね一つを與へて、「御邊の門葉もんえふに、必ず將軍になる人多かるべし」とぞ示しける。

秀郷都に歸つて後、この絹を切つて使ふに更に盡くる

俵 藤 太



三 上 山 (郡洲野縣賀滋)

事無し。依は中なる納物を、取れどもく盡きざりける間、財寶倉に満ちて、衣裳身に餘れり。故にその名を依藤太とは云ひける也。是は産業の財なればとて、是を倉廩に收む。鐘は梵砌の物なればとて、三井寺へ是を奉る。文保二年(10三井寺炎上の時、この鐘を山門(11)へ取寄せて、朝夕是を撞きけるに敢て少しも鳴らざりける間、山法師共、惡し、その義ならば鳴るやうに撞けとて、撞木を大きに拵へて、二三十人立懸りて、破れよとぞ撞きたりける。その時この鐘の吼ゆる聲を出して、「三井寺へ行かう」とぞ鳴いたりける。山徒いよく是を惡みて、無動寺の上よりして、數千丈高き岩の上を、轉ばかしたりける間、この鐘微塵に碎けにけり。今は何の用にか可立とて、その割れを取集めて、本寺へぞ送りける。或時一尺許なる小蛇來つて、この鐘を尾を以て扣きたりけるが、一夜の内に又本の鐘になつて、疵付ける所一つも無かりけり。されば今に至る迄、三井寺に有つてこの鐘の聲を聞く人、無明長夜の夢(12)を驚かして、慈尊出世の曉(13)を待つ。末代の不思議、奇特の事ども也。

(太平記卷第十五、三井寺合戰並當寺撞鐘事(依藤太事))

註

(1) 朱雀天皇の朝の年號。(2) 承諾して。(3) 普通の弦に絲を巻きその上に漆をかけたもの。(4) 鐵の籠に入つた部分。(5) 射當てるに程合の所。(6) 矢の狙ひを定めた所。(7) 矢の羽の部分まで深く。(8)

一門。(9) 寺院。(10) 十月。後醍醐天皇の朝。(11) 比叡山の山門。(12) 悟りを得られぬ煩惱。(13) 彌勒菩薩の出現の時。

粟津冠者

園城寺(1)鐘者、龍宮鐘也。昔時代不分明、粟津有男、號粟津冠者、建三立一堂、欲鑄鐘、爲尋鐵下(2)向出雲國。渡海之間大風俄起浪入船。乗船之輩連聲叫喚。其時小船一艘、小童取楫出來云、主人可乘此船、不然可入海云々。乍迷惑、乘移之間、風浪忽然而止。本船於此處示可待之由、小船入海底、思之間到龍宮。宮殿樓閣不可說云々。龍王出逢云、爲驩敵從類多被亡了。今日殆可被害、仍所迎申也。時漸至可然者、一矢可射給云々。冠者諾之、昇樓相待之處、敵大蛇引率若干之眷屬來臨。向ふさまに鎗矢にて射る。入口中舌根を射切つて、喉下に射出畢。依之大蛇退歸之間、追ひさまに又射中程畢。爰龍王出來喜悅云、此悅には雖何事、隨願可與云々。冠者云、雖造一堂、未鑄鐘、仍爲尋鐵下向出雲國之間不慮所令參仕也云々。龍王甚安き事なりとて、龍宮寺に所釣之鐘を下して與之畢。歸粟

(古事談(第五、神社佛寺))

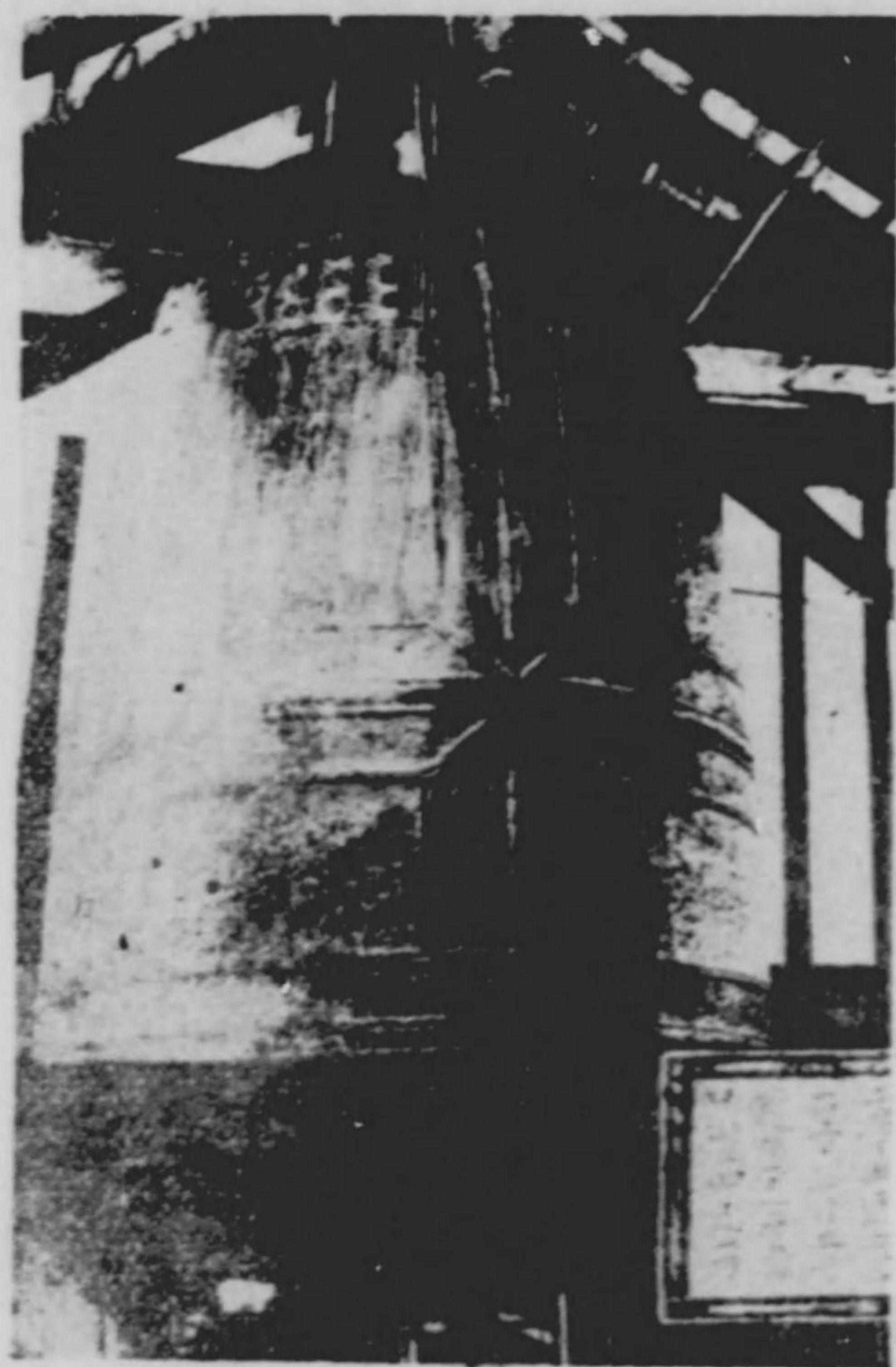
註 (近江國滋賀郡三井に在る。)

三井寺とも云ふ。(鎌倉時代の

説話文學。六卷、順徳天皇の建

暦元年源顯兼作と云はれてゐる。

三井寺の鐘



【解説】

御伽草子依藤太物語(上下二卷)の

上巻にも太平記と同じ傳説を載せ

且それでは即ち三上山傳説で、百足の棲處を三上山と明記してある。謡曲百足及び引鐘にも取材せられてゐる。猿神退治・鬼神退治と種類をなす説話であるが、これは弓術モチーフを特色とし、且如意寶モチーフを含む龍宮行傳説と結合してゐる、頗る童話味が多い。これを將門征伐の史實の投影と觀ようとする古來の解釋は當らない。その原形は既に、粟津冠者大蛇退治即ち園城寺鐘の由來傳説に於て結象してゐる事は、兩者を比較すれば直ちに首肯される。これ

がより有名な天慶の亂の功勳者に吸引せられて轉移しただけである(古人の中でも、伴蒿蹊の閑田次筆卷二に既に論斷してゐる)。その轉移に際して、支那説話の程靈鈺の蜃退治傳説の影響も或はあるべく(粟津冠者傳説に於て既に交渉があるかもしれない)、朝鮮高麗の太祖に關しても類話があり(三輪環氏著、傳説の朝鮮)、共通性が認められる。即ちこの傳説は一個の遊離説話と認め得べきものであるが、同時に粟津冠者傳説は大蛇退治神話の變形と推斷する事が出来るから(神話篇、肥の河上参照)、そして又龍宮行は彦火々出見尊海宮行神話(神話篇、海幸山幸参照)及び浦島傳説(後輯、民俗譚、浦島子参照)の轉化或は影響と見ることが出来るから、本傳説は一面上代神話の傳説時代に於ける複合的變容とも言ひ得る。

龍宮から齋し歸つた釣鐘に關しては、太平記所傳のやうに泣鐘傳説を生み、又これに關聯して、武藏坊辨慶の勇力に結び附いた曳鐘の傳説——三井寺から叡山まで曳すつて行つたのは辨慶だといふ——も生じた。米俵は下野の地名田原に附會して、依藤太の綽名の由來とせられてゐるが、干滿珠の變形たる如意寶(卷絹も同様である)、同じモチーフは先進の傳説・童話に屢々見出されるところである(童話篇、腰折雀解説参照)。

猶秀郷に關しては、將門征伐に就ての武功傳説を別に傳へてゐる。不死身モチーフを含む

七人將門の傳説がこれで、俵藤太物語の下巻に見えてゐる。太平記(卷十六、日本朝敵事)にも出てゐるが、これは鐵身だけで六人の影武者のことは見えない。

案の如く又將門彼の御局へ入らせ給うて、打解けて御物語などし給へり。藤太物の隙より能く見れば、實にも六人には燈火に映る影もなし。本體には影のありと言ふについて、目を澄まし見れば、時々かのこめかみといふ所動きけり。藤太天晴れ幸かなと弓と矢を打番ひ、ひようと射たりけり。もとより秀郷は精兵の巧手、養由が百歩の藝にも越えたる上、矢頃は間近し、何かは以て射損ずべき。小耳の根と思ふ所を、彼方へづんと射通しければ、さしにも猛き將門も、仰向に倒れて空しくなれば、殘る六人の形も、電光石火の如くにて、光と共に失せにけり。(御伽草子、俵藤太物語、下)

歛サウケ縣ケン皇トシ墩コ湖コ中ニ有リ蜃ミツ常ニ與ニ呂ニ湖ノ蜃ノ開フ程ニ靈ニ銑ニ好シ勇ヲ而善射ル。
夢ニ蜃ニ化シテ 爲レテ人ト告ゲテ之ニ曰ク、吾ハ爲ニ呂ニ湖ノ蜃ノ所レル厄セ。君能ク助レバ我ヲ、必ズ厚ク報ゼシ。
東ニ練ヲ者ハ吾也。明日ニ靈ニ銑ニ變シテ弧ヲ助レテ之ヲ正ニ中ル後ニ蜃不レ知ラ所レ之ヲ、後人名ニ其所一爲ニ蜃灘ト。

(淵鑑類函)

鵞ハス退タイ治チ——怪物退治(二)

抑もこの源三位入道頼政は、攝津守頼光に五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戦の時も、御方にて先を懸けたりしかども、させる賞にも預らず。又平治の逆亂にも、既に親類を棄てて参じたりしかども、恩賞これ疎かなりき。大内守護にて年久しうありしかども、昇殿をば許されず。年開け齡傾いて後、述懐の和歌一首詠みてこそ、昇殿をばしたりけれ。

人知れぬ大内山の山守は木がくれたのみ月を見るかな
これに依つて昇殿を許され、正下の四位にて暫くありしが、猶三位を心に懸けつゝ、
昇るべき便無き身は木の下にしひひを拾ひて世を渡るかな

扱こそ三位はしたりけれ。聽て出家して源三位入道頼政とて、今年は七十五にぞなられける。
この人一期の高名とおぼしき事は多きが中にも、殊には仁平の頃ほひ、近衛の院御在位の御時、夜なくおびえさせ給ふ事有りけり。有驗の高僧貴僧に仰せて、大法祕法を修せられけれ

どもその驗なし。御惱は丑の刻ばかりの事なるに、東三條の森の方より黒雲一叢立ち來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これによつて公卿僉議有りけり。去んぬる寛治の頃ほひ、堀河の院御在位の御時、主上しかの如くおびえ魂ぎらせ給ひけり。その時の將軍義



能の鶴
家朝臣、南殿(2)の大床(3)に候はれけるが、御惱の刻限に及んで鳴弦する事三度の後、高聲(4)に「前の陸奥國守源義家」と名乗りたりければ、聞く人身の毛よだつて、御惱必ず愈らせ給ひけり。然れば乃ち先例に任せて、武士に仰せて警固あるべしとて、源平兩家の兵の中を

選ませられけるに、この頼政をぞ選び出されたりける。

その時は未だ兵庫頭にて候はれけるが、申されけるは、「昔より朝家に武士を置かるゝ事は、逆叛の者を退け、違勅の輩を亡ぼさんが爲なり。目にも見えぬ變化の物仕れと仰せ下さるゝ事、

未だ承り及ばず」と申しながら、勅宣なれば、召しに應じて參内す。頼政頼みきつたる郎等、遠江國の住人猪早太(1)に、ほろの風切作(2)いだりける矢(3)負はせて、唯一人ぞ具したりける。我が身は二重の狩衣(4)に、山鳥の尾を以て作いだりける鋒矢二筋、滋籐(5)の弓に取添へて、南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手挟みけることは、雅頼卿、その時は未だ左少辨(6)にて坐しけるが、變化の物仕らんする仁は頼政ぞ候らん」と選み申されたる間、一の矢にて變化の物射損する程ならば、二の矢には雅頼の辨のしや頸の骨を射んとなり。

案の如く、日頃人の申すに違はず、御惱の刻限に及んで、東三條の森の方より黒雲一叢立ち來つて、御殿の上にたなびいたり。頼政きつと見上げたれば、雲の中に怪しき物の姿あり。射損する程ならば世にあるべしとも覺えず。さりながら矢取つて番ひ、「南無八幡大菩薩」と心の中に祈念して、よつ引いて、ひようと放つ。手答へしてはたと中る。「得たりやをう」と矢叫びをこそしてんげれ。猪早太つと寄り、落つる所を取つて押へ、柄も拳も透れくと、續けざまに九刀ぞ刺したりける。その時上下、手ん手に火を燃して、これを御覽じ見給ふに、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにして、鳴く聲鶴にぞ似たりける。怖しなどもおろかなり。

主上御感の餘りに獅子王と申す御劔を下さる。宇治左大臣殿(7)これを賜はり次いで、頼政に

賜ばんとて、御前の階きざしを半ば許り下りさせ給ふ折しも、頃は卯月十日餘りの事なれば、雲居に郭公二聲三聲音づれて通りければ、左大臣殿、

郭公名をも雲居に揚ぐるかな

と仰せられ懸けたりければ、頼政右の膝をつき、左の袖を擴げて、月を少し傍目に懸けつゝ、弓張月のいるに任せて

と仕り、御劔を賜はりて罷り出づ。この頼政卿は武藝にも限らず、歌道にも亦勝れたりとぞ、時の人々感じ合はれける。扱つか彼の變化の物をば、空船うつぼぶねに入れて流されけるとぞ聞えし。

又應保の頃ほひ、二條の院御在位の御時、鶴といふ化鳥禁中に鳴いて、屢々宸襟を惱まし奉る事ありけり。然れば先例に任せて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日餘り、未だ宵の事なるに、鶴唯一聲音づれて、二聲とも鳴かさりけり。目指すとも知らぬ闇夜ではあり、姿形すがたかたちも見えざりければ、矢所やところを何處とも定め難し。頼政が策はかりごとに、先づ大鎬取つて番ひ、鶴の聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。鶴、鎬の音に驚いて、虚空に暫しぞひらめいたる。次に小鎬取つて番ひ、ひいふつと射切つて、鶴と並べて前にぞ落したる。禁中さゞめき渡つて、頼政に御衣を被かぶさせ坐まします。今度は大炊御門右大臣公能公の賜はり次いで、頼政に被かぶさせ給ふ

とて、「昔の養由よは雲の外の鴈を射き（5）。今の頼政は雨の中の鶴を射たり」とぞ感ぜられける。

五月闇名を顯せる今宵かな

と仰せられ懸けたりければ、頼政、

黄昏たそがれ時も過ぎぬと思ふに

と仕り、御衣を肩に懸けて罷出づ。その後伊豆國賜はり、子息仲綱受領（9）になし、我が身三位して、丹波の五箇莊、若狭の東宮川（10）を知行して、さて坐すべかりし人の、由無き謀叛起いて、宮（10）をも失ひ參らせ、我が身も子孫も亡びぬることうたてけれ。（平家物語卷第四、鶴）

註（1）椎と四位に掛く。（2）紫宸殿。（3）鷲の兩翼下の風切といふほろ羽で作つた矢。（4）表裏同色の狩衣。

（5）藤原頼長。十訓抄には後徳大寺左大臣實定。盛衰記には關白基實。（6）木をくり抜いて作つた船。

（7）楚人。弓の名手。（8）雲外聞（9）鴻夜射（10）聲（朗詠集雜下、將軍、白樂天）。（9）國司。（10）高倉宮以仁王。

【解説】

源平盛衰記（卷十六）にも載せ、十訓抄（卷下、第十）にも見え、謡曲鶴及び現在鶴に取材せられてゐる（太平記にも出てゐる事は下に述べる通りである）。これも弓術モチーフの怪物退治で

あるが、前項の三上山傳説とは全然異型で、且恩賞に際しての名歌説話が附隨してゐる。怪物鶴の正體は、十訓抄では小鳥であるが、盛衰記では平家とも稍異なり、「頭は猿、背は虎、尾は狐、足は狸、音は鶴」としてある。平家では怪物と怪鳥と二回になつてゐるけれども、同一傳説の異傳の重複たるや疑を容れない。(近衛院の天養元年四月廿五日及び六月十八日に鶴鳥の鳴いた記事は藤原頼長の台記に見える)形式は晴れの場の手練といふ點で那須與一扇の的の弓術説話(平家物語卷十一・盛衰記卷四十二)と種類をなし、又養由が雁を射た支那傳説にも影響せられてゐる。二の矢を特に用意するモチーフは獨逸のウキリアム・テルの傳説と類型である。

一面この説話型の完成には、一層單純な形からの進化の過程が考へられる。即ち白河院御惱に際しての源義家獻弓の事實(古事談、第四、勇士・宇治拾遺物語、卷四)が平家・盛衰記では前掲本文のやうに傳説化して鳴弦となり、更に本傳説及び同種の平清盛化鼠退治傳説(盛衰記、卷一)に進展したと見る事が出来る。後の穩岐廣有の怪鳥退治(太平記、卷十二)・源義朝の怪物退治(舞曲、伏見常盤)は又その轉化である。

別に官女菖蒲前に關する頼政の名歌傳説(盛衰記、卷十六)が傳へられ、後世これが本傳説と結合して鶴退治の恩賞に同女を賜はつた事となり(太平記、卷二十一、鹽治判官讒死事の挿話。而もこ

れは平曲で語られたとして載せてある)歌舞伎にもこの形が採られてゐる(後輯、美人譚、菖蒲前参照)。

猶歌舞伎では八陣守護城の政清(加藤清正)の夢の場、福地櫻痴の鶴退治等が知られてゐる。

操には頼政鶴物語があり、馬琴の讀本朝夷巡島記中にも本傳説を採り入れて論辯してある。

白河院御寢之後、物に壓はれ御座しける頃、可然て御枕上に可置と有二

御沙汰一て、義家朝臣に被召ければ、眞弓の黒塗なるを、一張進めたりける

を、被立三御枕上一之後、壓はれ御座せざりければ、御感ありて、此弓は十二

年合戦の時や持ちたりしと有二御尋一之處、不覺悟一之由申しければ、上皇頻

りに御感ありけり。(古事談第四、勇士)

主従で鶴に十ヶ所疵をつけ

その間さ牟太櫻につき當り

鶴の尻にくちなはいつも閉口し

鬼 同 丸 怪賊説話 (一)

頼光朝臣寒夜に物へ歩きて歸りけるに、頼信(い)の家近く寄りたれば、公時を使にて、「只今こそ罷り過ぎ侍れ。この寒さこそはした無けれ、美酒侍るや」と言ひたりければ、頼信朝臣折節酒飲みて居たりける時なりければ、興に入りて、「只今見んやうに申し給ふべし。この仰事に喜び思ひ給へ候。御渡り有るべし」と言ひければ、頼光則ち入りにけり。

盃酌の間、頼光廐の方を見遣りたりければ、童を一人縛めて置きたりけり。怪しと見て頼信に、「あれに縛めて置きたる者は誰ぞ」と問ひければ、「鬼同丸なり」と答ふ。頼光驚きて、「如何に鬼同丸などを、あれ體には縛め置き給ひたるぞ。犯し有る者ならば、かく程徒には有るまじきものを」と言はれければ、頼信「實にさる事に候」とて郎等呼びて、猶強かに縛めさせければ、金鎖を取り出でて、能く逃げぬやうにしたゝめけり。鬼同丸頼光の宣ふ事を聞くより、「口惜しきものかな。何とも有れ、今宵の中にこの恨をば復はんずるものを」と思ひ居たりけり。

盃酌數獻になりて、頼光も酔ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。夜更け靜まる程に、鬼同丸屈強の者にて、縛めたる繩金鎖踏み切りて遁れ出でぬ。狐戸(こ)より入りて、頼光の寝たる上の天井にあり。この天井引き放ちて落ち懸りなば、勝負すべき事異儀非じと思ひ躊躇ふ程に、頼光も常人にあらねば早く悟りにけり。落ち懸りなば大事と思ひて、「天井に馳よりも大きに、貂よりも小さきものの音こそすれ」と言ひて、「誰か候ふ」と呼びければ、綱名告りて参りけり。「明日は鞍馬へ参るべし、未だ夜を籠めてこれより馳て参らんずるぞ。某々供すべし」と言はれければ、綱承りて、「皆是に候ふ」と申して居たり。鬼同丸この事を聞きて、此處にては今叶ふまじ。酔ひ臥したらばとこそ思ひつれ。生賢しき事し出でては、悪しかりなと思ひて、明日の鞍馬の道にてこそと思ひ返して、天井を遁れ出でて、鞍馬の方へ向ひて、市原野の邊にて、便宜の所を求むるに、立ち隠るべき所無し。野飼の牛の數多有りける中に、殊に大きなるを殺して路頭に引き伏せて、牛の腹をかき破りてその中に入りて、目ばかり見出して待ちけり。

頼光案の如くに來りけり。淨衣(じ)に太刀をぞ帶きたりける。綱・公時・定道・季武等皆供に有りけり。頼光馬を控へて、「野の景色興有り。牛その數有り。各々牛追ふ者有らばや」と言はれければ、四天王の輩我もくと驅けて射けり。誠に興有りてぞ見えける。その中に、綱如何

思ひけん尖り矢を抜きて、死にたる牛に向ひて弓を引きけり。人怪しと見る所に、牛の腹程を指して矢を放ちたるに、死にたる牛ゆすくと働きて、腹の中より大の童打刀を抜きて走り出でて、頼光に懸りけり。見れば鬼同丸なりけり。矢を射立てられながら、猶事ともせず敵に向ひけり。頼光は少しも騒がず、太刀を抜きて鬼同丸が頭を打ち落してけり。暫時も倒れず、太刀を抜きて鞍の前輪(4)を迫めて突きたり。扱頭は鞅(5)に食ひつきたりけるとなん。死ぬる迄猛く嚴めしう侍りける由語り傳へたり。眞なる事にや。扱頼光はそれより歸りにけり。

(古今著聞集(卷九、武勇第十二))

註

(1)頼光の弟。(2)狐格子。縦横正方に細かく木を組んだ戸。(3)白い布の狩衣。(4)馬具、鞍つぼの前

方。(5)胸繫の音便。馬具、胸より鞍に繋げる組紐。(鎌倉時代の説話文學。二十卷、後深草天皇建

長六年、橘成季著。

【解説】

大江山傳説・土蜘蛛傳説と共に頼光武功傳説の一。鬼同丸は鬼童丸であらうが、半人半鬼の怪人化せられてゐる所から、通俗語源説的解釋に依る「同」の文字が與へられるに至つたもので

あらう。又その形成には、爲朝が鬼ヶ島で獲て臣とした鬼童の聯想も與つてゐるかと思はれる(英雄譚、巡島説話、爲朝島巡り参照)。鬼同丸の首が食ひつく事は大江山傳説と交渉ある事を示してゐる(英雄譚、鬼神退治、酒顛童子参照)。前太平記(卷二十一)ではこの怪童は一層酒顛童子に近接したものと成り、説話の内容も稍複雑に且更に進展して來てゐる。又、この怪童は一面、所謂怪童の金太郎(童話篇、金太郎参照)と相通するものを有してもゐる。

場面が市原野である事と、同じ怪盜傳説である事から、本傳説は次項の傳説と關係深く、後には兩者の結合をも見るに至つてゐる。

是より乾に當つて一つの岩窟あり。彼處に鬼同丸と云ふ狡童住めり。その先比叡山に在つて、大師坊と云へる人の兒なりしが、天狗道の術を學び、而も力人に勝れ、山上山下の兒法師我意に任せて殺害し、經論を燒き捨て僧坊を打破り、一山の佛法を破滅せんと企てける程に、遂に山を追ひ出され、彼の岩窟を構へ、その中に方一丈ばかりの石あり、その上に坐して、常に山々の大天狗小天狗を語らひ、晝夜佛法破滅の謀をなす。(前太平記卷第二十一、市原野狡童爲三源頼信一被虜事)

鬼 同 丸

袴

垂

怪賊説話

(二)

今ハ昔、世ニ袴垂ト云フ極キ盗人ノ大將軍有リケリ。心太ク力強ク足早ク、手聞キ思量賢ク、世ニ並ビ无キ者ニナム有リケル。萬人ノ物ヲバ隙ヲ伺ヒテ奪ヒ取ルヲ以テ役トセリ。ソレガ十月許リニ衣ノ要有リケレバ、衣少シ儲ケント思ヒテ、可然キ所々ヲ伺ヒ行キケルニ、夜半許リニ人皆寢靜マリ畢テテ、月ノ朧ガ也ケルニ、大路ニスゞロニ衣ノ數着タリケル主ノ、指貫ナメリト見ユル袴ノ喬挾ミテ、衣ノ狩衣メキテナヨ、カナルヲ着テ、唯獨リ笛ヲ吹キテ、行キモ不遺ラ練リ行ク人有リケリ。袴垂コレヲ見テ、コレコソ我ニ衣得サセニ出來タル人ナメリト思ヒケレバ、喜ビテ、走り懸リテ打臥セテ衣ヲ剝ガムト思フニ、怪シクコノ人ノ物恐シク思ヒケレバ、副ヒテ二三町許リヲ行クニ、コノ人我ニ人コソ付キニタレト思ヒタル氣色モ无クテ、彌ヨ靜ニ笛ヲ吹キテ行ケバ、袴垂試ミムト思ヒテ、足音ヲ高クシテ走り寄りタルニ、少シモ騒ギタル氣色モ无クテ、笛ヲ吹キ乍ラ見返リタル氣色、可取懸クモ不_ハ思リケレバ走り去キヌ。

此_カ様ニ數度此_ト様彼_ト様ニ爲ルニ、塵許リ騒ギタル氣色モ无_ナケレバ、コレハ希有ノ人カナト思ヒテ、十餘町許リ具シテ行キヌ。然リトテ有ラムヤハト思ヒテ、袴垂刀ヲ抜キテ走り懸リタル時ニ、ソノ度笛ヲ吹キ止メテ立返リテ、「コレハ何者ゾ」ト問フニ、警_トヒ何ナラム鬼也トモ神也トモ、此_カ様ニテ唯獨リ有ラム人ニ走り懸リタラム、然マデ怖シカルベキ事ニモ非ヌニ、コレハ何ナルニカ、心モ肝モ失セテ只死ヌ許リ怖シク思エケレバ、我ニモ非_デ被_ニ突_ニ居_ニヌ。「何ナル者ゾ」ト重ネテ問ヘバ、今ハ逃_ニグトモ不_レ逃_ニマ_ニジカメリト思ヒテ、「引_ニ剝_ニ候_ト」ト「名ヲバ袴垂トナム申シ候」ト答フレバ、コノ人、「然カ云フ者世ニ有リトハ聞クゾ。危フ氣ニ希有ノ奴カナ。共ニ詣_テ來_ト」ト許リ云ヒ懸ケテ、亦同ジ様ニ笛ヲ吹キテ行ク。

コノ人ノ氣色ヲ見ルニ、只人ニモ非ヌ者也ケリト恐_テ怖_レテ、鬼神ニ被_レ取_ルト云フラム様ニテ、何モ不_レ思_ハデ共ニ行キケルニ、コノ人大キナル家ノ有ル門ニ入りヌ。脊_ヲ履_テ乍_ラ延_ニ上_ニ上リヌレバ、コレハ家主也ケリト思フニ、入りテ即チ返リ出デテ袴垂ヲ召シテ、綿厚キ衣一ツヲ給ヒテ、「今ヨリモ此_カ様ノ要有ラム時ハ參リテ申セ。心モ不_レ知_ラム人ニ取り懸リテハ、汝_ハ不_レ被_レ誤_ナ」トゾ云ヒテ内ニ入りニケル。ソノ後コノ家ヲ思ヘバ、號_ニ攝_ニ津_ニ前_ニ司_ニ保_ニ昌_ト云フ人ノ家也ケリ。コノ人モ然也ケリト思フニ、死ヌル心地シテ生キタルニモ非_デナム出_デニケル。ソノ後袴

袴

垂

垂被^{トハラレ}捕^ツテ語りケルニ、奇異^{オチイ}シクムクツケク怖^{オソ}シカリシ人ノ有様カナト云ヒケル也。

コノ保昌朝臣ハ家ヲ繼ギタル兵^{ツバモノ}ニモ非ズ。致忠^{チウチュウ}ト云フ人ノ子也。而ルニ露家ノ兵ニモ不^レ劣トシテ、心太ク手聞キ強力ニシテ、思量ノ有ル事モ微妙^{ミウミョウ}ケレバ、公モコノ人ヲ兵ノ道ニ被^レ仕ルニ、聊^{イサ}カ心モト无^ナキ事无^ナカリキ。然レバ世ニ靡^ヒキテコノ人ヲ恐^{オソ}ヂ迷^{マヨ}フ事无^ナ限^リ。但シ子孫ノ无^ナキヲ家ニ非^ズ又故ニヤト、人云ヒケルトナム語り傳ヘタルトヤ。

(今昔物語卷二十五、藤原保昌朝臣値^ニ盜人袴垂一語第七)

註 (1) 脱文か。宇治拾遺には「……と云へば、何者ぞと問へば、字袴垂となむ言はれさぶらふと答ふれば」とある。(2) 縁。

〔附〕

鞍馬詣^{マウマ}の者の、夕暮に市原野を過ぎけるに、盗人に行き遭ひて、着たる物剝^ヒぎ奪^ズられて、剩^{あまり}へ疵^{きず}を負ひて侍ると、人の語るを聞きて、慶算^{ウツロサン}が詠^{ウタ}み侍りける、

夕暮に市原野にて負ふ疵は暗紛^{くらみ}れ*とや云ふべかるらむ

(古今著聞集卷十二、偷盜第十九)

註 *「鞍馬切れ」に掛けた洒落。

〔解説〕

宇治拾遺物語(卷二)にも載せてある。保昌は大江山傳説で活躍する所謂一人武者で頼光兄弟の伯父、その逸話は古事談・宇治拾遺・十訓抄等にも出てゐるが、本傳説が最も有名である。その兄保輔が大賊であつた事は江談抄第三(雜事)・續古事談(第五、諸道)等に見え、これが何時か袴垂と合體して袴垂保輔と云ふ名で呼ばれ、更に前項の傳説に影響せられて本傳説の展開した場所を市原野と傳へられるに至つた。従つて、市原野のだんまりとして演ぜられる歌舞伎の場面、鬼童丸まで加はつてゐるのは不思議ではない。猶市原野に盜賊の横行した事は前項傳説の他、〔附〕の記事に依つても知られる。又、袴垂が虚死してゐたのを、馬上で通りかゝつた平貞道が油断せずに過ぎた爲、その民に懸らなかつた話が今昔物語(卷二十九)に出てゐる。

保輔 爲^ル三強盜^ノ主^ト事

被^レ命^ゼ云、致忠男保輔、保昌是強盜主也。事發覺^{シテ}繫^ガ獄^ニ之、致忠到^リ獄、召^ニ出^シ其身、以^テ己^ノ膚^ニ觸^ル其身云々。

(江談抄第三、雜事)

熊坂長範——怪賊説話(三)

I

(上略)斯かりける處に、父子三人(註)眞黒に鎧ひ、牛若の枕上に立寄せ給ひ、嬉しくも幼心に思立つて、吉次が太刀を擔いで奥へ下るものかな。構へて吉次・吉内・吉六兄弟三人が申さん事を、我々父子三人の言ふ事と思ひ、西を東、北を南とも背くべからず。吉次が太刀を擔いで奥へ下り候へ。そよ忘れたり、日本國の盗人共が、吉次が皮籠に目を懸け、青野が原に與力し、夕さりの八つの頃は寄せうぞ、用心よきに仕れ。父子三人の者も、草の陰にて、鐵の楯となるべきなり。斯くてもあらまほしけれども、修羅が始まるに、暇申して牛若とて、立歸らんとし給ふ時、源夢心に、「あら御情無や、なう暫く」と仰せあつて、御鎧の袖に縋ると思召し、兩眼覺めて御覽すれば、御影の袖に取りつき申す。「扱は夢にてありけるぞ。敢無の今の對面

や」とて、流涕焦れ給ひけり。さりながら、慥に御夢想ありけるものと思召し、もとの所に御歸りあり。萌葱匂の御腹巻を、草摺長にさつくと召し、上帯結つてちやうど締め、こんねんどうの御腰の物を、一文字に御差しあり。筭抜きて枕と定め、鬢切の御佩刀を、腹の上はどうど置き、左手の足を差延べ、右手の足を屹と立て、左手の御目のまどろむ時は、右手の眼が天井を、はつたと蹴んで宿直をしてこそ臥されけれ。

扱も青野が原に、與力仕る盗人共は誰々ぞ。先づ一番に越後と信濃の境なる、熊坂長範親子六人坐する。善光寺なる南大門のゐばらかひの右馬丞、五町の與次、さいぐちの七郎、はつ田の刑部、かいつかみの鷺次郎、窓を覗くは明盲、宵に塗つたる生疔を、曉走る螻蛄次郎、田樂が窪には、友を迷はず狐三郎、同じく次郎、伊豆の御山には、やげ下の小六、富士に坂東次、坂東六、この者共を先として、大將七十餘人、その外都合小盗人、三百人に過ぎざりけり。大幕三重に引かせ、大筒大瓶かき据ゑ、我等が寶を飲まばこそ、吉次が皮籠を飲むなるに、飲めや唄へやさめけとて、舞うつ唄うつ酒盛をする。

斯かりける處に、熊坂長範は東西の鳴りを鎮め、面々は、何と定むる方も無うして酒を參るぞ。いでく長範が、盗みし始めし由來を語つて聽かせ申さん。某が親にてさふし人は、越

後と信濃の境なる、熊坂と云ふ所に、唯佛のやうなる全人(なり)なり。某は如何なる佛神の計らひぞや、七歳の年、長野郷といふ所にて、伯父の馬を盗み取つて、ならば飯田の市にて賣つたるに、些(ち)とも仔細が候はず。それよりも盗みは、資本(もと)も入らぬ良き事と思ひ定め、日本國を走り廻つて盗みをするに、一度も不覺(なげ)をかかず。斯くて長範は、子を五人持つて候が、何れもよい能(のう)を持つて候。太郎は書強盗が上手、次郎は夜討ちが上手、三郎は忍びが上手、四郎は馬をよ(のう)く盗みさふ。五郎は人を拐へ取つて、あの佐渡が島へ賣りさふ者。彼奴原は一期過ぎうする能を皆持つて候。七歳の年よりも、不覺をかかぬ長範が、今夜胸こそ騒ぎ候へ。天晴三百七十餘人が中に、才覺廻つたる人や坐すらん、吉次が宿へ打越え、内のけこ(を)をそと見て御戻り候へかし。人多きその中に、伊豆の御山のやげ下の小六、某見て參らんと言ふまゝに、柿の篠懸飾磨(のう)の兜巾、前僅かに引冠うで、青幕の君の長の門外に寄つて、大音揚げて呼ばはる。熊野山の山伏佛法修行のその爲に、奥松島へ下るなり。山伏は十人に餘つてさふぞ。今夜一夜の陪堂(ばいどう)「たべやつ」と呼ばはつて、内のけこを靜かに見て通る。稍遙かに候ひて、内よりも米の俵を投げ出す。

小六屹と見て、物への門出に、繩かゝりたる物は忌々しと存すれば、腰の刀をひん抜いて、

掛繩はらりと切つて棄て、米を少し取り、青野が原に走り歸つて、中の座敷に噓ど居て、二の息をほつとつく。長範これを見て、「扱如何に、やげ下殿」小六聞いて、「得物は幾らもさふ物、八十四の皮籠を切戸の脇に積んだるは、只寶の山の如し。四十二疋の雜駄、三疋の乗馬、何れも良い馬にて候。三十餘人の兵士の者、弓胡籙太刀刀おつ取り添へ、用心する顔には見えて候へども、胴突を當つるものならば、彼奴原は縁の下へ隠れうす。馬も皮籠も



(繪圖樂能) 坂

熊が、爰に大事の事が候」「今に始めぬやげ下殿の、大事とは何事ぞ」小六聞いて、「いや語らせて聞召されよ。」

古は伴れても下らぬ十六七の初冠(はつむす)が候。このわつばが衣裳の體を、あら〜語つて聞かせ申さん。先づそつと見たる所は、色白く尋常なるが、肌には鈍金をひつ違へて着て候。着たる直垂は唐絹をもつて、地をば山鳩色に空色に一刷はいて、十八五色の絲を以て、物の上手が縫物を

縫ひて候。先づ左手の紐付に、齋垣・鳥居・社壇を縫ひ、右手の紐付には、たけくらべに杉を三本縫うて、源氏の氏神白鳩が、十二の飼子を飼ひ連れ、羽節と羽節をくひ違へ、ばつと立つては颯と下り、舞ひ遊んだる祝ひの様を、あり／＼と縫うて候。後の菊綴には、北山殿(10)の山莊、住吉のすゐびん(永)、御室の御所の景氣をあり／＼と縫うて候。扱又袴を下りに、しぐせいぐわん(四)を學んで、唐土の猿も千疋、日本の猿も千疋、唐土の猿は大國なれば、せいを大きう面を白く縫うて候。日本の猿は小國なれば、せいを小さく面を赤く縫うて候。日本と唐の潮境の、ちくらが沖といふ所にて、唐土の猿は日本へ越さんとする、日本の猿は唐土へ越さんとする、越さう越さじの、がまのさう(降)の所をば、あり／＼と縫うてさふ。扱又袴の蹴廻しに、岩に松、鶴に龜、堰に懸る川柳、沖の浪がどうど打つて颯と引いて行く、潮境を縫うてさふ。着たる腹巻は、これは萌葱緘なり。世の常の腹巻は草摺を八枚下ぐるが、この草摺は十二枚、十二枚の草摺に、白金黄金を以て、薬師の十二神を、いが／＼と現はす。差いたる刀は皆黄金作りなり。とつつけ鞘口に、俱梨迦羅不動明王の、瀧壺へ飛んで下り、劔を呑うだる所を、あり／＼と彫つてさふ。表の目貫は不動の體、裏の目貫は鞍馬の大悲多聞の御神體を現はす。下緒には法華經の七の卷藥王品を、三流れ組んで候。持つたる太刀は二尺六寸か七寸かと覺えたり。切羽股よ

せ、うんどろ(1)兜金、眞の目貫虚目貫、せめ芝引(1)石突・皮先に至る迄、上品の黄金にて、ひらめき立つて見えてさふ。着たる烏帽子は、六波羅様の當世向きの、粒の些と荒らかなるを、一くせみくせませ、雛形にあひをあらせ、櫛形をいが／＼と、一撓めためて、左へ折つた烏帽子なり。鬢の髪は縮んだり、眉の毛は刈つたり、昨日か今日の山出で、このわつばが有様を、物によく／＼譬ふれば、木ならば朱檀、鳥ならば鳳凰、金ならば沙金、昔を採るならば源氏の大将、當世様を採るならば、清盛・宗盛の御公達で坐すが、繼母の仲に憎まれ、東と聞いて吉次を頼んで奥へ下ると覺えたり。このわつばが目の中を、唯一目見てさふが、油斷するものならば、三百七十餘人の、盗人の細首は助かり難く見えてさふ。長範暫く打開いて、「やげ下殿の物語こそ、さら／＼氣も散せぬ事にて候へ。さりながらそのわつばが何とも逸れかし、例の長範が八尺五寸の棒を持つて、揺り開いて唯一打の勝負さふ。夜は何時ぞ」「はや八つの頃になつて候」「時こそよけれ人々、早うつ立て」と云ふ儘に、手んでに松明點し連れ、青墓の君の長の門外へ、のゝめき立つて寄する。

さる間熊坂太郎、胴突を取つて、どう／＼と當つる。源聞召し、あは夜盜よ、と思召し、わざと表の蔀を、二三間取つて縁より下へ投げ落し、上なる蔀を下しかけ、寄する盗人を今や遅